

明治三十五年四月十五日發行

北辰會 雜誌



第參拾壹號



第四高等學校北辰會

第三十一號目次

論 說

道義の進歩につきて
歌人としての和泉式部（承前）
當今の一大時弊に就きて
社會問題を論ず（完）

雜 錄

讀書雜誌
“Shall” and “Will”
公法上臣民の三大義務
能登半島
讀史餘憤

文 苑

夢ばかり
向山の悟
壽雪岳太田先生七十序

森内 政昌
八波 則吉
宮北 篤治
愛 緑 生

浦井 恒堂
E. Snodgrass
本間 好茂
平岡 鳩園
くわうあん生

山 咲
柴波 愚移
村上 函峰

登伊振橋記
擬源廷尉與江因州書
漫 錄
我が春
和歌俳句

雜 報

獨逸詩文會を迎ふ、音樂會を迎ふ、丈夫兒の本領、禁酒令に寄す、寧ろ愧死すべし、乞丐兒、茨木先生送別會、嗚呼堀口眞全君、瘦狗長吠録、笛聲絃聲、劍舞局外觀、秋季大運動會記事、運動會雜俎、嘲罵篇、各部報告

寮 報

數 件

掀天童子
微子學人
嶺 南
大内月仙

北辰會雜誌第三十一號

論 說

道義の進歩につきて

森 内 政 昌

古往今來何れの時に在つても、世の木鐸を以て自うゝ任じて居る様か人は、口を開けば常々時勢の日に非あるを慷慨して居る、然しながら時勢が常に日に非であつて道義の改良刷新といふことがなかつたならば、吾人れ生活の將來は實に暗澹たるものであつて、未來の光明は何れれ邊にも求むべからざるものであらふ、實際彼等の唱ふるが如く、道義は常に沈淪停滯して進まぬものであふふ、はた道義は無論日を追ふて進歩して居るけれども、一たび之を緩にすれば忽ちにして舊態に退歩するの恐れあるが故に、しかく獎勵的消極的の警戒を與へつゝあるのであふふ、吾人は後者の寧ろ事實あることを信ずるのである、本來社會が進歩發達するにつれて、その風俗習慣は益々優雅となり、制度は愈々完全し、法律は漸次整頓せられて來るのであつて、所謂「人文の發達」といふこの存在は拒否すべからざる事實である、此「人文の發達」と共に「道義の進歩」も相並馳して進むのであふふ、言を換ゆれば、吾人の祖先よりもより多く幸福となり、より多く文化して來たけれども、吾人はそれと同時にこの道義れ上にあつても、より多く進歩し、

より多く發達したのである乎、是れ吾人の目前に提供せられつゝある問題である、かゝる問題を解釋するには、吾人は勢ひ先づ「道德」そのもの、成分を解剖しなければならぬ、道德あるものは蓋し相離るべからざる二箇の要素より成つて居るので、甲を「道德的形式」といへば、乙は「道德的内容」といふべく、前者を「道德的智識」といへば、後者は「道德的意志若しくは感情」(韓圖は意志に屬すとなし、バットラアは感情に屬すとす)といふべきものであつて、その所謂道德的形式若しくは道德的智識とは道德の現象世界に顯現する形式、換言すれば道德的行動の方式であつて、之を心理的にいへば吾人の智性の與る所のものである、故に此の道德の要素は人類の智識の進歩發達すると共に進歩發達するのであつて、單に此點よりして道德を考察したならば吾人は吾人の祖先よりも、文明の民は野蠻の民よりも遙かに道德の進歩をなしたれであつて、古の大哲ソクラテス、プラトオンといへども遙くに及ばざる所なきにしもあらずである、第二の要素である「道德的内容」若しくは「道德的意志」とは所謂天賦の倫理的靈性であつて、道義の實在界にその根基を有する要素である、心理的に之をいへば吾人の倫理的意志若しくは感情即是であつて、倫理實踐の上に於ける動力である、此道義の第二の要素は進歩するものなりや否や、その性質の上より之を考察し來れば、吾人は寧ろ古今同一にして決して發達も進歩もなき種類に屬するものとなさなければならぬ、たゞその私欲に雍蔽せられてその光明を完全に發揮する能はざることは或は之あらんも、此道德的意志若しくは感情の世の進歩と共にその動力を増大するといふことは、餘程に研究を経ざれば容易に斷言することを得るのである、

象 德

道象の方面

形式

倫理的智識

行動

實在の方面

内容

倫理的意志(感情)

動機

夫故に吾人が道德的意志力といふ方面よりして、道義の進歩を確立するのは蓋し容易ではないけれども、その道德的智識即ち道德的行動の形式といふ方面より之を見れば、道德の寧ろ進歩するもれなることは明かのである、然るに古來道德を談するもれは主として道德の第二の要素に主きを置くが故に常に「今人古人に及ばず」となすのであるけれども、道德の第一の要素即ち道德的智識といふ點を輕々看過するのは大なる世上の通弊であつて又大なる誤謬である、若し單純に道德的意志力即ち善に服従し惡を排斥する意志力のみであつて、何が善にして何が惡かりや又如何ある場合には如何に行動すべきやを教ふる倫理的智識にして缺乏して居つたならば、それ動機は善美あるべきも、その行動は常に正しき形式を有する能はずして、常に思はざる茶毒を社會に派及せしむるの恐れがある、確かに道德は以上の二要素を必要とするのであつて、ある實利論者の説くが如くに道德を以て單に第一の要素即行動の形式に限るのは又同トく極端の學說であるに相違ないけれども、ミル、ベンサムの輩が興りて兎にも角にも道德の單に倫理的意志若しくは感情にのみ在りと考へたる古來の迷霧を打破したるの效績は決して埋没すべからざるものである、未開の蠻貊であつても倫理的意志若しくは感情(伊藤仁齋之を善々惡々之情といふ)に至つては充分に之を有して居るものがあつても、未だ自他の關係、社會と個人との關係、現在と未來との

關係等につきて、明りなる智識を有しないが爲めよその行動は決して善といふべからざるものがある、實際眞に自分が善であると處ふ思のものを行ひ、而うも其行動の形式や誤れる場合が多いといふのは、倫理的意志若しくは感情ありて而かも倫理的智識を缺く致す所である、こゝる倫理的意志若しくは感情の醇乎たるものがあつても、その行動の正路を逸出せるものは眞の徳と稱することは出来ぬ、此等は寧ろ「無辜」と稱すべきもので、吾人が憐み愛すべき對象たり得るものであるけれども、之を「徳」と稱して吾人が尊敬し貴重すべき對象では決してないのである、夫故に「徳ある人」とは醇乎たる先天賦性の倫理意志若しくは感情を有すると同時に、少くも其時代に於ける常人以上の智識を有する人でなければならぬ、孔子もソクラテイスも古代の徳ある人の中に指を屈せらるゝ人であるが又その時代の常人以上は智識を有して居つた人である、少くともその倫理的智識に至つてはその時代にありて最も高尚なる域に進んで居つた人である、しく考察し來つたならば、愚人たりともよく醇乎無垢の倫理意志若しくは感情は有し得べきも、愚にして徳あるを得べからざる理由を明りに知るを得るのである、此點に於て單に物を知るといふこと、即智識を研磨するといふことの修徳の一大要素たることを知るべき譯である、かく智識の發達につれて、社會の事情其他凡百の事物の關係の明かになると同時に、吾人の倫理的智識も發達して、よく事情に斟酌ある行動形式を知り得るに至るのであつて、此點にありては徳は社會の進歩智識の發達と共に同く進歩發達するのである、プラトオンは婦人共有説を主張し、アリストテレイスは奴隸を正當ありと考へた、然るに今の人が眞面目に自分の眞心マコトからしく信じて婦

人を共有し奴隸を賣買したならば、吾人は目して之を如何に評するのであらうか、吾人は決して呼ぶに道德的なりとの言を以てすることを得ないであらう、此一例を以ても道德的智識といふ點に於て、道德は形式といふ點に於て今人の遙かに古人を駕するあるを知ることが出来る、然しあが吾人のこゝに一考すべき事項がある、かく道德的智識は道德は進歩に必要缺くべからざるものであるけれども道德的智識の進歩發達と共に、其他の智識も發達すべく、所謂狡猾なる智識も増大して反りて罪惡に資するの好鍵輪たる場合も少あらぬのである、吾人若し吾人の生活を考へし來つたならば、吾人は無智によりて罪惡を避くる場合が多く、智あるの故に罪惡を重ぬる場合が又少あらぬのである、蓋し智識は單に善の力たるに止まらずして時としては惡の力たるを得るからである、故に藤樹先生の如きは「才知ありて徳を害ふものは多し、徳の助けとあるものは稀あり」との言をなまて居らるゝ、こゝに於て乎、吾人の問題は智識の進歩によりて結果する道德の進歩と罪惡の増加とは果して如何に比例して居るのであるか、又何れの超過して居らうといふ問題とある、此問題は又至極困難なる問題であつて、世の厭世家は常に暗黒的方面に同情が多いらうして、常に罪惡の増加を以て道德の進歩よりも遙かに超過せりとなし、智識は畢竟罪惡増加の具たるものであつて、文化の發達は道德の頽廢を來すより外なきものとして居る、渠等はホラアツの様に「吾人は祖先の墜落せる子孫」であるを考へ、道義の完美ありし黄金時代は支那にありては三王五帝の古へであり、西洋であつては吠陀の神話時代か若しくはエデンの樂園時代にありと思考し、道義は其後アグニ、プロメトイスの火を人間界に傳へて文化、智識とい

ふことを教ふるに至つて始めて墜落し始めたのであるとなし、我々は宜しく此文明此科學を捨て太古の淳朴なる、狹隘なる分子の少しもあき閑かある泰平ある時代の生活に復歸すべしと教ふるのである、かゝる思想を十八世紀の末葉に鼓吹してたしかに一部の眞理に光明を與へたのはルウッ其人であつた、かゝる厭世の思想は十八九世紀の誠にうるさき科學的文明の餘弊を洞見したので、たしむにうる惡習の存在して居るのであつて、ルウッの如き偉哲の炬眼であつて始めて之を洞觀し、ルウッの如き大人物の聲によりて洋の東西に響き渡つたのであるが、かゝる思想は時勢の鎮痛劑若しくは救濟として之を見るはよけれども、以て直ちに眞理そのものと思ふことは出来ぬ、這般の議論は結局水掛論とあるのであるけれども、吾人はしるく未來を暗黒界に葬り去らんとすることを好まぬのである、むしろ智識の進歩と共に道德の常に進歩して居るのを信するのである、マッケンザイは智識の道德の進歩に貢獻する方面を二つありとして居る、第一は「道德的原理の深遠化」であつて、第二は「義務範圍の擴張」である、今しばらく此二方面よりして、如何に智識が道義の進歩に資するあるやを考察しやうと思ふ、道德的原理の深遠化といふのは智識の發達につれて倫理主義並に倫理觀念の益、深遠なる基礎を有して來るのといふので、更に之を小分して觀察すれば(一)には「より遙かに達する」性質を帶んで來る、といふのは智識が發達すればする程吾人の眼界は愈々廣くなつて、世の東西、時の古今に鑑みて、倫理の原理を律するやうになることである、(二)には「より深く徹透する」性質を帶んで來る、といふのは智識の發達と内省法の發達を促すが故に、心理的により深く人生の生活と觀察とを得るやう

になるのを云ふのである、例へば古代の希臘にあつては、両性欲の節制は單に社會の秩序を保つ爲めなりと考へられ、社會の秩序てふ原理は兩性欲節制の根本主義とせられた、しかく社會の秩序といふことが原理原則であつたらう、若しも社會の秩序維持に有益なりと考へらるゝときには、「婦人の共有」といふことも寧ろ獎勵せらるべきものであると考へられたのである、プラトンは實に這般の説を眞面目に唱道した一人である、ソクラテイスの如きも單に婦人を機械視して居た事はその妻クソッチツペを自己修養の具と考へたので明である、之を要するに古代の希臘にあつては未だ人格といふ深き考へはなつたので、從つてある議論を正當と考へて居つたのである、然るに近世に至りては一層深遠なる倫理主義なる「人格は目的として見るべくして手段として考へべからず」といふ思想が發生し、殊に韓圖によりて特に唱道せられた、是に於て乎兩性欲の節制といふことも漠然たる社會の秩序といふことよりも、寧ろ人格の敬重といふ點よりその原理原則を得來るに至つたのである、更に之を例するからば、古代にあつては慈悲といふことは單に自己の欲を節制して己れの有するもれ若しくは欲するもれを人に與ふるよとを意味して居つたのである、故に贈物と施物とは古代に於ける慈悲發表の唯一の形式であつた、然るに近世に至りては、與へ施をといふとは必ずしも慈悲ではない、といふのは慈悲の原理は單に利己の欲を抑へ人を喜ばすといふことではなく、人の人格を完全なうむるといふことである、故に人に快樂を與ふるといふことが必ずしも慈悲ではない或は苦痛を感せしめてもその人の發達に利するあるか否か慈悲はその處に存在するものであるといふ考へか興つて來て、古代の贈與施物といふよ

りも職業と貸與といふ形式によりて慈悲は發表せらるゝに至つたのである、蓋し贈與と施物とはそれ人の勉強心と獨立心とを損害する恐れがあつて、單に乞丐を製造するに過ぎない、然るに職業と貸與とはその人をして有益の事業に就かしめ而もその獨立心を害せないものである、次に義務範圍の擴張といふのは吾人の智識の發達につれて義務範圍の擴張され来るのをいふのである、小兒はその始め親に對する義務ばかりを意識して居るけれども、その長ずるに従つて朋友教師國家社會等に對する義務を意識するに至る様に、人類の發達くら之を見ても、人類は智識の發達につれて社會の諸種の關係に對する義務を意識するに至るのである、言を換ゆれば智識は自己の關係する範圍をより明らに意識せしむると同時に、又その務めらるべき義務の範圍を擴大にするのである、封建時代には主と僕との關係は今よりも密接であつたお相違ない、然るに此時代にあつては社會の關係が明かに知られなかつた爲めに、主は僕の唯一の保護者であつて、その僕の生命は一に其主人の恩顧によるものと考へ、その他に自己の生存に重大の關係ある社會の事情を知らなかつたのである、従つて僕は一とじに主人を大事と思ふたのであるけれども、今日にあつては吾人は到底かゝる意識を有することが出来ぬ、といふのは吾人は吾人の生命の單に主人のみならず朋友にも組合にも社會にも之を大にしては人類にも關係することを知るに至つたからである、換言すれば吾人は主人に對する義務の外は諸種の義務を有するに至つたからなのである、かく義務範圍の擴張せらるゝに従つて、意志力が次第に寛解せられて來るのも亦己むを得ないので、従つて、今日にあつては主のために一命を抛つといふが如き義烈的例證を見る能はざるのも亦無理

は存いのである、之を要するに文化の發達と共に、一切の活動は調和されてくるので、古代の様に激烈なる義務衝突の場合が少なく、従つて倫理意志の顯はれ方は集注せらるゝといはんよりは、寧ろ放散せらるゝに至つたのである、然しその意志力の放散せらるゝといふとは決して道德の頽廢を證すべきものではなく、反つて道德のその形式に於て發達せることを證するのである、吾人は智識の進歩につれてその行動の形式も、より多く適切に而かも調和的になつたので、従つて激烈なる倫理行動上の衝突は少なくなり、古代の様に義人烈婦が少なくなつたやうに思はるゝけれども、決してそうではない、よくよく之を考察し來つたならば寧ろ道德の進歩を證するものといはなければならぬ、本來義人烈婦の必要であつた時代は、又同時に罪惡を敢てする人の多々存して居つた時代なのであつて、決して泰平無事であるかといつて、道德は頽廢せりといふことは出来ぬ、寧ろかゝる無事ある社會の人民はその生活形式の、より多く道德的圓滿の域に進んだものと考へなければならぬ、然るに往々にして人は、眞理と政略とを混同して、古への今に比して道德の旺盛なりしを唱道するのは蓋し間違つた考へ方であると思ふのである。

(未完)

歌人としての和泉式部 (承前)

八 波 則 吉

第二章 本論上

第一節 春夏秋冬

夫れ和歌は人の心を種として萬の言の葉とぞあけりける。されば落花を見て我身を嘆じ、流水に對して故人を憶ふなど、春風秋月悉く之と主觀的に感ずるは是れ歌人なべての常あり。當に我國の歌人のみならず、歐米の詩人も概して然り。故に苟も文學的著述として著者自身の面影を止めるもの無きは勿論、著作以外に全く作者の隱退せるはケルチンク氏の所謂眞の文學にはあらざるべきあり。然れども又其間に自ら輕重多少の別あり。殊に四季は景物を叙するに於ては、時に客觀的に景物そのものを寫す方法なきにあらず。現に歐米人の詩集中は間々此種の傑作をさへ見るにあらずや。然るに我國の歌人には太古以來此法に據るもの甚だ乏しく、萬葉に至つて只赤人に於て時に或は之を見るのみ。予は嘗て赤人を英の詩人ヘリックに比したる事ありき。蓋し兩者の經歷性質等の似たると同時に客觀的敘事詩の頗る相類似するもの多ければ也。ヘリックが事は姑く措き、赤人が富士山と詠める長歌は純然たる客觀的敘景にして偏く人口に膾炙せる傑作なり。其他かれが

山の端に月のいざよふ夕ぐれは、檜原が上も霞み渡れり

和歌の浦に汐みちくれば瀉をちみ、芦邊をさして田鶴鳴き渡る

等また其例あり。古今時代に至つても僅に躬恒忠岑の外には殆ど此種の見るべき作なく

住の江の松を秋風ふくゝらに、聲うちそふる沖つ白波

雨ふれば笠取山のもみぢ葉は、行きぬふ人の袖さへぞ照る

などは蓋し當時の白眉ならんか。下つて拾遺後拾遺等を見るに、歌人の輩出雲の如しといへども

客觀的に景色を寫したるものは寥々として曉天の星の如く、殊に女流の作者に至つては相摸が

見渡せば波のしがふみかけてけり、卯の花咲ける玉川の里

赤染衛門が

消え果てぬ雪とぞ見ゆる谷川の、岩間をくぐる水のしら波

等二三を除らば殆ど取り出で、論すべきものなかつん。然るに獨り和泉式部が歌集を見るに

春雨の日をふるまゝに我宿の、垣根の草も青み渡りぬ

難波瀉あしの折葉を押分けて、漕ぎ離れ行く蛋の釣舟

雁金の聞ゆるあべに見渡せば、四方の梢は色付にけり

等、詞想共に甚だ質素に、有の儘の景色を描きたるもの其例頗る多しとあす。而して此牀は新古

今に至つて盛に行はれ、俊惠が

春といへば霞みにけりあ昨日まで、浪間に見えし淡路島山

家隆が

霞たつ末の松山ほのくと、波に離るゝ横雲の空

れ如き名作をさへ出すに至りぬ。是に由て之を見れば、和泉式部は女流ながらも、赤人躬恒等と共に此種の和歌の先驅をせりしものか。思ふに新古今集に式部が和歌の二十有五首も入りたるもの、其原因の一は恐らくは此處にあるべし。

然れども、これは只式部が少しく當時の歌人と異りたりといふべき迄にて、未だ以て彼女の特色と

なすに足らず。彼女が手腕の見るべきは、寧ろ是にあらざして彼に在り。彼とは何ぞや、曰く、飛花落葉に對して燃ゆるが如き心情を吐露せるもの、即ちこれにて、四季の景物多きが中に、特に予は左の拾二首を選びぬ。

春

春は只我宿にのみ梅咲かば、うれにし人も見にと來なまし
春の夜はいこそねられね起き居つゝ、守るにとまる物ありあくに
つれ／＼と物思ひ居れば春の日の、目にたつものは霞ありけり

夏

足びきの山時鳥われあれば、今鳴きぬべき心地こそすれ
待たねども物思ふ人はかのづゝ、山時鳥まづぞ聞きつる
眞菰草おなトみきはに生ふれども、菖蒲を見てぞ人も引きける

秋

秋風はけしき吹くだに悲しきに、搔き曇る日はいふ方々なき
花を見て春は心も慰みき、紅葉の折ぞ物は悲しき
頼めたる事はなけれど秋の夜の、月見てぬべき心地こそせね

冬

まどろむを起すともなき埋火を、見つゝはあかく明す頃かな

つれ／＼と眺め暮せば冬の日も、春はいくのに劣らざりけり

數ふれば年の残もなうりけり、老ぬるばうり悲しきはなし
右いづれも／＼句調流麗にして風味によろしく意味また深長にして、餘韻あり。これ優に式部が手腕の凡あらざるを示すに非ずや。更に見よ

憂き事も戀しき事も秋の夜の、月には見ゆる心地こそすれ

の三十一字は、大江千里が名吟「千々に物こそ」に似通ひ

四方山の景色を見れば悲くて、鹿鳴きぬべき秋の夕ぐれ

の一首は、西行法師が傑作「鳴立つ澤」といづれや。「月には見ゆる」「鹿鳴きぬべき」共に、文字に拘泥せずして、思へる儘をす／＼と云ひ出で、しかも甚だしく露骨に陥らずして却て一首の警句となれるは、蓋し當時れ女流作者に多く其比を見ざる所にして、大膽ある式部が特色といふべし。固より此れ特色の中に、後章に於て論ずるが如き、歌躰裝飾不足の缺点是存すべしといへども、外形よりは寧ろ内容に重きを置きたる式部が長所は、慥に此處にも見るべきなり。最後に予は

待つ人の今も來ふばいかせん、踏まゝく惜しき庭の雪かな
を、赤染衛門が

踏めば惜し踏まねば行らん方もなし、散り積む庭の花櫻かな
と相對して中古歌人の雙璧となす。「踏めば惜し」「踏まゝく惜しき」、雪と花とに對する優にやさ

しき女性の眞情、描し出して可憐ならずや。加之も式部や其日、恰も縁に出で、人を待てりき。其人將來に來りあんとす、而して六花繽紛として前庭忽ち珠玉を敷きぬ。戀は人間無形の花、雪は有形自然れ美、その美この花、共に眺めて俱に占めたく、併も兩立し難うらんとす。是に於ての心緒亂れて縷の如く、右思左考、遂に自然れ美を得んとて、「今も來らば如何せん」と心私かに嘆きぬ。あゝ此の「如何せん」てふ一句の中、翫味すれば千萬無量の深意を含むと同時に、和泉式部が文學者として、如何に先天的に美的感念を有せしかを知るに足らずや。

第二節 式部が戀

『この一節は都合に依て茲に略しぬ、讀者幸に之を諒せよ』。

第三節 雜の歌

奈良朝以降、題詠の風盛んにして、四季の叙景は云ふも更なり、戀歌に於てすら、題を設け他人に代り、吾にもあふぬ想を構へて巧に名歌を案出するに至れり。されば概して古今以後の歌人を論じ、其性格を知らんとするに、勢ひ是等作歌以外に、其時に臨み其機に當り、作家自身の眞情を發揮したるものに就て之が品鑑をなさざるべからず。蓋し我國古來の歌學論者が、口を揃へて「特に雜の歌を讀むべし」といへるもの、眞意或は此處に在らん。上來論ずる所に由れば、和泉式部が和歌は、叙情叙景共に天真を流出して、作歌の例比較的僅少ありきといへども、尙ほ且つ之を雜歌と見るの至當あるを以て暫く茲に之を論ぜん。但し予は便宜に従ひ、羈旅、離別、哀傷、雜歌等を一括して廣義に雜歌とせし、之に由て式部が性格並に特色を求めんとする也。さて式部

が歌集を讀んで、先づ怪しまるゝは、賀の歌の極めて少き事にて、一千餘首の中たり或人の子を生みける九日に、乳兒の衣やるとて

七日行く濱の眞砂を數にして、九日さへも數へつる哉
と祝したると、子の日して

引連れて今日は子の日の松にまた、いま千歳をぞのべにいづる
と賀したると、此外僅に一二首あるのみ

(因に記す、賀の歌は多くは謂ゆる作歌にして、古往今來千篇一律あれば、深く注意するにも足らざるべし。)

然るに之を反して、離別、哀傷、羈旅、釋門等れ歌は甚だ多く、就中哀傷、無常の歌に至ては眞に逼り情に訴へ、惻々吾人をして暗涙に咽ばしむるものあり。是れ彼女が特色を知るに於て大に注目せざるべからざるものなり。思ふに式部や、頗る人世の不幸に會す。悲歌の多さもこれがためあり。仍て予は少しく彼女が傳記を語り、以て徐に雜歌の眞相を述べんと欲す。

第一 傳記と人物

中古歌仙三十六人傳にいはく

和泉式部は越前ノ守大江雅致の女(或はいふ權中納言懷平卿の女)にして、母は越中ノ守平の保衡の女(即ち太皇太后宮昌子内親王の御乳母、介の内侍)あり。和泉の守橘道貞の妻とあり、和泉式部と號す。童名は御許九といひ、上東門院の中房たり。云々

詳傳は固より知るに由ありといへども、歌集に散見する所を以て考ふるに、初め式部は和泉の守橘道貞に嫁して小式部内侍を生めり。然るに不幸にして琴瑟和せず、幾何もあくして之と離婚し上東門院に仕へぬ。時に冷泉院第三の皇子、二品彈正尹爲尊親王色を好み式部を通ず。長保四年六月親王の薨するや、忽ちにして第四の皇子、三品太宰帥敦道親王と通ふ。 (和泉式部日記は則ち此の時の記事也) 親王また早く薨す。依て式部は、武將藤原保昌に再嫁し、俱して丹後へ下れり。然るに又もや保昌に忘れられ、再び上東門院の女房となりしが、最後の不幸は遂に彼女の愛子小式部内侍を奪ひぬ。是に於てか悲嘆痛恨措くこと能はず、遂に佛道に歸依して餘命を終りぬ。以上式部が傳記の概要あり。是に由て之を見るに、先づ第一に彼女が性の頗る多情なるを知る。嘗て道貞に忘られて程なく親王に居に通ふと聞かや、赤染衛門は一首を贈つて誠めたりき。曰く移ろはで暫し信田の森を見よ、返りもぞする葛のうら風

然るに式部は敢て意とせず
秋風は凄く吹くとも葛の葉の、うらみ顔にも見えとぞ思ふ
夫れ婦人にして男子に忘れらるゝは人生の一大不幸にあらずや。縱令當時風俗頹廢して、道義を念今日の如くならざりきと雖も、苟も夫に別れて恬として恥ぢず、直ちに去て他に就くとは、嗚呼そもく何たる不躰哉や。衛門は曾て一時の情夫に別れてすく
諸共におきぬる露のあらりせば、誰とか秋の夜を明らさまし
と歎ぜり。然るに式部は

今朝はしも思はん人は訪ひてまし、つまあさねやの上やいかにと
直ちに第二の候補者を誘へり。以て明かに兩女の性質如何を察すべきに非ずや。而して式部は、道貞に別れ、兩親王に別れ、漸く保昌に再醮するを得たるも、彼女の性は尙ほ且つ容易に改むべからず、丹後へ下らんとして其途、うねて忍びて物云ひける男に

われのみや思ひおこさんあぢきなく、人は行方も知らぬもの故
と傳言せり。されば俗説に式部が稻荷へ詣で、雨に遇ひ、田刈る童に褌うりて、翌日其の童を奥の方へ引き入れたるときといへるが如き、或は宇治拾遺物語に、開卷第一に、道命阿闍梨と通ふたる由書けるが如き、甚だしきは鎌倉時代の御伽草紙に、式部其子と通ふとせざるが如き、固より根もなき空言なるべしといへども、亦以て其性行の一斑を窺ふに足るべし、當時の淑女紫式部は、かつて和泉式部が人物を評して、「けしゝらぬ方」といひ、古今著聞集には、小式部内侍を「さるすきもの和泉式部が娘なりければ云々」といへり。如何に好色多淫の人物ありしを知るべし。これ式部が一大缺点にして、實に千歲拭ふべからざる恨事ありとす。

第二 人物と和歌

式部が性行の如し。されば其の和歌も極めて才女的、よして當意即妙、紫式部が所謂「口に任せる」といふも多し。例へば或人れ扇を忘れたるに

はのあくも忘るにたる扇哉、おちたりけりと人もこそ見れ
たきもの少しと乞ひたるに

夢のありあはせなきもの、あかりけり、煙をかりて上りにうばあふひを遣ること

皆人のうざしにすめる其草の、名は何とかやいひて聞かせよ
卵杖をおこせたるに

祈りける心も知れずつくろと、身れうづゑとも思ひけるか
この外

どへとしも思はぬ八重の山吹を、ゆるそといはれ折に來んとや
大方はねたさもねたし其の人に、あふぎてふ名をいひや立てまし
等、いづれり才女、れ句調あらざる

當時恰も一女子ありき。逸氣奔騰、思想縱横、香爐峰の雪といへば簾を褰げ、貧窶を笑へば駿馬の骨を見ずやと罵り、函谷關の故事を歌ひ、于定國が逸話を誦んで、堂々五尺の男子をして遙かに後へに墮若たらしむ。之をこれ清少納言といふ。誠に「一たり顔に、いみじう侍りける人」ありけり。然り而して、閨秀名媛の多きが中に、わが和泉式部は、殊に此の人と友とし好かりしが如し。あゝ雲は龍に従ひ風は虎に従ひ、同明相照し同氣相求む。蓋し兩女の關係かゝりしもれり、非ざるか。試に一二彼等の消息を見んや。

和泉式部

こゝすらすらにすさめぬ程に老いぬれば、何のあやめも知られやはする

清少納言のへし

すさめぬにねたさもねたし菖蒲草、ひきかへしても駒のへりなん
五月五日、菖蒲の根を清少納言にやるとて

これやこの人けひきけるあやめ草、むべこそねやのつまとなりけれ
あへし、清少納言

ねやごとのつまと引ゐる、程よりは、細く短きあやめくさかな
式部又のへし

さはしもぞ君は見るらん菖蒲草、ねみけん人に引きくらべつ、
奇抜の言、輕妙の辭、躍如として口を衝いて出づるにあらずや。中にも「すさめぬ程に老いぬれば」「ねたさもねたし」「細く短き」「ねみけん人に」など、當時兩女を除いて誰か大膽に此の言をなし得るものぞ。蓋し兩女の詩想は常に電光石火の間に發し、彼等の才華は咄嗟分秒の裡に顯はれたるが如し。故に艶曲優美の調は固より彼等に於て求むべからずといへども、卓勵風發清新爽快の吟は殆んど匹儔あふざる也。あほ一二の例を擧げんや

絶えはてば絶えはてぬべし玉の緒の、君ならんとは思ひかけきや

吾ながら我心をも知らずして、また相見と契ひけるかな

これを見よ上はつれなき夏草も、下はかくこそ思ひみだるれ

うれを聞け小夜ふけ行けば吾なぐで、妻呼ぶ千鳥さこそ鳴くなれ

(和泉式部)

(清少納言)

(納言)

(式部)

等、對照せば髣髴として兩女の面影を見るべきにあらずや。殊に式部が「あらずまほしき事」「あはれなる事」「人に定めさせまほしき事」「あやしき事」……など、各々幾首、滔々として大河に堤を決するが如く詞想の湧出極まりあきは、恰も清女が潔作「枕草紙」を讀むの心地す。中にも

皆人を同ト心になしつて、思ふ思はぬなからましかは、

なき人を無くて戀ひんと有りながら、相見ざらんと何れ勝れる、

世の中にあやしきものは厭ふ身の、あふトと思ふも惜しきなりけり

世の中にくるいきことは來ぬ人を、さりとともてれみ待つにぞありける

哀れある事をいふには亡き人を、夢より外に見ぬにぞありける

等は、眞摯直裁、よく人情の機微を穿ち、清楚輕快、興味津々、予をして茲に掲げざらんと欲して遂に掲げざるを得ざらめたる也。世上相摸が詩才を稱するものあり、曰く紫清兩女に次ぐと。予相摸が歌集を見るに、季に別ち月に分ち、同題の下に多きは拾餘首を連ねたるものありといへども、思想多くば陳腐にして句調大率一律なり。これを彼れ斬新にして變化多く豊富にして趣味の溢るゝ式部と比するに、殆んど同日の談に非ざり。餘事は姑く措き、平安朝に於ける天賦の才女とは問はれ、予は清女の次に指を和泉式部に屈するに敢て躊躇する所あかふん。

夫れ才あるものゝ才を恃んで研鑽せざるは、古來彼等の通弊ありとす。是を以て在原業平は心あまりて詞足らず、凡河内躬恒は遂に貫之を凌駕するを得ざりき。和泉式部の和歌を見るに又往

々にして此の種の缺点あるが如し。其の大膽にも漢語を用ゐ、若くは俚言俗語を混用したるは、一方より見れば、和歌の語彙を多くし、窮屈なる歌界の範圍を幾分か擴張したるの功ありといへども、それが爲めに歌學論者の謂ゆる、品位を下げ、卑俗の跡に近からしめたるの誠は到底免れざるべし。例へば

身は一つ心は千々に碎くれば、さまざまのものゝあげかしさうな

と云へるは憶良が、「ますくも重き馬荷に上荷うつと、いふ事の如と云々」といへる如く、又

濱風に船流したる蛋なうで、よもとばかりの事の疑ひ

といへるは同トく憶良が、「痛き傷にはかゝ塩を、灌ぐちふが如く云々」と詠めるに類す。其他

觀すれば、例よりも、あるをあるにて、聞ゆなる哉、雨には花れ衰ふる哉、

必ず花の折に又來ん、出づるに出でし有明の月

等、頗るいかゞはしき漢字熟語を用ゐたるあり。又天爾遠波にても今少しく注意したふんにはと思はるゝものあり。例へば

ねこトにも堀ふバ堀ふなんをみなべし、人に後るゝ名をば殘さし。

紅葉ばの落つると思へバ木枯の、吹けば涙もどまらざりけり

等の如し。要するに式部や才氣奔放、苟も目の睹耳の聞く所、懸河飛瀑の勢を以て流下し、敢て故らに彫琢粉粧を施さず。故を以て流暢快濶、毫も滯滞の痕を留めずといへども、華實圓滿を以て上乘とせる和歌は原則より見る時は、惜い哉、未だ以て完全無闕と稱するを得ざらん。

然れども是れ一班瑾のみ。假りに業平朝臣が、「月やあらぬ春や古の春あふぬ」を名吟と賞する限りは、必ずや式部が長所は其の謂ゆる瑕瑾に存する所に存する事を知らざるべからず。何とあれば、文字の末枝に亘つて一二其の缺点あるは、蓋し古今東西の大家に争ふべからざる附随物たればなり

(以下次號)

當今の一大時弊に就きて

宮 北 篤 治

吾人をして暫らく道學先生の口吻に擬せしめよ。夫れ人の行爲は至善を豫想と、至善とは實に人間生活の最高目的とすべき理想の觀念也。而してこの至善と至善の到達方法とは、倫理學が説くことと欲する所の二大職分に屬す。世に倫理學者、吾人に訓へて曰く、凡そ人生の目的が、至善にあつて存することを確定するは、善論の斷言する所なり。至善の到達方法を解明するは、徳論と義務論との務むる所ありと。試みに善論の所説を括約せん、夫の圓滿なる人間的生活、換言すれば充分に心身の諸能力を發展せしめ、従つて一切の人間的生活の活動を増進せしむるに、最も普遍なるものは、是れ即ち至善ありと論定し、此至善の實現に裨益するところの行爲、之を善と謂ひ、阻礙する所の行爲、之を罪惡と謂ふ。次に義務論は人の生活問題を圓滿に解釋するには、如何に行動すべきやを普遍なる式にて説明し、徳論は生活の最高目的に到達し現化するには、如何ある性格、即ち意志規定を涵養すべきや、何か故に公平、眞實、慎重、勇氣の如きは、生活問題を正當に解釋し得る所以の品性として、如何あれば之れに反對ある不公平、不眞實、輕佻、怯

懦の如き性格が、至善に到達し得べからざるものなるを證明すること、眞實精確毫も疑義を其間に挿むを容さる也。既に人生最高の目的と、それが到達の手段とが、以上れ如く瞭然たるにも關はらず、世人の圓滿完美なる至善の境に到達するもの、何爲れぞ、しかく皆無なる。吾人は一見怪訝の念に堪へざる也

然れども、讀者よ、試みに想へ、抑も今日の如き道義低落の所縁は、倫理學說批判の取るに足るべきもれ無きが爲め、將にまた人間靈性の苦悶を安慰して、論義説理の境域以外、更に無上超逸の眞理を示現し得べき宗教無きが爲め、若くは物心二界の聯關を明かにして、吾人は理性に平和を與ふべき哲學なきが爲めか。吾人はその決して然らざるを斷言して憚らざる也。何と以て之を言ふ、詐欺者、窃盜犯人の穢しきは、今暫らく謂ふを須むず、乞ふ之と大に知識ある方面に就て見よ、堂々たる論壇の文士にして、故無きに猶且つ他を譏罵し、誹毀し、私行を摘發し、若くは捏造して以て快を買ひ、剩さへ之を刑法上の罪人として陷擠せんとするもの無きにあらず。是れ果して彼等が倫理、道德、宗教を知らざるの致す所なるの、吾人不肖にして之を肯諾するの雅量なきを憾む、彼等に取りては迷惑か否も、吾人は屢彼等れ口よりして、カント、ヘーゲル、スペンサー、ホッブス、ソクラテース、プラトーン、釋迦及び基督等の名を聽けるを如何にせむ。げにや彼等は眞理を熟知し、至善を認識しあが、敢て人生最高の理想に到達するを能はず、眞に憐むべき動物ある哉。而のものは獨り文壇の病患たるのみならず、實に當今社會の通弊なり。吾人一たび此見地よりして、今の社會を觀ずれば、茲に一大疑惑に逢會せざるを得ず、今の世の

弊は餘りに理法に精にして、實行に疎きが爲には非らざるなきや、論義徒々に繁く成り行きて、人の行動を規束とること、寧ろ煩瑣複雑に過ぐるの致す所には非らざるなきや、吾人は頃日獨逸の一哲學者が所説に就きて、有爲の學者輩が、天下の爲め、國民の爲めと稱して、其意見を披陳せる所あるを見たりき。しかも是れ唯學説のみ、意見れみ、理以て争ふに足らん、言以て論するに足らん、若し夫れ人生の歸趣に關しては彼等藐乎として與る所あらざる也。蓋し容易なる事柄を面倒臭く言ひ立て、卑近なる道理を深遠に述べ立つれば、以て直ちに學者をり、知者なりと稱せらるゝは今の世なり。漫りに肩を張り儀容を衒ひ、高く自ら標置して他を瞰ること糞土の如くあれバ、忽ち以て人物なり、豪傑なりと尊重せらるゝは現今の風潮なり。嗟乎、博識多才の學士森々として雲の如く雖も、彼等れ唱ふる所は辯論のみ、意見のみ、補綴鉅釘、考證穿鑿は彼等が唯一の本業なり、眞に世を慨し人道の爲めにせんとするが如きは、今の學究先生の得て知る所に非らざる也。夫れ此の如く既に形式のみ、術學のみ、其勢の趨する所、自ら常識を無視し、常道を歿却し、遂に邪推憶測、自惚自慢、嫉視反目、誹詭陷擠の鬧劇場を演出し、今や世は渾沌として滿天下の人士、永く現と覺ぬ惡夢の裡に趑趄彷徨しつゝあり。吾人別に世道壞亂の原由を遠きに索むるの必要なく、之を先人の模倣に踟躕し、腐儒の遺説を踏襲する所謂道學者先生と、年々書肆に堆きそが著書との中に求めば、害毒侵犯の由來較然として明かならむ。人或は曰ふ、學者とは一世の師表先覺者たる者なりと。眞に然らんか、煩瑣にして迂遠極りなき無定見を敢てし、以て世人の視聽を欺罔せんとする曲學阿世の輩は、當さに唾して捨つべきのみ。之を以て堂

々たる學者となすや、談何ぞ容易なる。蓋し當今は一大時弊や眞に此に在り。

吾人をして忌憚なく、吾が想ふ所を陳せしめば、倫理學説の如きは、刻下の社會に左迄必要なしと思惟する也。試みに我邦二千有餘年來の史籍を繙かんか、吾人は幾多忠勇義烈の士が、雄壯ある義譚を遺したるを見る。然れども彼等は今日の如く煩瑣ある倫理學を聽講したること、嘗て是れありしや。善論、徳論乃至義務論の如き規矩繩墨を以て、彼等を拘束する學説當時に是れありしや、吾人未だ之れありしを聞かず、唯彼等は、或は一片の意氣に感下、或は一朝の知遇に感下、輒も身を以て相許し、力を竭して之れが爲に死す。彼等の事に處するや、何ぞ至善の觀念あらむ、何ぞ手段と目的とを問はむ。一點耿々たる胸奥の心火は、彼等を指導し、誘掖して、能く大中正の道を得せしめ、以て圓滿無量なる至善境に到らしめぬ。和氣清磨公が宇佐八幡の神託と正言したる時、何ぞ至善てふ觀念あらむ、將た何ぞ公の心事に於て目的と手段との別あらむ、唯公は皇上一朝の拔擢に感激して至誠其命を賭して、以て奸臣凶謀の非道を沮みしのみ。公の心鏡を照ふし、公の心事を語り得んものは、公自らの心事にして、何んぞ彼の指々たる道學先生輩の與のり知る所ならんや。孝子の親に死し、節婦の夫に殉する、亦何を苦んで其心事に煩瑣ある意識と考察とを要すべき。苟も融合會通は常識あり、事に臨んで清澄なる心鏡に訴へば、施爲する所自ら天啓の妙諦に適歸せんこと、毫も疑ひを容れざる也。

讀者よ、以上の所論を誤認して、吾人を以て徒らに孤憤を行き、世を嘲罵する者と想ふ勿れ。吾人と雖も倫理學説の唱道を以て、絶對的不要の閑話と爲すものに非らず、吾人と雖も知的欲望あり

で真理を究めんことを欲し、道念ありて善徳を修めむことを求む、然れども必ずや吾人が至善の境域に達するに於て多少の裨益ありむとを要す。されど今の世の理義を考察し、倫理學説を是非するもの、眞に道義の念よりして萬事を處理するもの幾許ある。よゝ又假令之れありとするも、一舉一動、考察を要し熟慮を煩はすは、餘りに沒鑑識の次第ありや。吾人は是に於て、世人に向つて常識の眞價と虚心淡懷の功能とに就て、聊か推論する所あらんと欲するあり。

凡そ物骨子あり、而して常識は人間學の骨子なり。人如何に才學あり、智能ありとするも、身に會通融合の媒介たるべき常識なくんば、是れ世に最も憐むべき不具者なりや。唯夫れ常識を有せず、是を以て理を辨事處す、關する所は一局部のみ、一方面のみ、人生世務の大局より査定して、やがて綜合統一の資義と立するも、安んぞ之を常識ある人士に望むを得ん。既に常識を欠く、已むなくんば繁雜ある契約を結ばざるべからず、形式に泥み、膠柱の規則を墨守せざるべからず。是に於てか臨機の妙用を失ひて精神を遺却し、徒らに冷りなる形骸を擁するに至る。倫理學説の辯難攻撃のみ熱中する我國民は、慥くに沒常識の好標本にあらざらむや。天賦の無代價なる此一大妙器を棄て、人間知見上の契約に過ぎざる道德律を採りたる我國民こそ、げに愚者れ上乘なれ。若し夫れ常識てふ天賦の一大妙器を利用せんや、争ひつゝあるものは笑つて互に握手するを得む現世の苦患に惱みつゝあるものは直に清き和樂を感じるを得む。旣々として一篇の哲理を讀破して未見の知識と悟了したるとりも、一杯の酒に終日の勞を洗ひ、兒は欣々として左右より膝にまとい、妻と爐を挾んで語るの清樂は、常識ある者の好んで撰ぶ所なり。讀書

畢竟何者ぞ、不具の學者の累々たるは、寧ろ完全なる一僕の存在するに如かず。老子曰へるあり、聖人之治、虚心、實其腹、弱其志、強其骨、と、聖人の治と雖も、別に奇變あるにあらず極めて平々凡々たり、しかも此平々凡々たる所以のものに於て、當世人士の缺陷あるを思へば、轉に愁歎の念に堪へざる也。

而して虚心淡懷は常識を保全する上に於て、欠くべからざる要件あり。如何に豊富なる常識を具有すと雖も、漫りに一時の感情に馳せ、徒らに皮想の事情に迷はさるゝあらば、靈妙殺活の機能ある常識も、夫の道學先生の杓子定規論と殆ど擇々所あらんのみ。苟も心胸の宏豁あること灑然として清風光月の如く、一點の微瑕なき心鏡を把持し、據て以て常識の運用を恣にするれば、規せずしてしかも自ら人道の大義に適ひ、人生目的の境地に到ること、恰も溪水巨巖の下に湧き出で、自ら低きみづくが如くあるべし。列子嘗て巧に虚心淡懷の人世に要あるを譬喩していへるあり、曰く、海上の人漚鳥を好むあり、毎旦海上ふ之を漚鳥に従つて遊びしが、漚鳥の至るもの百住にして止まず、其父曰く、吾れ聞く漚鳥皆汝に従つて遊ぶと、汝之を取り來れ、吾れ之を玩ばんと。明日海上に之きしに漚鳥舞うて下りざりきと。徒ら以て好諧謔を爲すこと勿れ、齊智の知る所や淺くして、無心の水禽猶之を悟る、豫め心に介する所あつて局に當る、古往今來誤らざる者罕あり。嗚呼、夫れ江海に能く百谷に王たる者は、其善く之れに下れるが爲にあらずや。吾人亦能く人たる所以の道を履み行ひ、以て最高目的たる至善の境地に到達せんと欲せば、寛懷宏量只能く常識を據りて足らんのみ。何ぞ敢て煩瑣ある辯論攻撃を事せせん。

人生は知識にあらずして事實なり。胸中萬卷の書を貯ふると雖も、以て世を爲すあくんば、眞に死灰のみ。讀者よ、吾人は今の世に於て、多くの生きたる字彙とブックケースとを觀たり、しかも彼等の云ふ所は全然隔世の事、吾人世に處するに就て何等の用おしとす。然り而して人生の歸趣に合せんとする、左迄至難不可能の事にはあらず。清透豁たる虚心淡懷と、融合自在ある常識とにあらば、優に人生百般の行爲を規束して、それが最高目的なる至善に達し得べし。我邦當今の時弊は知識の缺乏にあらず、學者の拂底にあらず、只々常識の缺乏のみ、寛懷宏量の拂底のみ。鄙語に曰く、鼻の先ある女の智慧と。今の道學先生は倫理學説の如きは、宛然たる鼻の先ある女の智慧にあらずるもの乎、否乎。

社會問題を論ず（承前）

愛 緑 生

吾人を以てトマスモアがユトピアを夢み、カペー、サン、シモン等が糟粕と嘗むるの輩とあすなかれ、又私情私利に驅られて、無政府無君主の破壊を唱ふる社會黨虛無黨の一派となすのを吾人豈敢て恁る狂狷過激の言をなすものならんや、只病毒の深く膏肓に入れる、國手が英斷を以て大手術を施し、完全なる醫療を施すにあらずんば、救済の望むべからざる如く、今日の社會問題も、不當なる競争主義を止め、社會を組織一新せざんば、社會の幸福健全得て望むべからざる也、世上或は慈善事業により（例へば孤兒院、救貧院、救世軍の如き）或は教育普及事業により（例へば大學殖民 University Settlement、近隣組合 Neighbourhood Guild、貧民學校、教育圖書館、

は如き）或は經濟的事業により（例へば労働組合、生産組合、消費組合、信用組合、の如き）によりて、労働者、貧困者を精神的に、物質的に保護し、救済せんとするありといへども、此等は皆繙繙的にして改革的ならず、一時的にして永遠的ならず、曷ぞ釋然たる解決を這個は大問題に與ふるを得んや。

然れども由來人は競争によりて克く勤勉あるもの、然るに今之を除去するに於ては、人は何を以自らはげみ、自ら勉むべき乎、此れ競争を去りたるため、世は日を追ふて安逸怠惰の渦中にまき去られ、蕩然救ふべからざるに至り、其弊や寧ろ今日よりも甚敷いものあるに至るなり、これ實に社會問題は解決に伴ふて、大に攻究を要するの問題たり、乞ふ吾人をして更に一步を進めしめよ。

厥の皮想の觀を止めて能く之を觀察するに、人は只に麵麴と肉とを以て満足するものにあらず、必ずや其以外に一個の靈性なるものあり、之に據り之を以て活動進歩す、これ他動物と異りて人の萬物に長たるの所以にあらずや、然者今吾人にして、今日行はるゝ所の自由競争の如き物質的競争を廢するも、何の不可あらん、何となれば、吾人は此れ淺薄不道義の物質的競争を離れて他に更に高遠純美の靈性的な競争を求め得べければ也、況んや人類の進歩は既に己に物質以外に向ひつゝある今日に於てをや、只今日に於て彼の無學無智の労働者、貧困者より直に物質的競争を取り去るは、多少の危虞あきにあらずといへども、彼等も等しく人あり、意あり識あり何んぞ教へて導くに難からんや、彼等か今日不善を行ひ、醜行をあすが如きも、皆其根抵の原因たる、生

れて保護者なく、教育者なく、加ふるに世の激烈なる競争主義は、疾風烈雨の勢もて彼等を侵犯するが故に、彼等は自己防衛の止むべからざるよりして事此に至れるのみ、今競争主義を去て世若し自由平等を行ふに至るべ、彼等も身に安心を得、餘裕を得、前に狼手として衣食以外に求むるおきが如く、苟も衣食にある所、之を得んとして其手段を省みるに暇なかりしが如きものも、今は衣食以外、物質以外遙なる望を起し靈性的方面に向て次第に進歩競争するに至るべきや明らかあり、只此れ競争を去るの初に當りては、適當の法を設けて之を強制するに非らずんば能はざらん乎。

吾人今日、彼の労働者の生活状態を観察するに、拂曉より深更に至るまで刻々として使役せられ粒々辛苦する様實に餘想れ外にあり、而して其收得する所僅に口腹を満し、襤褸を纏ひ得るにすぎず、入ては家庭團樂の樂を取る能はず、出で、は社會の娛樂愉快を共にすべからず、彼等が社會に出で來りしもの、實に苦痛と艱難とをのみ享有せん爲あるかの如き觀あり、之を彼の紳士紳商が一日數時れ労働により過多の報酬を得以て社會の快樂を壟斷するに比せば如何、勿論紳士紳商等が智能に發達せるは、數時も猶よく労働者が終日に價すべきものあるべしといへども、而も人として働く所や一あり、奚ぞ其收得に爾く差違あるべきものたらん。

夫れ衣食足て禮節を知る、今日労働者が禮節なく、義理なきが如きもの其源實に收得の少きにあり、今若し競争主義（此の不當の）を止めて紳士紳商、富者強者が労働時と、貧者労働者等の労働時とを平均に配合し、一方獨占事業、廣告、ストライキ、等、競争主義より來る經濟上の損失

を防ぎ袖手徒食の輩をも馳て労働に服せしむる時は、人々の平均労働時間は大に減少すべく、收得は増加すべく、労働者の如きも樂んで勞役に服し、放逸に陥るが如きは斷つてなかるべく、己に衣食足れり、以て大に精神的な導のむも易々たるべきあり、競争主義を去れば世は蕩然として安逸に陥らんと危慮するが如きは謬見のみ、之を封建時代の武士に見よ、彼等は常に衣食足りぬ、故によく精神的に發達して、禮節義理を重んずるに至りたるにあらずや、世又競争主義を去れば社會の進歩あるべからずと唱ふる人なきにあらずといへども、此等も亦よろしく彼の封建武士に見るべき也、封建武士は衣食少しも窮するおかりき、而も各其職とする所には忠實にして大に社會を重んず、大進歩を文化の上に與へたるにあらずや、更に思へ、彼のセーキスピアーと云ひ、ゲーテと云ひ、或はエジソンと云ひ、ワットと云ふ各其偉業をなしたるは區々物質的の競争に驅られたるの結果たりしう、曷ぞ知らむ、人類を益し社會を増進すべきの偉業創見は、區々物質的競争のよく刺撃感發せしむるものにあらずや、更に史を繰て偉業をなしたる人の事蹟に之をと。

一發明一創見、これ皆衣食を忘れて研鑽攻究したるの結果にあらずや、知らず人智の發達、社會の進歩は、圓滿豐實れ社會に於てれみ見るものにあらずや、知らず人智の發達、社會

競争主義を去るの利益効果大略上の如し、然は吾人は如何にして競争主義を去らんとはする、人或は問はん今日の事業一として競争主義ならざるなく、殊に經濟事業の如き今や此の主義を以て大原動力とし之に因て社會を經緯せむとす、從て之を除去するは殆んど社會を改造するに似たり

といふべく殆んど實行に難きもれたらずやと、然り此の主義を去るは殆んど幾千年來人類の歴史に一大改革を施さんとするもの、至難至困れ事業たる元より吾人の喁々を待たずと雖も、而も人道に省み、向後の社會趨勢に省みれば、例へ一時一定の時に悉く之を除去し得ざるも、序を追ふて困難を排しつゝ此を實行すべき也、勿論此事たる一人一箇のよく企て得べき事業たゞざるを以て、國家先づ之が經營に當り、先づ土地、鐵道、汽船、一部の商工業（大企業たり得べきもの）を國有となし、各人報酬の差等を漸時に均一せしめ、延いて凡ての經濟事業を國有とし、人々労働の時間を定めて各其長ずる所に從ひて労働せしめ、其報酬として均一平等の給付をあたすべき也、斯くせば、凡ての事業悉く國家的となり、大企業的となり、労働少くして利得頗る多く、苟も社會に生活する人間は喜んで労働に服すべく、又今日れ如く労働に伴ふ輕侮も取り去られ、人々労働を以て名譽とし、豊富に愉快に其長ずる所を研鑽すべく、其余暇を假て德義の修養、身体の練磨等人として必要の教練も充分に行はるべく、今日の悽愴悲慘の社會は、福徳圓滿の社會と變じ、人類として愧ぢざる理想的生活得て遂ぐべき也、加ふるに今日の如き社會に於ては、學者たるもの必ず學才あるにあらず、學士たり博士たる只學資に不自由なきの人にのみ得らるゝものなれど、競争主義の除去さるゝ時に於ては、世の職業は平等に同一視さるゝを以て恁る不都合のことはなかるべく、労働を以て神聖視さるゝを以て頭腦の生活より手足の筋肉を働かずを好むものは悉く労働に従事し、學者たり博士たらんものは眞に頭腦に學理を消化し得べき人の職とする所とあり、其他職業の選各秀ずる所に向ひ、社會の發達人類の進歩は今日を凌ぐに至るや論を

し、此の時に當りて國家は公共の娛樂に供すべき清逸優雅の娛樂場を造り、圖書館を立て、公園を設け、社會の人をして個々の娛樂に耽るならしめ、労働以外の渾々たる餘裕を以て、公衆相娛樂せしめ、遊興の裡、娛樂の間、人々の思想感情の交換、德義の修養をなさしめおぼ、人々の趣味感興も自然に高潔優雅となり、今日の如く私利私慾に沈湎せんとするが如きことなく、今日人倫頹廢を憂ふるの聲は變じて美徳公道稱揚の聲とあるに至るべきや必せり、今日徒に法を設け、律を繁として營々社會の頹廢を防かんとしつゝあるが如き、抑も亦愚の愚のみ。

吾人今此論を終らんとするに當り、凡ての經濟事業を國有とするには奈何とべき歟、及經濟事業を國有とするの結果、如何に労働を減じ、收得を増加すべきやに就て一言せむとす、經濟事業を國有とするに二方法あり、買収及沒收これなり、然も買収（斯く大なる）は國家の財政上、何國たりと雖到底負擔にたへざる所なるを以て、吾人は適當の方法手段により沒收すべきことを主張せむとす、言頗る過激なるに似たるも、競争主義の甚敷實に幾多の沒收の行はれつゝあるを見る、鐵道敷設せられて附近の車夫は其職を沒收せられ、機械發明せられて手工業者其職業を沒收せらるる等枚舉に遑あらず、而して此等の沒收は無條件に沒收さるゝものたりといへども、國家が沒收する時は適當な法を設け、労働の保證を與へて沒收するを以て、無條件に沒收して其人を放擲するが如き事はあらざる也、何となれば沒收を受くるもとこれ平均平等に労働せしめん爲めあるを以て、其人は長ずる所に労働さへすれば、衣食に窮するが如きことあらざれば也、經濟事業を國有とするの利益は大企業の利益と相似たり、今例を以て之を説明せんに彼の郵便事業の如き、若し

之を民間の營業とあし置くときは奈何に莫大に費用を要すべきのは算すべからざるものあらん、運搬のために甲店乙店互に等しき所へ多數の人夫配達夫を送り、廣告料を使用し、役員を多く置き其他顧客當事者共に何等の益なき冗費を費し、爲めに運賃も今日より數倍に多きに上るや知るべからず、然るに官業とされたる爲め、半數の人数を以て猶ほ敏活に低廉に今日の如く事業をなし得るにわらずや、之れ只郵便事業に例を取りたるなれど、其他の事業は於ても亦然り、讀者若し此例を以て經濟機關國有の結果が如何に勞働時を減下、如何に生産を大ならしむるを思はば蓋し思ひ半ばに過ぎん。

以上は社會問題に對する大略の意見にすぎず、猶ほ勞働平等に際しては、其選定に於て不潔の事業困難は事業は何人もあすものあかるべしとの如き難問等の起るべきと必せず、然れども要するに此等は勞働時の配合をよくし、不潔困難の事業に當るべき人の如き其勞働時を減少するも可あるべく其他の難問といへども、適當の法を設けて解釋せば何の難きことと是れあらん、要し只勞働の平等にあり、報酬の平等にあり、人の幸福、利益、人權、の平等あり、嗚呼人誰か此問題に一片の耳を假とものぞ。

(完)

黄雀御黄花、 翻々傍簷隔、
本擬報君恩、 如何反彈射、

雜 錄

讀 書 雜 話

浦 井 恒 堂

英語聲の二三

Why is a young lady dependent upon the letter Y?

Because without it she would be a lad.

Why is the moon like a marriage contract?

Because it governs the tide.

Why are bells used to call people to church?

They have an in — spire — ring influence.

What is that which one cannot give without taking, nor take without giving?

A kiss

What is the difference between a mouse and a young lady?

One harms the cheese and the other charms the he's.

What is it which will be yesterday and was to-morrow?

To-day

What are the three degrees of a mining speculation ?

Mine, miner, minus.

Why are summer days longer than winter ones ?

Because the heat expands them.

Why is the map of Turkey in Europe like a Frying-pan ?

Because it has Greece at the bottom.

What dance is enjoyed by every body who is able to indulge in it ?

Abundance.

What is the best material for a bathing suit ?

A bear skin

What is the most peaceful city in America ?

Concord

What is the largest horn in the world ?

Cape Horn.

~~~~~  
ウオタールー激戦ロスチャイルド商戦と

ウオタールーの決戦は世界歴史上に於て一の作期的事蹟なることはいふまでも無けれど此大戦は

亦た歐洲の經濟界に於ても最も著名にして一般金融の世界に於て一新時期を劃するに至れり何んとなれば歐洲列國の君侯を其掌中に飛弄すといはるゝ世界第一の富豪ロスチャイルド家の富は主として此際に於て大成したればなり今其次第を述ぶるに先ち些うロスチャイルド家來歴を語らざるへうふす

猶太人が種々の事情のため歐洲諸國に於て輕侮冷遇せらるゝは人の知る處にして獨逸のフランクフルト、アム、マイン市に於てはユーデンガツセと稱する一區域を限りて彼等の居住を許せり今より約百年前此街にマイエル、アンセルム (Meyer Anselm) といへる猶太人あり其居宅の入口は戸に赤色の楯の徽章ありしを以て普通はロートシルド Rothschild (＝ Red shield) と呼ばれき (されは英人はロスチャイルドと英吉利風に發音すれと實はロートシルドといふを以て正しとすべし) 彼は營業は兩替なりしか甚だ正直にして且つ勤勵なりしを以て大に世人の信用を博し家道漸く隆るに至り併せて金貨業をも營み其關係より當時のランドグラーフ後の選帝侯ヘッセンカッセル侯の知遇を蒙り其朝廷の御用達とされり此男は通貨は眞贋を鑑別することに妙を得一度指を觸れば決して謬ることなかりきこそ時恰も佛國大革命に際し赤共和黨 (レッドリパブリカン) の軍隊萊因地方を犯して所在放火剽掠を行ひ獨國の人心恟々たりし一日ユーデンガツセあるロスチャイルドの居を訪ふ者ありアンセルム出て、之に接すべし計りむヘンセン侯にして甚だ狼狽の狀あり几上に寶玉貨幣を列へ蒼皇告げていふ余は君の信賴すへき紳士なるを信す余は此世に於て余か所有する凡ゆる財貨を舉げて君に托せむと是なるは余か家族の所有する寶玉あり是なるは黄金

若干なり事若し急に及ばし如何にもして寶玉類のみを全くせよ黄金は便利君の處分に委せむと言終りて馬に鞭を馳せ去る數時間の後佛國暴民兵フランクフルトを占領しマイエルの家亦たサノスキエローツの掠奪するところとなり是れ一七九三年の事ありき

後十年奈翁の權勢確定すると共に秩序回復せられヘッセン侯は國に還らむとして途にフランクフルトを過ぎユーデングツセあるマイエルの家を訪へり侯は嚮に其寶玉類の保管を依頼したりとはいへ變亂の際のことなれば全く斷念して談毫も之に及ばず既にして侯の辭し去らむとするに及ひマイエルは起ちて大なる箱を持ち來たり例の寶玉類を始め利金をも添へて委托金を還附せりヘッセン侯は驚喜措く能はず深く其恩を謝して之を納め其より愈よマイエルを信任し頻りに其義俠を賞讃しければ侯の吹聴により一八一二年マイエルの歿せる頃はロスチャイルドは名漸く世に聞ゆるに至れり蓋し彼は佛兵の其家を襲ふに當り已の財産を擧げて其掠奪に任かせ獨りヘッセン侯の財を以て免れ之を資本として次第に貨殖しけるなり

マイエル、アンセルム五男五女あり遺命に因り長子アンセルムはフランクフルトに於て父業を嗣ぎ他の四子は維也納巴理倫動チーブルスに移りて各銀行業を營み常に本支店の間に聯絡を通じて緩急相應し歐洲金融界の主權を掌握せむことと努めき第三子ナータン、マイエル最も英邁機智あり常に同胞の推すところとなり實際に於てロスチャイルド家の主宰者となれり渠は前世紀の初齡二十一歳の時約十萬弗の資金を携へて英國に赴き先づマンチエスター市に住み製造業貿易業に兼て銀行業を營み六年以内に於て既にシリオチアの列に加はるに至り一八一三年倫動に移りし

か數年お互れる佛國との交戦のため政府の財政窮迫に際り大に力を致し名聲大に揚れり當時の人渠を評して曰く彼の狡猾なるは狐の如く其大膽なるは獅子の如しと彼は最も通信機關の設備に盡瘁し多くの傳書鳩を馴養し數隻の快走船を造り歐洲大都府間の捷路を講究し常に其利用を怠らざりき既にしてロスチャイルドの大活動の機來たりし時は一八一五年六月十八日英兵大にウオータールーに戦ふ此日ナータンは戰場附近ある安全の洞穴に潜み最も熱心に戦況を觀みしう一勝一敗局面屢々變し渠も亦た喜憂交も至り終日煩悶せり最後に普將ブリューヘルの軍來り援ひ佛兵大に敗れ潰ゆナータン驚喜絶叫して曰くロスチャイルド家戦に克てり此時既に薄暮駿馬に鞭ちて終夜疾驅し翌曉既に目耳曼洋の岸にあり會々烈風怒濤天を衝き海上一隻の舟を見ず彼は海邊を求めて僅に一漁夫を得重賞を懸け身命を賭して舟を出さしめ大風波を犯して無恙英國海岸に達し再び馬を飛ばして倫動に入れり

六月二十日拂曉渠は株式取引所に赴くや市民は未だ何等れ戰報にも接せずたゞ空漠たる風評行はるゝのみ人氣沮喪し株式の下落其極に達せり於是渠は其力に有る限り公債株式の買占に着手せしが毫も色を變せず悠然市場を來往し時々故らに蹙蹙獨語して曰く形勢益す非なり最早望無かるへきか云々而して當時多くの仲買人等はロスチャイルド完然ある通信機關を有するを知り渠の舉動如何を以て已の方針を決するを常とせしかは今やナータンの沈鬱の態を見時勢不利なりと悟りければ先と爭ふて持株の投賣を始め佛兵の先鋒倫動に入るに先ち早く自ら處せむことをのみ謀り相場の下落愈よ甚たし廿日は如此して暮れ翌廿一日も將に暮れんとし此兩日の間ナータンの腹

心の徒は最も秘密に力の限り買占を行ひしうはナートン事務所は凡ゆる種類の公債株式を以て充滿せり同日の薄暮株式取引所の閉鎖せられて一時間後傳令騎兵馬を飛ばして倫敦に著しウオ―タール―大捷の報を廣せり於是全市驚喜し花火イルミチ―ジョン音楽祝賀會至る所に開のれしが其際大盃を擧げて商戰の大勝利を祝しは獨りロスチャイルド一家あるへく渠は此兩日間に於て一攫一千萬弗れ富を得たりしあり

Civis Romanus sum

「余は羅馬市民あり」といふ語にて往昔羅馬の旺盛時代に於て羅馬人は何れの國に在るを問はず土人より迫害を蒙らむとする時余は羅馬市民なりとさへいへば容易に凌辱を免れ得たりといふに因り強硬外交主義を呼ぶ箴言となりしを殊に此一語一度英相パームストン卿 (Lord Palmerston) の演舌によりて一層著名とあれりパームストン卿は未だ外務省書記官たりし時より強硬外交主義を保持せしう一八四六年ピール内閣顛覆してラセラス卿内閣成るや渠は入りて外務大臣となり縦横無盡に其敏腕を振ひ英國れ外交活動し凡ゆる局面に於て干渉を試みしかば當時の人渠を呼びて火把卿 (Lord Firebrand) としへりされと同時に列強の嫉妬を惹起して英國は外交界に於て擯斥せられ一時所謂外交的孤立の境遇に陥りき是に依り國內に於ても非難の聲頗る盛に渠の政策を以て却て國家の危殆を招く者なりと論する者尠のらず終一八五〇年の議會は英國外交政策に關し内閣の信任を問はむとするに至れりこれをドンパシフィコ討議 (Don Pacifico Debate) と云ふドンパ

シフィコとは販化英人の名にして當時希臘雅典に住せしう事を以て國人と衝突し暴徒の凌辱するところとはあり (一八四七年) パームストン卿は毫も躊躇せず直に損害賠償を迫り之に次ぐに恫喝を以てせしかば希臘政府大に怖れ唯々賠償金を出し罪を謝し事止めり然る列強は卿の採れる手段の妥當を缺けるを責めて曰くドンパシフィコに於て果して奸惡ある舉動ありしや否を問はざるこそ要求額の不當なるものと國際上の禮義を蔑視して突然非常手段に訴へんと爲したる如き是れ皆希臘國の弱少なるを侮れる英國政府倨傲の措置ありと認めざるべからずと因て終に議會の問題となれり實をいはば卿に於て多少の失策あるは掩ふへうらざる事あれば渠の當局の責任者として議會に出席して辨明するに當りて最も慎重の態度を採り努めて事實問題を爲すことを避け専ら抽象的國權問題を捉へ來りて議場の形勢を一變せむことを企圖し五時間に及べる大演舌を爲し壯快痛切の辨を弄して彼の外交政策全部を辯護せり其大意に曰く余は政府の外交政策を嘗て我國の威信を汚損せしが如き事なきを信す勿論一二の問題に就きては余輩の説とある論者の意見とは一致せざりし事なきにあらずされど余輩の日常れ經驗に依るも多數の人々の間に於ては事實の詳細理由經過等に就きて各其知る所と異するを以て勢盡く同説に歸着し能はざる場合鮮うらざるを諒とせざるへうらず因て余輩大体れ主意に於ては一致するも猶些細の點に於て説を異にするの常あるを認めたる以上は余輩は諸君に向ひ政府が終始一貫して採れる大方針に就きて諸君の注意を請はむとす政府の大方針は往昔羅馬人か余は羅馬市民なりといふ時は何れ乃國にあるを問はす侮辱を免れたりといふ如く大英國の臣民をして何れの國にあるとも本國の注意深く且つ強硬ある手腕



の保護によりて不正迫害と免ることを得へしと確信せしめむとあるにあり

“As the Roman, in days of old, held himself free from indignity when he could say civis could say Civis Romanum sum, so also a British subject in whatever land he may be, shall feel confident that the watchful eye and the strong arm of England will protect him against injustice and wrong.”

此巧妙なる辨論に因り議場の形勢一變し政府不信任案は多數を以て否決せられパーメルストン卿の名聲大に揚かり人渠を呼んで愛國大臣 (Patriotic minister) といひ彼の外交政策を愛國政策といへり如此して政府の外交は愈々強硬となり竟にクリミア戰役及び二回の支那戦争を見るに至れり

~~~~~  
Strike, but hear me !

「打たむとする者は打て乍去余の言ふ所は之を聴け」とは信仰堅固にして毀譽褒貶の爲め其心を動かさずことなく所謂心之を知りて口之を言ふこと能はずといふ類にあらざる場合に用ふる諺にしてブルタークのセミストークルス傳に出て雅典將セミストークルスが聯合艦隊司令長官あるスバルタ將ユーリピアデスに對して發せる語あり波斯戰役に當り波斯王クセルキス既にセルモビレエの險を通過してアツチャッカに侵入し雅典を屠り其艦隊は雅典附近のフヘルム港に據り將に進みてサラミス灣なる希臘聯合艦隊を攻撃せむとす此危殆の場合に際し希臘艦隊にては諸將の意見一致すること能はず空しく軍議に日を送り蓋しペロポネサスの諸將はコリンス地峽附近に退却し陸

軍と力を競せむとを主張し雅典將セミストークルスは艦隊一度サラミスより退かは忽ち離散し去むことを虞り猶豫なく一大決戦を試むべきを論し司令長官ユーリピアデス未だ決すること能はずある日の軍議に於てセミストークルスは其主張を反覆し固守して譲らずユーリピアデス稍や其倨傲を怒り冷評して曰く

Do not you know, Themistocles, that in the public games such as rise up before their turn are chastised for it

セミストークルス聲に應じて曰く

Yes, yet such as are left behind never gain the crown.

ユーリピアデス大に怒り携ふる所の杖を舉げてセミストークルスを打たむとすセミストークルス騒かす靜うに曰く

Strike, if you please, but hear me.

ヘロドタスの歴史に於ては此問答を以てセミストークルスとコリンスの將アゲアマンソスとの間の事とあせともブルタークは説の方實情に適せるが如し

~~~~~  
虚より出た實

れ最も大なる例は羅馬第四の皇帝クラウヂユスの踐祚あるべし渠は羅馬の帝祖オーガスタスに養子ヅル・サスの子にしてゴール州のルグヅウム(今は佛蘭西リオン府)に生る不具といふ程にはあ

らさりしかども身體極めて虚弱ありき而して羅馬人の俗最も虚弱の人を擯斥し慈母と雖も虚弱の小兒は之を措て顧みざるを常とせしかは不幸なる彼は幼より父母の慈愛を経験する能はず兄弟姉妹凌辱を蒙り愈々幽鬱怯懦の人となりしのカリグラ帝之を憐み召し出して執政官(コンサル)に任ずされと久からずして彼を厭惡し爾後は弄臣(コートジニスター)として之を養へり紀元四十一年カリグラ帝の弑虐に遭ふや近衛兵(プレトリアンガード)は變報を聞くや列を組みて兵營を發しパラン丘なる宮殿に入り事實を確めむと其事實あることを發見するや殿内に闖入して劫奪を恣にし廷臣皆遁走すクラウヂユス逃げ後れ一室の幕帳の後に潜伏せしに兵士の發見する所となり彼等は之を兵營に拉去り戯に皇帝と稱し大呼萬歳を唱ふ此喝采の聲を聞ける他の兵營の將士亦た之に和しければ終に戲變して誠となり元老院も之を承認せざるを得ざるに至れり帝踐祚の時齡既に五十一幼時より世塵に遠よりて學を勵み拉丁古文辭に通し種々の有益ある歴史的著述ありと雖も皇帝として不適任なるは言ふまでも無く廷臣政を弄し皇后メツサリナ及びアグリッピナの専横極まり無く朝廷の威勢地に墮つるに至れるは人の能く知る所あり

特殊の異名を有する英國議會

(一) 狂氣議會 (The Mad Parliament) 一二五八年の議會の異名にして當時は拉丁語を以て Insanum Parliamentum と云へり此議會に於てレスター伯は國王顯理三世の不徳を鳴りし王々外國人(専ら佛人をいふ)を寵用して却て自國の臣民を疎外にし聚斂を行ひ稅政續出すること並ひに王

か伯に對して約し置ける恩賞を與へざることを攻撃し王を罵りて食言者といひ議會大に喝采せしうは王黨は大に激昂し此議會を呼ひて發狂議會といへり如此して兩者軋輓の極所謂バロンスワーとありレスター伯貴族黨を率ひて官軍を擊破し一大英斷を以て議院制度を釐革し第三級者(サードエステート)は始めて議會に出席することを得るに至れり

(二) 善良議會 (The Good Parliament) エドワード三世の治世一三七六年の議會なり宮中及び政府の腐敗を攻撃し宿弊を匡正せむことに盡瘁せるに因りて名く當時王は寵姬 Alice Perers 放縱を極め John of Gount などと云へる奸惡の徒と結托して政權を弄し彼等腹心の徒を以て政府の要部を占め王は空しく彼等の傀儡となり了れり是に依り有名なる皇太子黑太子(ブラックプリンス)は秘密に議會に援助を與へ弊政釐革を圖らしむされば議會も大に力を得先づ諸般の政費の詳細なる報告を求め王に向ひ信任すへき國務大臣及顧問官を選任すへきことを献議し次に奸惡の徒を彈劾して之を監禁し最後にアリスペールスを攻撃し新法を議決して曰く自今如何なる女性ありとも政務に與ることを許さず犯す者は其産を沒收すと不幸にして是等の改革の謀主たりし黑太子は天く易簣せしうは姦惡の徒再び志を得新議會を召集して前議會の措置を盡く取消さしむ時人大に慨き前議會と呼ぶは善良議會の名を以てせり

(三) 刻薄議會 (The Merciless Parliament or the Wonderful Parliament) リチャード王治世一三八八年は議會なり此議會は國務大臣を反逆罪に問ひ之を死刑若くは流謫に處し毫も愛憐の情を示さざりしに因りて名く

- (四) 最短期議會 (The Shortest Parliament) 一三九九年九月三十日開會其日リヤード王を廢し翌日解散となる次の王顯理は六日を経て同一の議會を召集し之を以て新議會と見做せり
- (五) 無學議會 (Unlearned Parliament) 顯理四世の治世一四〇四年の議會にて政府の不法ある干渉のため此議會に於ては一人の法律學者辯護士無かりしを以てなり拉丁語にて (Parliamentum indoctum & sive P. of Dunces, Lack-Learning P., Lawless P., Illiterate P. などの名あり皆同義なり
- (六) 打球棒議會 (Parliament of Bats, or Club P.) 顯理六世一四二六年に議會にてレースターに會す豫め議員の帶劍を禁せられしは議員は各自長き棍棒を護身用として携帯せしによりて呼ぶ然るに此棍棒も禁せられしかば更に各自手頃の石乃至錘鉛を手巾に包みて携へしを
- (七) 惡鬼議會 (Diabolical P.) 拉丁にて Parliamentum diabolicum とし顯理六世御宇一四五九年の議會として皇后及び其腹心の輩議會と結託して專横の舉動ありたるによる
- (八) 大革新議會 (Great Reformation P.) 顯理八世の御宇一五二九年より同しき三十六年まで議會をいふ此時代は英國に於て宗教革新の行はれ英國教會より羅馬より獨立したる時にして議會は盡く政府の措置を協賛しければなり
- (九) 無爲議會 (Addled P.) シェームス一世治世一六一四年より一五年の議會にして大に政府は措置殊に政府の献金 (ベレボレンス) を取れるを攻撃し政府の提案を盡く否決し毫も議會の任務を盡さしに因りて呼べりアッドルは拉丁にて To do nothing あり

- (一〇) 無用議會 (Useless P.) 查理一世の御宇一六二五年六月召集せられ八月解散を命ぜらる此議會は單に國王の逆鱗を惹起したる他は何等の効果を見ざりしによりてかく呼ばる
- (一一) 短期議會 (Short P.) 查理一世は盛に專制主義を行ひ議會を召集せざること十餘年ありしか英國教會を蘇格蘭にも行はむとしたる爲め蘇人の大反抗を惹起し蘇人は神聖聯合規約 (ソレムソリーグ、エンド、コベナント) と結び查理は早く之を解散せしむるの手段を取らざりしかば蘇人は勢に乗進みて英國を侵す查理は之を禦くに必用なる軍資を有せず乃ち十餘年の間竭の後議會を召集す此議會は國王の要求せる必要なる補助を與へず却て十餘年間の稅政を攻撃せしめは王震怒して解散を命ぜり一六四〇年四月召集せられ五月上旬に至り解散となりしにより短期議會と名く
- (一二) 長期議會 (Long P.) 查理王は前述の議會を解散したれと蘇國との關係切迫せるに因り更に議會を召集せり此議會乃五分の三は短期議會の議員の再選せられし者にて其餘の新任議員も亦た全然政府反對黨に屬せり於是王は方針を一變し議會に對して出來得る限り讓與を爲し以て議會と調停せむことを努め議會の承諾を得されは解散を命ぜざるべきを約せり如此して此議會は其内容の變化はありたれと表面上二十年間繼續して一六六〇年に至れり因てかく呼ばる
- (一三) 譬議會 (Rump P.) 是は前述の長期議會中に起れる内容の一變化を特に呼べる名にて温和黨漸次勢力を得クロムメル等の率ゆる獨立黨 (インデペンデント) を排し國王と和して獨立黨の手中にある軍隊の壓迫を脱せむとすクロムメル大に怒り大佐プライドに命し兵力を以て議會を

解散し(所謂ブライドの掃除)たり獨立黨の議員五十三名のみを留めて議會を組織せしむ因りて此議會は長期議會の譬部なりとて嘲けりて呼はれたるあり

- (一四)小議會又ヘアボーン議會 (Little P., Barebone P.) 是れまた長議會の變形にして例の譬議會に於ては過激説漸く勢力を得終に共產主義の說を唱ふに至りければクロムウェルは之を壓倒して社會の秩序を維持するの必要を認め一六五三年之を解散し譬議會以前に長期議會の議員を召還し新議會を組織せしむ其人員百六十五にして議會定員は約半数あれば小議會といふ而て此議會の一員に當時有名の奇人ヘアボーンといへる者ありしうば大評判となり此議會の異名とあり

- (一五)コンベンション議會 (Convention P.) 一六六〇年將軍モンクの召集せる議會にして國王の召集に因りて集會たるにあらず私の集會なればコンベンションといふ拉丁語の集會といふ義より出つ此議會に於て查理二世を迎へ王政復古を議決せり又治療議會 (Healing P. の名あり是れ英國民は共和時代に於て政府の暴政軍隊の跳梁に苦みたるを以て王政復古よりて凡ゆる瘡痍は快愈に赴くべきと庶幾し大に議會の措置に賛成してうく呼へるなり

- (一六)泥酔議會 (Drunk P.) 一六六一年開かれたる蘇格蘭の議會にして議員皆酒を蒙り政府委員ミッドルトンも亦泥酔して其席に耐へず再三休會するの止むを得ざるに至れりといふ

- (一七)最長期議會又年金議會又騎士議會 (Longest, Pensionary Cavalier P.) 一六六一年より一六七九年に至る查理二世の御宇の議會をいふ議會は國王の回復を喜ぶの餘り王の欸心を得むとのみ努

め國王乃爲めには甚た好都合なり一かは外交問題の爲め局面一新するまで約二十年間續けり因て最長期議會といひ國王より年金を受け甘て王の奴隸と爲りたりとの意にて年金議會の名あり内亂時代の王黨即ち騎士黨の如く勤王心に富めりとして騎士議會と云ふなり

- (一八)第二コンベンション議會 一六八八年光榮革命(グロリヤス、レボリユーション)國王ジェームス二世蒙塵するや一六八九年一月議會はウキリヤム及マリイを荷蘭より迎ふ此議會は一六六〇年のと同く國王の召集を待たずして集會しけるに因りてコンベンションといふ

- (一九)治平議會 (Pacific P.) 一七一二年の議會にしてウトレヒト條約を協賛し因りて十一年間の西班牙王位繼承戰役の局を結ひたるを以ていふ

- (二〇)グラタタン議會 (Grattan's P.) 一七八二年の議會にしてグラタタン氏は大に愛蘭國のために運動し英蘭合同を破壊し愛蘭の獨立を得むことに盡渾したるにより呼はる

# “Shall” and “Will” E. Snodgrass.

“Shall” and “Will” refer to future time; and there is always in them a conception either of simple thought (I think etc) or a conception of determination according to the context. This

conception ascertained from the context decides whether “shall” or “will” ought to be used.

For example, take the following sentence of Dr. Johnson:

“If a man does not make new acquaintances as he advances through life, he will soon find him-

self left alone."

There are two actors in connection with this sentence. One is Dr. Johnson who wrote the sentence; and the other is the person of whom he speaks. Dr. J. says of this person, "He will soon find etc." In the mind of Dr. J. there is only what he thinks about this man, and no thought of determination. Dr. J. might say, "I think he will soon find etc." Here "I" is one party and "he" is another and different party. So do the pronouns "I" and "we" represent different parties.

We can now form two rules.

I. In the case of simple thought, when the parties are the same, use "Shall"; and when the parties are different, use "will".

Exception: In case of the 1st person "I", always use "Shall"; as, "You think I shall go to town". According to the rule, the parties "You" and "I" being different parties, "Will" should be used, but this form is an exception to the rule.

II. In the case of determination, when the parties are the same, use "will"; and when the parties are different, use "shall".

Example: "The diligent student resolves that he will conquer his difficulties". Here "student" and "he" are the same party; and according to the rule, "will" is correct.

Below, is given the forms which cover all cases:

Simple thought.

|         |           |
|---------|-----------|
| I think | I shall   |
| "       | you will  |
| "       | he will   |
| "       | we will   |
| "       | you will  |
| "       | they will |

Determination.

|                      |            |
|----------------------|------------|
| I am determined that | I will     |
| "                    | you shall  |
| "                    | he shall   |
| "                    | we shall   |
| "                    | you shall  |
| "                    | they shall |

You think

You are determined that

|           |
|-----------|
| I shall   |
| you shall |
| he will   |
| we will   |
| you shall |
| they will |

|            |
|------------|
| I shall    |
| you will   |
| he shall   |
| we shall   |
| you will   |
| they shall |

|           |          |
|-----------|----------|
| He thinks | I shall  |
| "         | you will |

|                       |           |
|-----------------------|-----------|
| He is determined that | I shall   |
| "                     | you shall |

|            |            |                          |            |
|------------|------------|--------------------------|------------|
| "          | he shall   | "                        | he will    |
| "          | we will    | "                        | we shall   |
| "          | you will   | "                        | you shall  |
| "          | they will  | "                        | they shall |
| we think   | I shall    | We are determined that   | I shall    |
| "          | you will   | "                        | you shall  |
| "          | he will    | "                        | he shall   |
| "          | we shall   | "                        | we will    |
| "          | you will   | "                        | you shall  |
| "          | they will  | "                        | they shall |
| They think | I shall    | They are determined that | I shall    |
| "          | you will   | "                        | you shall  |
| "          | he will    | "                        | he shall   |
| "          | we will    | "                        | we shall   |
| "          | you will   | "                        | you shall  |
| "          | they shall | "                        | they shall |

We give here two illustration.

"Such men will make a firm and solemn pause". Here the writer is one party and "men" are the other and different party, and the conception is simple thought (future). The form would be, "I (the writer) think they (men) will make etc."

Again: "mistakes in the proof should be called attention to by certain marks which shall hereafter be described.", Here the conception in the mind of the writer is of determination that the marks (used in proof-reading) shall hereafter be described. The form would be, "I am determined that they (the marks) shall be described."

What is said of "shall" and "will" applies also to "should" and "would". In every case, the first thing to be ascertained is the conception, — whether simple thought (I think etc.) or determination. Then the next thing to notice is whether the parties are the same or different. The application of the rules will be easy.

## 公法上臣民の三大義務

本 問 好 茂

我が帝國の臣民は公法上三大義務を有す、第一、國法を遵奉すべき義務、第二、兵役の義務、第三、納税の義務、是あり

### 第一、國法を遵奉すべき義務



吾帝國の臣民が國法を遵奉すべき義務とは、國法の命令せる行爲を爲し、並に國法の禁する行爲を爲さざるの義務あり、若し此義務に違背して國法の命する行爲を爲さず又は國法の禁する行爲を爲す者あらん、是れ忠良ある臣民にはあらざるあり、國法を遵奉するの義務は別に吾憲法に規定せざれども規定なきが故に國法遵奉の義務なりといふ可らず、是れ臣民たる資格に伴ふ必然の結果なるが故に敢て憲法に明文を掲ぐるの必要なきなり、吾憲法第一條に、大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治せとあり、天皇は統治の主体即ち主權者にして帝國を統治し玉ふ權力の存する所なり、是實に吾國体の精華にして外國の如く國土を征服者に對し又は選舉したる者に對する觀念を以て主權者を戴くの例と異なる所、我國建國以來時に盛衰あり世に治亂ありと雖も、皇統一系實祚の盛あるは天地と與に窮なく、一系の皇統と相依て終始し、此國体を保持して永遠に存續すべきものあり、唯憲法に天皇の統治者たることを示したるは形式的に明記したるに過ぎず、天皇は吾帝國の統治者にして臣民は服従者なり、故に臣民は天皇の意思たる法令に服従すべき義務あるものなり、即ち臣民は其性格に伴ふ必然の結果として國法を遵奉すべき義務を有す。

## 第二、兵役の義務

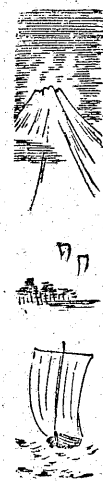
吾憲法に臣民乃義務とて特に明文を掲げたるものを兵役及納税の義務とす、兵役の義務とは國を防衛する軍隊に入り國の戰鬪力を組織する國民義務あり、兵役は封建政治の世にありては兵士たる一階級の負ふ所ありしも、吾國今日の如く國民皆兵の制度を採用したる以上は國家の生存を全ふし其獨立を維持するには國民一般に兵役の義務を負担せざる可らず、兵役に就きたる者は

單に器械的に其勞力を國家に供するのみを以て足れりせず、一身を捧げ義勇公に奉ずるの忠誠あるを要す、忠誠に其勞力を供するは道德上の義務にして法律上の義務にあらずとすは非あり、臣民が忠誠に兵役の職務に就くは常に道德上の義務なるのみならず、法律上の義務あることを忘る可らず、獨逸の國法論に *Offentliche dienst* といふことあり、所謂公役是あり、公役とは忠誠に國は公の職務を負担することといふなり、官吏の職務は公役といふものと其要件とす、吾が臣民の兵役の義務は所謂公役の一種なり、吾臣民は天皇に對する服従者あるが故に忠誠に兵役の職に就くといふことが法律上當然の要件とあるなり、普通私法は範圍に於ける義務を誠實に履行するといふことは、法律上の義務にあらずして單に道德上の義務に止まる、此點が區別あるなり外國人は吾國法上吾國に對して兵役の義務を有せず、是兵役は國に忠誠なるものと其要素を爲すが故に吾國民にあらずる外國人は、其要素に於て欠く所あればなり、此事大に注意をすべきことあり

## 第三、納税の義務

租税は財政上の收入の爲に國家が無償にて臣民より其資産を強制徴收するものなり、納税の義務とは臣民が國家に對して租税を納むるの義務をいふ、此の如く納税は國家より其臣民より貴重なる財産を強制徴收するものなるが故に、吾憲法は亦兵役と同一く之を其中に規定し、以て臣民の公法上の義務とす、元來租税は國家が國家として生存し其目的を達するに必要なものなり、故に國家の分子たる臣民は各法律に定むる所に従ひ一般に租税を納むるの義務を負担すべきもれあり、此事至つて明くありと雖も、此思想は近世國家思想の發達に起因を沿革的に言へば、

古の君主は事實上の優者にして臣民は事實上の劣者なり、故に君主は其腕力の制裁によりて臣民より其資産を徴收したるものなり、又は國の領土は君主自身の財産あり、臣民は唯恰りも君主に對する小作人の如く、君主と臣民との關係は民法上の小作關係に過ぎざりあり、降つて中世に於ては、君主が臣民より費用を徴收するは君主が時々必要に應じて命じたる御用金 (Beiträge) を献したるに過ぎざることあり、又君主が特別に人民を保護し、臣民は之に對して君主に報酬を拂ふたるに過ぎざることあり、此の如く古の國家及中世の國家に於ては、臣民が當然に國の經費を負擔するといふ觀念存在せざりしなり、是此時代に於ては國の政治簡單あるが故に君主が自己の財産にて凡ての國の費用を充し得たるが故あり、然るに封建制度廢止せられ、中央集權の制度となるに及びては、國の政務甚だ繁雜なると同時に、俄かに國費に於て大なる膨脹を來し、到底微力なる君主の私有財産にては之を維持するを得ざることとなり、又人民自由の意意に出てたる献金の如きものもては、國の財政の基礎不確定あるを以て、必要上國の費用は、人民一般の負擔となすの必要生じ、國家思想漸く一變し、國家は人民保護の爲に政治を爲し、一般臣民は其費用を分擔すべきものなりといふ理論が發達したるものなり、之に關する詳細なることは、Max Seydel の Das Finanz Recht 及び Stein の Finanzwissenschaft に詳説せり、余は今唯其大体を示したるのみ。



能 登 半 島

平 岡 鳩 園

中秋月明の夜、征衣に禦を横へて、越山台せ得たり能州の景と吟たりけん、古英雄の魂を吊ふこにはあふねど、能州半島は山光水色は、北陸八州の内、最秀麗にして、跌宕あるもの、我兼六公園より北望して、この瀟洒なる山水と蹂躪せざやと、思ひたることも幾度ぞや、今茲、三月の末の方より、四月の初に渡りて八日間、吾等數友と語らひて、始て其宿望を達す。

三月三十一日、豫てこの日の一番汽車、午前五時幾分と云ふに、出發と定めに、各自金澤驛に待合はさんどのことなりをもて、曉を犯してステーションに至るに同行の面々、牛塚虎太郎、笠原忠造、淺野繁二郎の三子未だ至らず、發車の時刻愈迫りて、尙影を顯はさず、已れより遅れて來りたる人れ、我より先きに乗りて、今は孤影孑然、廣大なる停車場内に、獨り己が姿を認むるのみ、あゝ愚にも已れの誑うたれたることよ、さるまでもこのまゝ獨り旅立たんよりも衆と共に樂しむにいかざとあし、寢汚き彼等が夢を驚かして、彼等が旅行の素志を確かめんとす、乃ち踵を返して高岡町に淺野子を抑けば、洋服、脚絆の旅裝束、甲斐々々しくしたるまゝ、蒲團被りて、只管に笠原、牛塚兩子の約を食みたることの、不平を我に訴ふるもをりく、急ぎ使を走せて兩君を呼ぶ、稍ありて使と共に兩君來りければ共に午前九時發の汽車に乗りて金澤を發す、此時朝來の曇雲四散して日光鮮かみ輝き渡り、左顧すれば暁眸遠く開け、河北瀉の水激澗として波浪怒々、右眄すれば、加越の連山起伏して、山腰一帯の紅霞に彩られ、遅れ勝なる北國の花には尙早けれども、此れと定めぬ春の山色亦多少の趣味あらめや、津幡に至り七尾鐵道に乗り代

へつ、やがて瀛車は名残の煙をのこして徐ろにステーションを離れぬ、宇野氣附近にやありけん、柳眼緑を点卜て、そよ吹く風は梳ぐれ、園圃の桃花五六輪綻びをめて、紅の火を点したるが如く、嬌艶人を惱殺せんとせり、此より瀛車は、小松原の間を通りて、高松に達しぬ、東南を顧みれば山脉蜿蜒として、翠慢を廻るが如く、群峯を壓して、雲漢に秀でたるは寶達山なり、松柏千秋の翠を湛へ、山巔は一角尙白雪を冠したるは、春風未だ能州は山奥に到らざるなる可し、奥村氏の舊城は墟を末森山の頂に遺し、そのに関は聲凄まじく、佐々成政が攻め來りたる三百年れ古を忍ばしむ、羽昨お近づくに従ひ、邑知瀉白きこと鏡の如く、片舟れ軽く往き來る様亦格別れ趣ありき、羽昨驛お下車して徒歩能登の外浦より旅を初めんとす、羽昨の町に分れ羽昨川を渡れば亂松亭々として道を挟む、約一里半おして、柴垣村に到り初て外海の景に接す、長手崎、海中に斗出し、洋々たる海水三面を包擁して蔚蒼たる松樹白砂の上に亂生す、風光極めて多趣、書にかける天の橋立もこれには遠く及ぶまどとの感あり、しるも其西北を望むときは浮圖塔高く林梢れ間に現はれたり、名を問へば瀧谷の妙成寺とて法華宗の本山ありと云ふ、則路傍の青草を布き此景と此趣とを眺めて辨當を開く、味の甘美なること八珍にも優る思ひあり、更に歩を起して進み行くお、高濱に至るまでは陂陀斷續して平凡他奇なきの山間をたどるのみなりしが、一人あり呼んで曰く、桃の天々たる其葉蓂々たり、此子茲に歸つぐと見れば行く手に當りて、盛裝を凝したる嫁入りの行列美々しきに、此風のみ國中到る處に變らざりけりと思ひぬ、午後二時半高濱に入りぬ、小學の兒童に途をたづね福浦の方向を尋ぬ、碧流滾々として日本海に注入せる神代

川を渡り、志賀浦の閑雅ある磯邊を傳ひ、黝岩海中に散点せる處を通りて、福浦港なる旅舎竹内方に投したるは、歸帆蒼然たる暮色、載せて至れるの時なりき。

四月朔日、天氣晴朗、朝暾と共に出で、一葉の片舟により、海路富來に至るとす、此間詭岩怪石尤も多く、陸上の遠望は、海上の奇觀に遠く及ばざるあり、乃ち舟を艤して大崎の端より出づ、福浦漸く遠くして霞の内に隠れ、西は則ち水天髣髴として遠く朝鮮、シベリアに對し、東は近く嶺岩怪島を眺め、揖言面白き船の浦曲を傳ひ、名も知れぬ海島の長汀に群遊するを望む、黝岩海中に蟠起し、鵬の扶搖を搏つて、南溟に涉らんとするが如きものは、これ碁石、碁盤と稱する島にして、舟子に聞けば、其昔此浦に美濃浦左衛門と稱する富豪ありしが、屢此島に遊びて、岩頂の小池中に現はれたる磐上に、碁目を刻みたるに依るなりと答へぬ、鷹の巢岩、海水を抜いて矗立すること數十丈、松樹其上部に亂生し、雲を起し、煙を纏ふ、其北に巖門あり、一道の通路、裏より表に通じ、洞窟恰も門闕の如く、自在に舟をやりて通行し得可しと云ふ、其背後に一少瀑布あり、不動け瀧と云ふ、舟の進むに従ひ、更に素絹の峭壁に懸るものあり、之を牛下の瀑と云ふ、稻花ヶ崎、塔の腰、機具島、小杉島、繼母が島、等の島嶼、累々として海面に峭立し、吟眸を向くるお違あらず、蒼々たる萬里の水、吾等幸に此の清淑の境に來りて、波上の天鷲に長嘯す、氣怡び神寛やのに、恍として雲氣に乗り、飛龍に御して、四海の外に逍遙するの心地するも亦理りありや。

富來に至り、舟を去り岩に登り隧道を潜りて町に入る、富來を出づれば忽山路なり、殊に東北に

は嶂嶺重疊して高瓜山の清姿九宵に峙ち、一昂一低山窮りて溪を歩み、谿谷まりて又峯に登る、深谷峠に中飯をすまし、僅かに勇を鼓して山嶺に登りつむれば、忽豁然として劍地村の風光山下に開け、粗鬆單調なる景色に見飽きたる吾眼界を一新せり、此時風和らぎて、日は紅に麗しくなる碧天に沖し、東は劍地の岬灣一帯、紅霞立罩めて紫雲白点、青松の陰に現はれ、西方には空瀾漫々として相涵す所、征帆烟霞の間に出没し、海岸を繚繞せる白砂は、瀝々として寄せ来る浪に洗はれつ、光景の多趣ある我筆の及ぶ所にあらず、吾等又砂を踏み霞の中に立ちて、更に此の好畫中の人物となる、然れども白砂鞋を没めて足徒々に惱めり、黒島村といふを経て、午後四時門前村に達し、直に越前永平寺と並びて、曹洞宗の大本山たる諸嶽山、總持寺に詣り、案内を乞ひしふ、生若き僧侶一人、焼失せる伽藍の趾を、指点して懇ろに吾等を導きたり、聞く此寺は佛慈禪師の開基せるものにして、後醍醐天皇より親筆の額を賜はり、後村上天皇の綸旨を辱ふし、京都なる南禪寺と比肩する勢なりしも、惜しむ可し、明治三十一年の春、法堂に火起り、巍峨たる棟桷も、巧妙なる彫鏤も、忽ち灰燼となり、見る見る内に延焼して、佛殿、僧堂を拂ひ、紫雲臺、祥雲閣の如き、規模宏大にして、莊嚴を極めたる殿堂も、海内稀に見る所の大伽藍も、一夜の内に恐ろしき、焔の嘗め盡くす處となりて、今は只四周の鬱葱たる樹間を殘鶯のうぐさびしくもなけるをさくのみ、乃ち辭して旅館中村方に投ず。

二日、樂しき夢を總持寺の鐘聲に破りて、起き出づれば日はうらくと、山巒を照らして嵐氣袖に落ち來りつ、午前八時半と云ふに門前を出發す、是より輪島に至る道二條あり一つは皆月を經

て海岸より至るもの、他は山間、鳳至谷<sup>フニシ</sup>を通りて行くものはなり、吾等は後者を取り羊腸たる坂路に其健脚を誇ぐんとす、(暫しは麥隨菜畦の間を通り、告天子の高く天に嘯づるをきいて進み行きしが、此處あたりには珍らしき程、能州訛りの少き人と道連れとなりき、彼は曾て近衛師團に入營中の面白き話をあして、我等に旅情を慰めつ、かくて彼と別れて、漸く山路にさしかゝりぬ) 思ひしよりも道路よく開けて、今や尙道路修繕中の處あり、然れども四顧すれば、群山紛糾して、雄峻奇聳するもの、稜峭秀拔あるもの、或は螺の如く、拳の如く、高低起伏して、攢簇せる様、百重、五百重の波濤の如きに、晴嵐横ざまに、山頂を掠り、一片の白雲悠々として、幽谿、深澗の底に起り、歌謠ふ鶯の聲、反つて一層の幽寂を増す、斯くて坂又坂を登る程に、老杉森々として陰闇き處、白玉の如き皎雪の一塊、尙消え残りたり、即走り寄りて一攫、之を口に含めば、冷風飄々として掖下<sup>掖下</sup>に起り、渴頓に醫えぬ。

中に溪流を控え、軒古くして青苔の屋上お生じたる農家五六戸、雞鳴相和して牛馬の嘶き、こぼまに響く所は、二俣山莊なり、時已に午を過ぐるを以て、とある民家に入り、用意の辨當を啖はんとて、湯を求めしに、老嫗番茶を供していと懇ろありしもうれし、是より坂を下り坦夷ある道と匣りて午後三時輪島町に入り、直に輪島町役場に到り、輪島の概況殊に漆器に就ての景況一斑を探る。

宿を廣谷方に定め、茶を飲み、菓子を喰らひ盡くして、後輪島公園に至りぬ、北望すれば輪島崎、此灣を擁して、水浅く巨艦を碇泊する能はずと雖、漁船輻輳して頗る函館の趣あり、更に袖が濱

お下る、爛爛たる瑣具、落花の地に散り布きたるが如き細石と混じ、夕陽斜に之を照らして、風色一つの雅緻を加ふ、宿に歸れば十二銀行輪島支店長、長谷川某氏、淺野君の爲に我等一行の旅情を慰めんとて、ビールを送られたり、即一盞を傾け、一同陶然として酔ふ。

三日、曇、昨夜の影響に依り、歩行し難しと笠原氏一人を宿に残して、輪島を發す、此日は神武天皇祭の日なり、旭旗片々として竿頭に飄へり、春風面を吹いて暖あり、是より沿海の新道をたどり行くに、七つ島、煙波縹緲の間に出没し、三つとあり四つとあり、更に七つとなる、里村よりは、例の砂深き海濱なり、右には岡巒青々として綿亘し、松吹く風、琴の音を出せば、左には海水茫々として磯打つ波の響、鼓に似たり、町野川の渡りを舟を乗る頃より、春雨霏々として至り、柴負ひたる山賤、藻鹽汲む海士、急ぐし氣に此處かしこに走る亦趣あり、左を顧みれば瀛海萬里、波濤遠く西比利亞の彼方より來りて、脚底ある岩石を洗ひ、更に飛舞奔騰して、鞆たる響、百雷の一時に轟くが如く、豪壯雄大、實に能州に於ける第一の奇觀なり、之を能登の親知らずと云ふ、山海の間、僅に一尺の幅を有せる、細徑巖壁を傳ひたるに、徑窮まりて、岩腹に隧道を穿ちたり、此の洞を潜り出で、山角を右に轉ずれば、截然たる斷崖を劈きて、數十尺の水晶簾、山腹に垂れ、更に二條となり、三條とあり、遂に數十百條の銀線となり、飛沫恰も玉を舐して海中にたぎり墜つる様いと興あり、嗚呼能州此跌宕雄偉なる山水を有し、瀟灑秀靈なる佳景を控へ、人をして氣宇濶然、萬丈の霸氣を胸中に磅礴たらしむると雖も、其名天下に伝へらる、山海もし靈あらば、世人が已を遇するの甚だ冷淡あるに泣くなるべし。

眞浦を経て、仁江崎の急峻を越え、左に平坦ある大盤石の碧海の内に横はるを望み、更にまた關崎のトンネルを通りて、大谷に着きしは晚鴉春雨に濡れて、櫓に歸る頃ありき、即旅館小樹屋に投ず、室は日本海に臨める浪打際であり、浴後幕に就けば簷滴点々として、明日の發程いと心元あし。

四日午前六時鞆たる濤聲に驚のされて、夢を破れば心なき春雨未だ霽れやらず、朝餉すましたる後外套深く被りて大谷を發す、遠近の岬灣、島嶼、烟を纏ひ雨を帯びて、見る目新しく變り行く景致、中々に捨て難き趣きあり、此より狼煙に至るまでは道路最も嶮惡なり。

狼煙村なる祇岡崎の上に、二等燈臺あり、白色輪狀の建築物、高く聳いて航海者の目標とある、刺を通りて其内部を窺ふに、精巧堅緻なる玻璃燈ありたり、就て其光力を問へば十八海里に達し、佐渡を離るゝこと五海里にして、初て其光を望むことを得べしと云ふ、試に窓より外面を眺むれば海水茫々として佐渡々島、遙かに雲の如く、海中に横はれり、此狼煙の崎は、高波崎、塩津崎と共に總稱して珠洲岬と云ふ、航海者の目標となる山伏山の一角を、躡み下れば、渚近く寺家と稱する村落あり、松杉陰深く生ひ茂れる亂丘、須々神社の後を環り、鈴浦砂清くして、磯島、雲霧渾合の間に現はれ、浦風習々として櫓聲楫音、勇ましく傳へ來る、粟津よりは亦山路あり、雉子の聲虧々として聞寂たる全境に響き渡り、鶯の聲轉々として大珠小珠の玉盤に落るが如し、此等幽邃の境に大池あり雁が池と云ふ、水色靑靑にして山影其面に蘸す、此より泥濘たる山路を越えて、正院に出で、坦路飯田に入りしは午後五時頃ありき、此日行程僅に八里なれども、砂汀を傳



ひ巖角を踏み山坂を攀躋せることゝて、足棒の如く疲憊すること尤も甚しく、青木てふ旅宿に投  
つて、爐邊の周圍に座りたるまゝ、一寸動くことすら惜かりき。

五日晴、重き足を引摺りて飯田を發す、坦々たる道路は、風景の奇とす可きもれなく、凡庸なる  
海岸の景致にも已に見飽きたれば、亦喜ぶ可きものなく、月見島はあれども、皎々たる月見る術  
も無く、名のみ風雅なる松波を過ぎて、越坂に至れるとき、嚮きに輪島に袂を分ちたる、笠原氏  
と再會して共に九十九灣の景を稱しぬ、越坂れ地御簾山に對し、九十九入の海門を作りたれば、  
風激しく吹きたれども碧波怒らずして、舟は疊の上を滑るが如く、晴光海底を照して淪漪の内に、  
海月歷々蘋藻の間に舞ふを見る、更に舟を返一撈を轉つ、曲岸回渚に遵ひて進む程に甌島に達し  
ぬ、宛然として島後又一灣あり、其昔賊公租を奪ひて、其島陰に匿れたるよし舟子に教へられた  
り、斯の如く或は出で或は入りて、谿たる石骨を仰ぎ、点々たる茅屋を眺め居りしが、吹上山、  
灣の西北なる連山中に削立せり、其上に登りて下瞰するときは、津久茂の風色双眸の内に映じ來  
ることありしが、惜哉上ることを果さざりき、此方に一島あり、碧樹翠蔓を被り、遊糸、島  
を繞り、鳥啼き蝶戯る、實にやこれ仙樂を聞き、霓裳羽衣の舞を見るが如し、此を蓬萊島と云ふ、  
聞く、昔、秦皇、長生の藥を蓬萊ヶ島に求めし、時幾多の人は、水烟漂渺たる潮路の間に彷徨し  
て、哀れ海上に年を過し、玄宗帝が楊貴の魂魄を求むるや、臨江れ道士、風に乗りて九天を驅り、  
氣に依りて奈落の下をくぐり、辛うして蓬萊の島に至りけりと、然るに吾等容易く、此蓬萊の島  
に來りて、靈淑の氣を吸ひ、快く吟眸を恣にして、握飯を啖ふ、何ぞ不死の靈藥なきを憂へ、佳

人の神に逢はざるを憾みんや、蒼々たる海水長へに此島を繞り、山巒屏風列ねたるが如く、回汀  
曲浦に沿ひて削立し、南は淺野浦より、霞罩めたる釜剗山、緒々頭を顯はし、向ふは越坂の岸に  
して、片舟島影を碎いて、往來す、何れの愛でたからざらん、已にして岸に着き、小木に至りて  
舟を雇ひしが、風荒れ波高ければとて、法外なる賃を食られつ、撈と操りしめしが、波濤洶湧  
して小舟を弄し、屢舷を打ちて、餘沫渾身を沾はしぬ、東南遠く雲を戴きて、淡く屹立するものは  
越中の立山なり、群山其下に排列し、遠く其窮まる所を知らず、岸に近く辨天島あり、形頗る伊  
勢二見の岩に似たり、白鷗群をあし、飛び去り飛び來りて、海上に浮沈し、眞帆片帆、風を孕み  
て夕陽を浴び、思はぬ方に漁船の煙を吐きて波を蹴來るやど、佳景一々數ふ可かず、午後六時  
二十分、宇出津に着し川端てふ客舎に入る。

我想ふに外浦の風色は、豪宕雄偉にして、猛き武夫の三軍を叱咤し、旌旗堂々として千軍萬馬の  
間に馳驅奔走するが如く、内浦の景は秀麗精緻にして、後宮の美人、粉黛を施し、玲瓏たる玉樓  
に、緩歌慢舞するが如し、誰れう僅かに内浦の景のみを窺ひて、能州の全景を評し去るものぞ。

六日快晴、はの間の朝の五時に起き出で、準備を整へたる後、神通川丸と云ふ小蒸氣船に由り  
て、宇出津を發す、曉鴉鎮守の森に騒かしく、旭花やかに東方より差し昇れり、崎山鼻を経て、  
灣外に出づれば、水烟渺茫として、大魚の波間に躍るものあり、二子山、富嶽の面影に肖通ひて、  
遠近の島渚、白帆を吐き、舟影を吞む、大口峽を通過するとき、左舷に落ち來るものは能登島の  
山影にして、附近の島嶼基附散点し、奇を出し勝を爭へり、能登島は周回十八里を有し、島中處



々に馬を産す、彼の宇治川の先登を争ひたる佐々木高綱が、其主頼朝より賜はりたる名馬池月は、亦此島の産なりと云ふ、かくて舟穴水港に立寄りぬ、一灣の水漫々として波浪騒がず、微風髪を吹き、棹聲櫓歌に和して面白し、港内少しく狹隘の感あるも、北方の重鎮として、海軍鎮守府の建設せられ、一大軍港とあるは遠きに非らざる可しと云ふ。

船、能登島の西端ある、最も狭き海峡を通りて、七尾の西灣に出づれば、海面白きこと鑑の如く、島嵐山靄、亦多趣あり、午前十一時船、和倉に着しぬ、我等もこゝに上陸して、有名なる温泉に旅の憊れを忘れんと欲し、こゝに上陸して宿を和歌崎に定む、和倉の地、西灣の南端にあり、北に能登島を望み、東に屏風崎を叩へ、前に辨天島は景を含み、風風波立たずして、海鳥三四、水面に游泳し、松風微吟して、客情を慰す、殊に靈泉水滑りよして、清温瑩の如く、一浴すれば春風軽く、神を洗ひて吟骨に徹し、陶然として、身の延ぶること幾寸あるを知らず、聞く和倉の湯は、其初め海中に湧出しけるが、靈鳥あり足を浸して以て人お示せりと、荒稽の言笑ふに堪へたり。

七日、曇、朝遅く起き出づ、蓋し本日行程尤も少きを以てあり、即平坦なる海岸に沿ひ、徒歩七尾の町に入り、寫眞を撮影して、本回能登周遊の紀念とと、中央に矗立し皆を決して宇宙を睥睨するものは即余なり、其右方椅子に依り地圖を手にして莞爾たるものは、牛塚子あり、座して右手を膝に―沈思默考靜りに宇内の形勢を窺ふものは笠原子なり、双手棒を握り椅子に依りて心中無限の情を有するものは淺野子なり、嗚呼此一枚の紀念寫眞、後來何の紀念となるか、此日午後

三時發の汽車に乗りて金澤に向ふ、沿道の風色、一週日以前に異りたるは、桃花已に散りて、櫻笑ふやうになりたるのみ、午後第六時再金澤に入る。

(明治三十四年四月二十日稿)

## 讀史餘憤

くわうあん生

### 首 功名心と帝國主義

劇を觀よ、仁木彈正の徒が生來の家恩を忘れ五十四郡の宗社を私せんとするを見て之を壯なりと評する者ありや、貞九郎が老爺を殺して其の財囊を奪ふを見て之を勇ありと許す者ありや、看客は必切齒して其の暴を憎むあるべし。然り評定所の裁判が夫の陰謀を破るの時、猪を射つ丸が天に代りて夫の盜賊を仆すの時、看客の憤始めて解け拍手に其の恨を醫するものは即ち人間本然の聲あるあり。單り怪しむ、羅馬國民が無名の師を起して人の國を奪ひ、那破翁が覇業の妄夢に驅られて多數の良民を害せしを見ては、彼は雄大の國民ありと稱揚し是は稀世の英傑なりと敬慕する所以のものは何ぞや、彼の劇に見たる者にして惡逆なりせば是れ如何でか許容すべけん、予は常に世人が史を讀むとし云へは其の本然の良心に背き是非を顛倒して而も自ら覺らざるを見て浩歎に堪へざるなり。抑も人生をして此く天賦の良心を痲痺せしむるものは何ぞや。

上

歴史は或は英雄豪傑と呼べるゝ人の傳記なり。衆曰はく那破翁は英雄なり比斯麥は豪傑あり何某は英雄なり豪傑ありと。然り衆の謂ふ所の意味に於ては即ち英傑なり、否れのみにあらざるな

り、其の意味に於ては足利尊氏も英傑あり王莽も英傑あり、盜跖も石川五右衛門も亦英傑と稱すべきにあらずや。良を壓する武威を以てし、暴に向ふに慘を以てし、姦に食はずに利を以てし、直を瞞ますに詐を以てし、克く一世を籠蓋して己に従はしめ以て其の野心を遂げたるものと皆一なり。此の如くして彼等は或は巨萬の富を得て金殿珠樓を造り以て俗間に威張りたり、或は帝王將相とあり百官を随へて時人の頌徳と甘受したり、これ所謂大功名なるものなり。而して、この樓閣人爵は衆の理想とする所、故に一たび其の傳記を讀むに及んでは感歎措く所を知らず、惚れ込めば痘痕も顰の喩への如く、其の許多は惡逆無道を認むる能はざるに至る、而して言ふ大功は細謹を顧みず、巧みに世人を利用して己の具とあすは人生の快事、正義人道の語は畢竟弱者の遁辭に過ぎを。かくて野心を遂げたるの英雄とを崇拜しつゝ幾多善良の民衆が其の犠牲とありを察せざるなり。乃ち印度の諸侯は吊はれずしてクライブヘスチングス百世に稱せられ、シールの徳は永久に頌せられてブルークスの賊名未だ雪がれず。又等しく野心の傀儡なるも家康を稱して三成を誹り、項羽を疎狂と評しつゝ沛公を聖主と賛す、其惑へるの甚しき予殆んと言ふ所を知らざるあり。此く言はれ衆或は言はん、英傑の所爲固より瑕瑾多し、普通の標準より觀れば罪惡亦少あらざらん、然れども其志本と國の爲め世の爲め或は君の爲めにするに出づ、察せざるべけんや、後世の彼等を見る宜しく寛大あるべきあり、實に吾等の那翁シーザルを賞揚して盜跖五右衛門の輩と別つ所以此に在りと。嗚呼彼等の奉公忠義、予俄かに首肯し難し、若しこれあるも、所謂枉尋直尺なるを奈何せん、よし國の爲めとせん、予又別に説あり。

下

歴史は或は國家部落若くは人種争闘の記録あり。而して國民には固より大國民あり小國民あり、人種の上に於けるも亦然り。今形を以て之を例ふれば、人に肥大あると瘦小なるとあるが如し、大國民は人の善く攝養運動を慎みて大軀となるものに似たりと雖も、人の肉を喰うて強大とされる例の御伽噺中鬼に比すべきものは、決して大國民ある名稱を附すべきものにあらずあり。悲いか、衆の所謂大國民なるものは、人肉を喰ふの群を指せるあり。あゝる人類相集りて部落を成し國家を形り、以て人の國を侵し財を奪ひて自ら養はんとし、遂に歴史は宛然戦争の記録なるが如き觀を今日に遺したり。所謂帝國主義あるもれば、實にこの遺物にして人肉を喰ふ宗旨なり。これ宗旨は近世特に其盛を致せりと雖も、其の精神は上古よりこれありて英雄豪傑とて呼ばれる人に無道の種を興へたり、さてその宗旨を最も克く信行したるものが、衆の所謂大國民なるものあり。抑もかゝる國民は果して吾人の理想とすべきものあるか、予は言を爲すに却て愚あるを思ふあり。而して古來非常の人出づれば、必外征を爲し人の國を奪ふことをこれ勉む、英雄と稱せらるゝ人即ちこれあり。所謂大國民とはこの侵略的國民を指せるあり、これを稱して國の爲めにするといふありけり。而して無神經の史家これを稱揚し、良心麻痺の後人これを學び以てこれ無道の世界を致せり。嗚呼國民の事此處に在るべき乎、抑も人道を奈何せん。予不幸にして露國の勃興を稱するを聞けり、而も 波蘭の滅亡を悲しむを聞かず、羅馬國民の雄大を謳歌するもの多くして、カーセージ亡民の慘に泣くものは少なし、うくして輓近黑龍江屠戮の事は文

明國間の問題とあふざるなり。嗚呼國の爲め吁國!!!

尾

抑も勞すること少あくして、得ることの多うらんことを望むは人情自然の致すところにして、功名利達を理想とするは小人の常、汗漿の辛苦よりも一攫千金の手早きを思ひ、權略を用ふるを以て人心を得るの捷路と信するものは輿衆の大部にして、其れ等れ然る所以を證せるものは實に歴史の半面あり。夫れ劇は最後の幕に於て邪の終に正に勝たざるを示すと雖も、歴史上の事實に於ては其の然らざるもの甚だ多し。故に史を編むものは宜しく孔子春秋を作るの心あるべし、之を讀むものに於ても亦同し。嗟歴史は人類の歴史なり、決して獸鬪の記事にあらざる也……文明と稱せらるゝ世界に於て、うゝる陳腐の言を爲すの要あらしめたるものは、乞ふ深思せよ。(一月三十日稿)

Dieu veut qu'on soit soumis aux lois de ses parents;

Que le coeur et la main s'ouvrent aux indigents.



文 苑

夢 は り

山

吹

夜深けてわが夢覺めたり、覺むる刹那ありくと見えしこと、臉を開きたるときはや消えたり、汗そびらに満ちて、胸のといろさいとはげし、嬉しかりつる今は、あはれはかき夢にてありしよ、あなあはれ、なつめしきもなつめしうて朝夕たゝかもひ暮らす我が母は、はたいつの世にも歸りまさぬ、いなる折にもまみゆるを得ざるか。去歲しはすの末つた相摸なる南湖の濱に宿りし夕のなき夢におそはれて只ひとり無限の想にふけりぬ。宵に長く親しみたる燈火消えて暗黒なり、室は黒く更々に黒く夜は深く更らに深くなるまゝに近く聞ゆる波濤の聲、枕にどろき、只物狂はしうたちて家を出でぬ。行きぬきて、危ふげなる磯岩にしばし休らひぬ、半輪の寒月は靜うに長汀曲浦を照らして磨きたる鎌をかけたるに似たり、その影浪に碎けて千々の黄金の散る如く、又物思ふ人の情をうつすが如く見ゆ、點々たる漁火うなたに消えて、こゝたにもえて無常明滅の光を擧ぐ、岩角に茫然としてたゞめば暗涙滂沱として雨の如し。おもひ出す過ぎし夏の夕、親しき友のひとり美しき理想の夢にほゝ笑みて、かたみに未來を語り交はしはげにこの岩なりしよ、さるを運命の波は、うたてや、友の身をも泄らさず潮暗逆捲く千々石灘上、友はこほり歸りぬとほき旅路に趣きけり、あはれ死の海の底ふかく沈みゆきし友の身よ、至

愛ある母神の乳房にすがりて今いうある夢をう結ぶらむ、げに樹しづかあらんとすれば風やまづとや、われ、母を失ひ姉を失ひまた友を失ひて、うき月日を泣きわたること、こゝに幾年ぐや。あゝ我れ俯仰して宇宙の悠久をなもふ、たうく寰極をめぐりて永劫のひかりを放つ星の光りに啓示あり一切妄執の念をはなれて光明十方に普き月の光りに諫誡あり山は高く海は清く幽玄極りあき自然の懷にこゝに形體をそへ魂をもちて來りたる人いづくんや無意義あらむや、しかも十惡の罪業天に漲り五濁の魔法地をひたし、運命の波れまに／＼漂ふを思へば、われつひに悵然たるものなき能はざるなり、あゝわが身は、たほうみの山あす波濤のたふなり、芥の如き一片の舟の漂ふにも似たるかな、われいまだ功名榮華の奴とならず、いゝでか流離飄軻をうこつべけむ、いまだ意馬心猿のつかふところとあらず、いかでか失望に沈むべけむ、妻なきがゆゑに病床の嘆あく、子なきがゆゑに饑餓のうたへなきうず、いまだ國事に奔走せざれば、反覆賣節、ひとりおのが利達をもとむる友と交はりしことなし、雜騷をつくらず、失樂園を歌はず、はた下和が夜光の壁をいだかざるに、われはいかぢれゆく鬱憂に堪へざるや、飛鳥川世は常なきものと誰がいひそめし、あゝきのふは春風の裡に此世をたのしうたひしもの、けふは秋風の肅殺たるにおどろき、朝に愛の懷に温き夢をむさぼりしもの夕は酷薄の傷にさめ、先刻嬉々として笑にふけりしもの、いまだ愁傷の涙とめあへさふんとす、いたましいかな、いくたの人類かゝる魔のひそめる運命は濁流にうきつしづみつ、その手掌のうへに毬のごとく弄せられ、あるは起き、あるは倒れ、笑怒悲泣のくさぐさの劇となしつゝある中に空を走る時てふ車輪はいとも速く早晚冷かなる

死陰に送らんとするかりけり、あゝわれに無限の愛をもちて我をいつくしみ玉へる母ありき、姉ありき、友ありき、今やともになし、Gone-glimmering through the dream of things that were: 霧かと想へば霞にもあらず、霧かと思れば霧にもあらず茫々たる深夜の色は海をつゝみ、漁り火いつか消えて只半輪の寒月の靜かに蕭然たる瘦影と砂土に投ずるあるのみ、あゝわが相貌はいたぐやつれたりと都にあり友はいひき、げにわれは憂憤の腦と痛恨の胸とをもちて斷えず世の冷やかなる運命を怒りしなり、とはいへわが相貌はやつれたりと雖もなほ熱き涙は冷えざるかり、わが衰へたる孤影にも嵐と狂ふ赤き血しほは漲るなり、あゝ家に遊べるとき校堂に學べるときさては同窓れ友と語れるときわれは寧ろ輕快の質なりしにあらずや、語りて胸襟を開あざることさく、開きて高談放論四筵をおごろうさぬは稀なりし昔日のわれ、いまだ煩悶憂愁みづらぐ婦女子にあらざるを疑ふばかりあるはたしてか、よるぞや、あゝ我未だ善惡を知るの實をくらはず、ケラビムれ燭の劔かんぞかくわれを苦しむるや、惡魔にうつたへふれーヨブの善根なきに、あれにのぞみけむ試煉の悲痛なんぞわれをばかそひたる、生さあが來るべき未來の運命を明かにされさといふカッサンドラの嘆息なごのこりあくそなはりて、果斷にとぼしきハムレットが憂悶、あはれわれは蠟の如くとけむとす。

人生二十の春花より出で、花に入らず、われ未だ一聲の杜鵑を聞きしものとかくわれ未だ蝴蝶の夢をしらざるにひとり心は沈みて、あだし野の朝の露のみぞいたはるゝ、あゝ海よわれはなご今宵こゝにわれを誘ひ來りしぞ、あが鞆駟たるひきはわれをして空しく衾を擁しあつくるしき寢床

にいぬるを得ざしめき、あゝ海濤よわれは汝に對することに汝の偉大におどろき汝の趣味多きに歡喜せざるかし、汝よ希くはわれのまごひを解け、ある人は我を痴ありと嗤へり、されど憫む可きわれは遂にまごひを解くあたはず、宗教も哲學もいまだわれに安慰をあたへざるあり、さるにてもあよひ此の濱のけしきエレジャのそれにも似ずや、わが母はいづくにあるか。……  
をりしも磯馴松にひく風の音、波にむせびて鳴く海鳥の聲と共にいづくともなくあつかしき琴曲のひびききこゆ、恍惚として望めば銀波のさめく間、まがふべくもなき我が母きみは幽花四邊に咲きこぼれたるうるはき蓮臺れ上に坐したまへり、近寄りてみ名を呼びぬ、あなうれし、ほゝゑみておはするよ、あやうれしわが子とめし給ふよ、あさけこまれるみ手には、いはけなき弟をのいいだきたまひつゝ、うれしともうれし、あはれゝへり來ましゝの、例の事どもまたく承りあむ、おはしませぬほどは、おそろしきも凄しきもおぼえたりしまぼろしきへ、あうくいたのまれ侍りて、ゆふべほのぐらき頃、わざとまうで奉りつゝ、つれなき墓のまへにたゞずみ侍りしもいくそ度と知りたまはずや、さてもこの月ごろいゝさまにおはしましゝや、死出の山路いゝに越えさせたまひし、さてはかのみ國の上の位にはうまれ給ひしかことひ奉れば、たゞ恙なうてありやとのみのたまふ、うせ給ひしよりはたゞおげさくらし侍れば、よろづの事もかこたりがちにのみ過し侍りと聞ゆれば、なごさはある、あなうひなし、と少し氣色だちれたまふやう咲きにし花はやがて散るべし、まごやうなる望の月つひに缺くべし、何事もまゝならぬは世の習にて一筋になさず思ひて心つくし、事も、浮世の風に吹きちぢされ、たのしき望を繋ぎし事も、

むなしく消はてゝ、はかなき名残を止め、逢ふことあれば、別るゝこともあり、憂はいつも樂の裏をはなるゝことなく、よろこびあればかゝりみあり、ゝる世にはいたづらに悲哀憂愁のうちにつむとも益あり只心強く勇氣ふり起して、ひたそか、己が務を守り、憂苦をしのびつゝ進めよ、かの春は樂しみは風寒き冬の日を過してこそ得るゝなれ、いたく苦むはいたく樂せん爲にふそあれ我が魂はたえずかん身のかたへにありて心づけせん程にと、はふりれつる涙の面打をむけてしかど我身をいだきつゝいひきのし玉へば、たゞ、泣きになきてうかづくれみなり、どみるうち遽に大浪くるひ來て、み姿をうくさむとす、われ驚きてみ手を握りぬ、されどそは石の如く冷やゝありき。

ふと我にうへれば身は平らかなる磯岩の上にはらばひになりて横れり、あけぼのゝ色、東の空にほの白く匂ひて、はなれ小島の一もと松影もかすうと打煙りつ、水色の大空に明星のかげ一つ幽かなる光を残せり朝靄うすれゆくわだつみの上、つり舟の白帆影二つ三つ波にたゞよひてなつうしき欸乃の聲はてなき海にかよひつ、あゝ朝の海のしづけさよ、みだれがちなるわが思の何毛のゝ胸に入りけるにか跡うたもなく消ゆうせて磯にさめく朝じほのひびき樂しき歌の調を我がちいさき胸に叩くめり、空のあなたに棚びける横雲紫の色ふかく匂へり、日出でんとするにやあふむ、これよりわれ又厭世を語らず、あはれ、夢の中のみ聲はなほ目にのこれり。



## 向山の悟

柴波愚移

人は兼六を賞し我は向山を愛す、愛せらるゝ者必しも優れるに非ず、我は不具の子を持てる親れ愛をもて此の荒蕪寂莫なる向山を愛する也。詩を解する風流なき我も、此處に墳墓の間をさすひつゝグレーの哀詩を誦する時、まこと身に徹みて詩人の涙の哀さを覺り、此處に彼方遙に沖を眺むる時、ハイネのローレライに泣のざるを得ざるなり。

思へば早や二年前、友に誘はれて初めて此の岳上に登りし時は、月清く輝渡れる秋の夜ありき。丘上より眺れば河北瀉淡く長蛇の如く模糊の間に見え、淺野川近く銀沙の如く滌々の響あり。我は何故とも知らず涙々として流るゝ涙拭ひ兼ねたりき。友は泣きぬ、君見よ、何とも知らずうゝ悲しき此夜は景色こそ我が一生にさも似せれど。あゝ彼はサッポラの如く屈原の如く、愛情と正義の聖き心を持てりき、彼れはあるが爲め世と離れ人と遠よりしなり。我は樂天、彼は厭世、互に反對の主義と世界觀とを有したる也、然るも樂天といひ厭世といふ、何れも現世の欠点多きに飽きたらで、理想は國を求むる情に非ざらむ。我と彼と此点に於て一致せり、此点に於て互に友として全のりき。此の友情は今も昔も變はる事なければ、唯同下のさざるは空蟬の世や。彼が胸中深く印して消す可らざりし恨、癒え難き傷を我に訴へて泣きたりし事も。今は又見ぬ夢と化し終はんぬ。

我れ都にある頃、白金の里、村家の内に住みき、うくて薄命詩人透谷が此世を去りし跡親しく見て、いとし感慨に堪へ難のりしが、今正月三日、端り無くも深かう閉させる雪に迷ひて向山に至

りぬ。友の泣きにし跡も憤りてし跡も、皆白妙の衣もて覆れ居たり。かれ透谷の事、我友の事、胸に迫りて一種云ふ可らざる苦痛益々我を悩まし、白山嵐のいとし寒き風身も切られん許りに覺ゆるまゝに、頭は益々熱して火の如くあれり。

嗚呼友は嘗て戀にあき戀に憤り、遂に一大教訓を残してあへなくありぬ。薄命なる友よ、我は汝が情に厚くしてなほ世にそむきしは、實に婦女が貞操を信したるが故あるを知る。

我も一度は世の婦人の母君の如くおば君の如しと思ひたる事ありき。病ある毎に母君のいたはり慰め給ひし事思ひ出られ、大志望を抱ける我も遊子不遇の情いと止み難く、向の伯母君隣の姉様の事思ひては、唯々故郷戀ひしとのみ思ひぬ。されど是等の事今はなし、露許りもなし。

思起せば或る夏の末ありき、一日やくが如き中に其日の業を終へ、日西山に沈む頃、寓居を出て淺野川を渡り向山に登りぬ。冷しき風ソヨソと松の枝を鳴らせば、歸り遅れたる小雀二三羽パツト驚き立ちて塹に向うて去る。詩人ならぬ我も仙境にあるが如く、此の廣き宇宙の此の狭き地球の其又小さき此部分にも自然の美は現れたり、此の意味なき有様すらすでに美なり、測知り難き大なる宇宙を達觀すれば、無限の美と恵とは我等の心を満して餘りあり、此の自然と默契せる極度に於ては科學者も詩人も實に高尚壯嚴にして、コンコルドの聖がいひし見る人もカーライルが呼びし知る人もげに移して科學者にも名く可し。スペンサーが木蔭冷しきほとり、書を讀める夫人を見て、科學も文學も共に契合すと思ひし事理なり、おご思ひに沈める時、後の方にてさてもれ怪我は無のりしう、危き事ありきといふやさしき聲に驚されて、願れば四十許りの貴婦



人ど、二八許りの令嬢が清楚玉を欺く顔ばせ鶯の如き聲もて、同トく夕すゝみに來りし一人の紳士が石に躓き鼻緒切りたるをいたはるありけり。自づ絹の半巾を取出し打さき與へ、懇にいたはる心床しやと感トける折しも、一陣の微風は彼女の衣にたきしめられたる薫ばしき香風を我よ送りて恍惚醉へるが如くおしたり。其後數日を経て町に一人の姥の病みて助を乞ふに遇ひ、いと哀れを催されて、小使錢搜し與へけるが、偶々かの令嬢も此處に來りぬ。舊知にあふが如き心地せられ、わがやさしき君は如何ばうり哀ある此の姥を見て心傷むらんと思ひたりしに、むさき老婆かなど供ある者にさゝやきたるのみにて行過ぎぬ。我の不快云ふ許りなく、此時より婦女の心を疑ふに至りぬ。我は世に問はん、富める者、高貴ある者にはやさしく美しく、傷める者、貧乏き者には鬼たり、位高く名聞える者にのみ心を盡すを慈善博愛といふ可きや、卑しき者にのみ威を示すを男女同權と稱す可きか。

紅塵萬丈の裡にあるうら若き令嬢を見よ。玉の腕、まあるにて作りたらんが如き白き指には、寶石ちりばめられたる黄金れ指輪いこまばゆく、綾羅綿繡の装、眼もくぐむばかり也。我れ悲惨ある境に苦めたる、青き貌したる織女の、是等の衣を織るを見、死の坑、暗の郷より掘出と鑛夫の黄金を見て、如何なる殘忍無情の輩が是を求むるにやと疑ひいふありやとも、令嬢れ身につきては美はしめでたしとのみ感トぬ。彼等は魔物なり、苦と勞とを以て働きても猶糊口に苦しむ數萬の哀む可き者ある時、彼等は依然として世に愛せらるゝなり。不幸なる友よ、汝はかゝる動物の餌となりたるか悼ましいかな。

人は多く才媛といふ者の文に酔ふ。今數代後の歴史家をして此の御代を顧みしむれば、清女も紫女も多々ありき、文筆の媛、ミューズの女神は競ひて生れけりと譽めん、我亦しう思ふなり。されどなき友を思ふ時悚然として恐れざるを得ざる也。若き世の人よ、戀といふ者を書きし艶ある筆に迷さるな。マンテの戀もゲーテの愛も、其物語讀みては如何に美はしきと思ひ、シーザルもナポレオンも是故に身をあやまりぬと聞ては、如何に力ある者なるかを知らんと思ふ情切なるべし。されど此果あやまつて一ッ食はゞ永遠暗の國に落つ可きなり。マホメットのカーデヤを愛せし愛がエイシャへのそれに優りたりとて血氣にはやる青年が、六根の樂欲中たゞ厭離し難き此道と、いかで清く保ち得べき。見よ、女の化粧は婦德の一とは云へ、親を苦しめ兄弟を煩しても外容を飾る娘が、日頃孝といふ事教へられながら、老たる母に重き物持たし已れは空手で艶がしげに歩み、或は病める父に粗食せさせ已れは歌舞伎にくるひ廻るとも、人は飾らず心ばせ善き者を打棄て是を思ふが常ならずや。

まこと我は戀の我を見出し能はざるなり。ビートルスなかりせば、マンテの悲あかりし者を。快活あるワシントン、アーヴィングの眼中一點の涙常に潜みしを見れば誰か戀を美はしものとして評し去る事をせん。遠大の志望、有爲の才智を備へたる青年が人世を厭ひ鬱々として逝く者、千萬を以て數ふるを、男子の女々敷が故のみと嘲ふ勿れ。我が愛し戀ある女が確き確き約束を打破り、男子の面目を踏潰し、富と位と容采とに打靡き我を見さげあざ笑ひたる時、如何で狂せざるを得ん狂せざるは愛あきあり、嗚呼失戀の淵に沈める哀ある友よ、汝は身を殺して貴き教訓を吾人に

遺せり。戀無きにしかず。

思へば我れ十二歳の時父母の膝下を離れ、九年にして一度暖かき故郷に省し、今又二年を空しく他郷に過せり。家を出づる時、二度までも父母に誓ひてし言葉は偉大高傑の士とならん事なりき、世を益する者たらん事ありき。さるにても此れ確き心を弛め、不屈の精神を半途にして奪はんとする者は戀もありずや。友を殺したるもれば實に是れあり。

トルストイがクレーツィロク、ソナタの一人物をうりて、結婚は畢竟肉慾的望の結果のみといひし事、まことに適切な言といふ可し。色慾を除きて天下戀あるなし。戀なくば妻を娶る要なきあり。自個の醜を蔽はんが爲め、結婚は人生の常道なりといふを止めよ。清き血統へたとひ、學理上より見れば異論ありとはいへ、を遺すが唯一の目的とすれば、子を産みて妻死なば、又後妻をいゝる、要なる可きに、堂々たる倫理道德論者にして猶是を容して怪まず、人間の貞操は全く破られたり、是をしも可とせば、百の妻と千の妾に誇るとも決して誹議す可ざる也。嗚呼世は未だ吾人が原祖アシバの一屬より猿屬に至る迄受嗣ぎ來りし動物の色慾を脱却し能はざるの。

翻て思ふ、人類の貴き所は精神的たるにあり。然らば後妻を娶る事の不可ある天よりしるし。殊に獻身的事業に身を投ずる者には、婦妻は有害無益の動物あり。内助は功といへど、古より婦なくして大事業を成す能はざりし例一もあるなり。衣食の勞は雇婆にて可なり。慰諭者は少くとも古人を友とし未識の友を望む時、煩はしき妻女の要を認めざるなり。古へ印度の大聖は妻を棄て、人道の爲め其身を獻たり。後年俗僧の此宗祖の清き心を誤り、獨身と云ふ名のみ求めて却て

不義の獸行を犯し、は、パウロの戒も思ひ出されてあはれあり。愛と義との化身あるクリストすら、遂に一生無妻なりしは、眞の獻身者は妻帯し能はざるを示すにあらずや。

世の青年よ、己が心中一極微の分子だに、戀といふ者潜めるからば、斷然之を烈火の内に投ぜよ、是を悟るの時、世に戀になく痴者たえ、大志望は着々として遂げらるべし、吾人が涙も愛も公平に人類の上に蹴るべき也。

向山の春夏秋冬、いづれもめでたし、而もこの大ある教訓はどふしへに此の岳と共に我心より失せまじ、血と涙ある人は、寂寞なる向山に自然と默契し、宇宙を達觀し、洒々落々の氣を養へ豪氣不屈の精神を得よ。

岳を降り家に飯りて、文なき我は、情の溢るくまに、かくる文をば草む。

## 漢文

壽雪岳太田先生七十序

村上 函 峯

壽富徳三者。人常患<sub>二</sub>子不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>兼焉。有<sub>下</sub>厚<sub>二</sub>于壽<sub>一</sub>而薄<sub>二</sub>于富與徳<sub>一</sub>。有<sub>下</sub>厚<sub>二</sub>于富<sub>一</sub>而薄<sub>二</sub>于壽與徳<sub>一</sub>。有<sub>下</sub>厚<sub>二</sub>于徳<sub>一</sub>而薄<sub>二</sub>于富與壽<sub>一</sub>。能兼<sub>二</sub>此三者<sub>一</sub>。我於<sub>二</sub>雪岳太田先生<sub>一</sub>見<sub>レ</sub>之矣。先生加賀人也。家世業<sub>レ</sub>醫。弱冠游<sub>二</sub>大坂<sub>一</sub>。學<sub>二</sub>醫緒方洪庵<sub>一</sub>。其門下多<sub>二</sub>才俊<sub>一</sub>。與<sub>二</sub>村田藏六<sub>一</sub>。橋本佐内。大島圭介<sub>一</sub>交最密。日夕討論。磨勵切劘。業大進。學爲<sub>二</sub>塾監<sub>一</sub>。居數年。會米使來求<sub>二</sub>盟約<sub>一</sub>。海內囂然。先生驟然

仗劍赴江戶。從手塚律藏。專講和蘭兵書。與四方名士。上下議論。意氣益壯。既而得病歸。後將復游。府君不聽。於是下帷以濟生自任。求治者屢屐盈門。聲譽大著。明治元年。本藩擢爲侍醫。尋爲金澤醫學館教師。中興微藩。仍掌館事。如故。未幾爲病院主務。兼醫學校長。十二年新起土木。大其規模。名曰金澤病院。世人莫不稱其勞者。前後爲石川縣醫會長。大日本私立衛生會支部副長。關縣以醫名家者。陸續輩出。蓋先生力居多焉。二十六年。官賜藍綬褒章。表彰其善行。先生今及古稀。研精讀書。挑燈俯案。往往至夜分。時或嘯詠湖山。以侶漁樵。優游忘歸。其得壽亦非偶然也。數十年間。其術盛行。乞治者麇至。漸入歲多。邸宅宏敞。家道益裕。無他嗜好。唯以古書畫爲娛老之物。其得富亦非偶然也。性好施與。赴急濟患。甚於已私。寒士窮氓致謝。皆辭不受。推仁術於四方。其得德亦非偶然也。余謂先生軀幹短小。如不勝衣。而其神識之凝定。氣力之完實。則有非常人所及者。豈非所以能兼此三者乎。設使先生終始在大坂及江戶。與四方豪傑相馳逐。不知孰先孰後。而先生則重府君命。歸隱故山。以醫爲業。終始如一。反全其道。能兼壽富德三者。則其得失果何如也。先生固慷慨憂世。審內外之形勢。又好漢書。善文詩。而世或不之知也。蓋以善醫掩之耳。今茲辛丑。先生適躋七秩。門人故舊。謀開筵壽先生。余嘗病受治。爾來辱交。乃述所見聞。以爲之序。若夫神仙說龜鶴之辭。非所以壽先生。而先生亦非所樂聞也。

## 登伊振嶠記

掀天童子

大野之邑。群山環拱。而荒島山釋氏嶽銀鞍峰。爲其雄。但去邑頗遠。山路絕險。故登遊者不多也。而獨伊振嶠。距邑三五里。嵯峨聳翠。爲最可賞。一日余携冠童五六登陟焉。先度清瀧橋。過洞雲寺。沿砂山麓。南行西折。絕田間小徑。至伊振邨。望桓表而上。有一小祠。是爲祭山靈之處也。藉荆而憩。喫咽遠望。龍水鷄水。綿聯如帶。冢原野。蒼々茫々。無數邨落。基置其間。而龜山舊趾。屹立焉。市廛千戶。炊煙裊々。寓目少焉。從山脊樵路而進。漸登漸險。巉巖怪石。累々磊砢。有壁立千仞者。俗呼爲魔壁。深澗峭峻者。爲尼窠。其側。溪水潺々。而榛莽捲翳。不知其處。是卽未瀧也。自大野望之。水映日光。而得未牌見之。故名焉。既至最高頂。有神廟。繼體帝母曰振媛。祀以爲山神。邑人至今稱其神靈。山名伊振嶠者。亦因其名。伊是發語也。拜畢而開行厨。喫畢復立遠望。連山如蟻垤。又似波濤。三州津。蒼茫接雲。華城。纔見白壁。一乘城墟。竹生雞嶽。亦可認得。越前一州之地。宛在眉睫之間。不啻如前者之所望止于一方也。而日既傾。於是前路而下。歸而爲之記。

## 擬源廷尉與江因州書

徵士學人

九郎判官源義經再拜言因州大守江君足下。昔者明王之治天下也。登用賢良。放逐姦邪。有功信賞。有罪必罰。故忠臣有勸。而讒人遠迹。政教隆於上。黎庶安於下。若夫反其道者。綱紀頹弛。民無所措手足。治亂興廢之迹。昭乎可鑒矣。往者義經奉王命。代伯兄西征。以不肖之身。當方面之任。夙夜孜孜。但恐不勝其任也。先伐信人於京畿。戮王所愾。尋攻平氏於西海。報父之讐。雨沐風櫛。

不敢辭勢。或驅馬於險崖。入虎狼之棲。或漂船於奔浪。探鼉龍之窟。身犯矢石。率先士卒。斬將奪旗。未曾挫衄。遂斃元惡。而殲其餘黨。是雖賴伯兄之威武。不亦小弟之微功乎。今自檻送元惡。歸來幕府。愚心竊謂。伯兄必使人郊迎。直延燕寢。握手慰勞。相與賀雪先考之辱。歡加於往日。豈料設關屯兵。不許入府。是何也。甚訝焉。即呈盟書。以陳無異心。反覆數回。而猶不見允。意者得無非有譏諷之人離間我兄弟乎。吁。嗟。譏人之亂國。自古而然。子胥陷楚敗越。使吳成霸業。而不能免伯嚭之譖。李牧逐胡敗秦。使趙國復振。而不能免郭開之謗。二子之盡忠竭誠。而受此冤者。孰不爲酸鼻哉。而吳趙亦隨滅焉。不亦悲乎。樂羊取中山而還。魏文示之。以傍書一篋。甘茂伐宣陽而未克。秦武不敢渝息壤之盟。是二子之所以全功。而魏秦之所以強盛也。而今也左右之不明。欲棄魏秦之所以盛。而效吳趙之所以滅。爲人主者。盍熟察諸。媚疾賢良。而崇信姦邪。有功者不賞。反播其罪。有罪者不罰。還以爲忠。謂之背先王之大典者。夫輔翼伯兄。草創霸業。永爲藩屏。可以禦侮者。舍予夫誰也。而今聽細人之言。以疏骨肉之親。義經之不幸。固亡論已。豈是國家之長策哉。若孤立無助。已成之業。恐販烏有。義經甚憾焉。今義經垂蔽。欲面陳眷々之意。不可得也。先考既沒。不可復起。孰爲義經燭冤伸屈耶。足下學該古今。明興廢之數。能使伯兄喜。能使伯兄怒。伏請足下昭察義經精誠。乘間一言訟之。幸被恩恕。是起死肉骨也。何賜如之。心之憂矣。愚焉如擣。臨楮惘然。滅裂無次。吐露滿腔憤懣。百不盡一。統乞昭亮。元曆二年六月五日義經再拜。

## 漫錄

嶺

南

白雪積庭。奇觀不可言也。某命童子曰。雪積幾許。汝往度之來。童子唯々而出。久之不歸。不知所之。居半日許。乃反命曰。雪深尺餘耳。若夫其廣。充山滿野。竟不得度之也。

童僕盜緡錢。而恐人知之。乃掘池邊而埋之。且祝曰。若人發之。乞化爲蛙。有一人在後聞之。待其去攘之。代此以蛙。斯須童僕復來發之。則見蛙。遽然曰。汝何誤解之甚。於他人則可。於我則不可。叱々復爲錢。蛙飛沒池。童僕亦追而入池。見科丰子數十。嘆曰。緡已斷矣。那得收之。噫。樂翁公。嘗田獲狸。以爲羹。賜之近臣。臭甚不可食。且嘔且吐。或漱水。或酹酒。橡尾某。獨不哇。蹙眉咽之。且欲以誇衆。吞其肉而飲其液。強數椀。公曰。羹美乎。某鼓舌而對曰甚美。公曰。然則不吞而徐喫之。應曰。唯。其貌類食旨之狀。而吞之如初。公莞爾而笑曰。是以五十步笑百步者耳。

## 新體詩

我が春

大内月仙

闇黒して胸の閉ぢたるに、

いたき要求よ、弱き子が、

軀さびたるこの頃を、

あつゝ血潮の若やぎは。

譬は斧に木を割きて、

枯れたる幹をこゝろむの、

緑よ、紅よ、茂りには、

足ふは、花や葉の生命。

尤<sup>こ</sup>むる勿れ、下萌の、  
野邊には雪の薄くとも、  
我れ悶<sup>も</sup>の身、雲を見て、  
待つは甲斐なき春の色。

世に滿つ聲に耳くせば、  
曆<sup>さ</sup>をかへて屠蘇酌みて、  
うくて環<sup>たまき</sup>の年れ輪は、  
轍<sup>わだち</sup>あらたに輾<sup>き</sup>るころ。

旭照りそふ海山れ、  
光も榮<sup>は</sup>えもよそにして、  
時の變らぬ粧に、  
うふ、思のあからでや。

月の十二は短のきに、

逢ひし昔ぞ怨めしさ。

「さバ汝<sup>あれきつち</sup>霸<sup>は</sup>なしとふる」

問ふべき口に袖あて、  
うへり見よ、我が妹の、  
二人あどあき頬の色を、

戀<sup>こ</sup>とて知れぬ稚な氣の、  
手鞠に糸れもつれなく、  
嬉々とし笑みのこぼれては、  
小さきのとけき家の庭。

そは光明のほのみえの、  
あらトの思ひ遠のけて、  
うらさ孟卿み見ば、

消<sup>け</sup>たむすがもあらずして、  
頭<sup>かづ</sup>を刻む昔を、  
繰り返し、はた返り見て。

男<sup>を</sup>の子二十歳の骨も折れ、  
希望<sup>のぞみ</sup>も末に沈みけむ、  
あゝに腕<sup>かひ</sup>をいたはりて、  
今朝のみ空に恐れあり。

み親のうたへかゝあへば、  
齡<sup>とし</sup>を指につれなくも、  
\*  
イドナが愛の要なきに、  
林檎<sup>りんご</sup>そい何手に觸れど。

どかくして吸ふ智の泉、  
いまは車<sup>くるま</sup>のがくして、  
なまト \*  
フレヤが鈴の眼に、

雲<sup>しほ</sup>時何にか酔ふべきか、

ゑふや酔はすや、濁<sup>だみ</sup>聲<sup>こゑ</sup>れ、  
唇<sup>くち</sup>衝<sup>つ</sup>くよ、

『神の力、

遂<sup>つい</sup>に足らじか、

一と年は、

過ぎけり、

闇<sup>やみ</sup>は、

尙ほ残りけり』。

\*一たびたうべては、人<sup>ひと</sup>はに老いじの林檎、

イドナが神の御手にあり

\*フレヤこのたまはするは愛の姫神、

瞳<sup>ひとみ</sup>の色をあびて人戀を知る

興至神旺錄

樂しとも憂しともわうぬ世の中を何に喜び何に憂む  
後の世は牛に生れて草青く桃咲く野邊にうまいしてまじ  
後の世は風に生れて人の世は罪とふ罪を吹き拂ひてむ  
後れ世は大鷲となりてことごとくに世の實つかみ海に抛たむ  
西伯利亞の野邊に死なすて田茂木野の雪に埋みし武士あはれ  
みどせ経バ赤子も三つにゐるちふをいうに暮し我身あるぞも  
君と我二人をおきて誰かはと誓ひし事も昔なりけり  
名と利とに心どめずは世の中は渡るにやそき物と知りつゝ  
石車坂れ一のぼる母の背に手をうち囁す稚兒あはれ  
くだちゆく身をも厭はしきなりながら和歌三神歌よませ給へ

茨木君を送る

雲居あす遠き國邊へ往くや君國のためとて勇みくして  
敷島は大和男子はかゝれとて外つ國人を驚かせ君  
よしやよし衣の襟は低くとも心はいこゝ高く清うれ  
音に聞くテームス河に嘯かば思ひも出でよ犀川の岸

八波其月

紫

八十八

影

ロンドンに霧と煙と多しとの朝夕にゐるせよ君  
冬夜讀書

ペーシ線る風すく寒くモスコの焼けし夕はのくやありけん  
アルプスを越えし猛者こそ慕はるれ雪ふる夜半に獨り起きぬて  
新年梅

君が代は千代田の園の梅かれや年たつ毎に咲きまさりつゝ  
冬ごもり春さり來れば大君の千代を契りて咲くやこれ花

俳句

雪と雪車

浮

葉

炭納屋に狸ねてゐる深雪うか  
ふり落す羽織の雪や椽のはな  
積雪や夜學はてたる鐘がある  
西をひく地藏菩薩や土堤の雪  
薪賣つて塩つみ歸る荷雪車あな  
雪車よのつて温泉にある村へ這入り鳧  
空雪車を引て歸るやふところ手

文苑



歸り来る雪車をまぢけり麓茶屋  
日は斜雪車のつゝくや松木立

雜報

獨逸詩文會を迎ふ

獨逸詩文會起る、我徒趣味教育の點あて大ま  
其の興起を歓迎す。一週一時間課外に講習元よ  
り充分に利益を望む能はざるも、其の冥々の裡  
に師資する所ある信じて疑はず。由來我校既に

國語會あり藤井先生の精緻ある徳川時代文學史

其の徴に入り、漢文會あり宮川、村上兩先生の支  
那文學史及び易經講義あり以て好學は徒に資せ  
らるゝ大、而して今又斯會起る固に慶して賀せ  
ざる可らざるあり。北歐獨逸深林のあふり鬱然  
として光彩ある幽韻は是より中俣、山田兩先生  
の深遠ある學識を待ちて、燦然として見るべき

ものあふん、我徒至囑に堪へざるなり。寄語す、  
滿校好學の青衿、卿等頃刻のタイムは詩聖文豪  
れ玉什を聞くを得ん、北歐剛快の調、沈深の響  
は卿等の繡腸に多大の裨益を賦與するを期して  
待つべし、希くは之を力のよ。

音樂會を迎ふ

溪水潺湲として無絃の琴々鳴りし、松籟彼の丘  
に微妙の樂を奏す。固に音樂が人世趣味の調和  
に資する事今更に喋々を要せざるなり。我校の  
有志相謀りて爰に音樂會成り當師範學校教師な  
る新清次郎氏一週一時間其の示教を快諾せらる  
剛快男兒由來此の雅懷ある可らず。文科の人

來るべく、法科の人來るべし、況んや二部三部  
の男兒をや。徽絃進る所、高山流水あり、大絃  
小絃合し彈ずる時、月明かにして銀沙灘聲の韻  
あらんか。落花樓臺、楓葉古城、以て哀婉沈痛  
の美を恣にし、將た又時々雄大落々の音を賞し  
ふば冥々裡、無限の感懷を寓するを得べし。今  
や音樂會新に起りて校の一角悠揚たる樂聲を聽  
く、我徒大に之を喜ぶ。

萬松風起鶴驚秋、半輪月落雁忽過、

洋々伯牙千年音、誰哉聽得感尤深、

丈夫兒の本領

In the world's broad field of battle,

In the brave bivouac of life,

Be not like dumb, driven cattle !

Be a hero in the strife !

人世の露營に於て牛豚の如く虐遇せらるゝ事の  
實に限りなき憾ならずや、西國の詩人が歌ひし

遺韻固に千秋れ箴、吾等此の詩句を誦する毎に  
無量の感みなぎり來りて禁ず可らざる者あり。  
鬚眉男兒、高歌長吟して郷を出で十里の家山錦  
衣まことに期待して此の學に就く。青山至る所  
蒼々、白水所として冽々、天下の山や水や我等  
を迎へて餘りあり。何すれど彼の蒼々千仞の嶽  
に振衣浩歌せざる、何すれど彼の水に千里長嘯  
の慨あきの甚しき、我徒現代學風に慄焉たりざ  
るあきよあらざるも、學徒の意氣銷沈朽木遂に  
鑿すべからざるに至りて眞に長大息なき能はざ  
る者なり。將軍馬を驅りて陣頭に立つ英風颯爽

已に敵軍を呑むの慨あり、勇士戰塵に馳驅す千  
秋豈に背を敵にするに恥辱に忍びんや。寧ろ玉  
碎骨を沙岡に暴すも焉んぞ彼の贖々者流を學ぶ  
べき、げにや男兒の本領眞にブライドの極みあ  
り。何事ぞ其の本領を忘却し其のブライドを棄  
却し趨りて彼の女兒脂粉の體を學ぶ、鬚眉丈夫

兒の價值果して何處にか求むべき潜然として涙なき能はず。嗚呼元氣消耗し意氣銷沈す何の策か是れが挽回を企圖すべき、黙々驅り役せらるる牛豚」あゝ爾を如何にせん。吾等固に學徒の通常人と差異あるを認む、修養時代の蓄積は猥りに其勦を逸するを許さず、孜孜として是れ研磨の境にあるべきを知る。然りと雖も修養必ず木偶を學ぶものにあらず研鑽豈に枯灰の謂ありんや、終世碌々として牛豚に倣はんとする者なぐばいざ知らず、次代社會の後繼を以て自ら任ずるもの修養し蓄積し而して研磨し以て其の材たるを期す、鬱勃たる潛勢力は常に熾々たりいゝで枯灰の冷を學ぶ耐へんや。今の青年學徒の最大多數が滔々として枯木先生たるに至りては國家將來計算或は慄然たるなきを保せず、思ふて是に至る我徒筆を投じて天と仰ぎ嘆息せざるを得ざるあり。あゝ學校生活はヒーローなし、

教場のヒーローあし、六百の丈夫兒悉く牛豚を甘んずるか、晩天の紅を以て明日の晴を卜するを得べくんば六百の兒の將來知るべきのみ。血を流し涙を流し、飯を食ひ肉を食ふの記憶機とは眞に是れ何等好當の語ぞ、記憶機械尙ほ可あり甚しきに至りては腐肉の一塊團徒らに教場の一席を充たきあり、茫乎たり黙乎たり、而して懼々焉として餓狼の影に驚く羊群の如し。

焉んぞ蹴起せざる、長風吹き、波影走る、衣を千仞の丘に振ひ、足を萬里の波に洗ふ、丈夫兒這般の意氣あつる可らず。學校生活のヒーローたれ、少くとも教場のヒーローたれ、グーの音も出す能はず戰々として卅六計の上策を講ずるは寧ろ男兒の本懷あらんや、醜實に彼れ女兒すらも耻づ。戰へ!! 大に學界の戦場に戰へ以て名譽ある功績を擧げよ、彼れ小敵を侮り大敵に慄ふが如きは決して勇士の爲す所にあらず。將軍

白馬に鞭ちて敵陣を突く胸裡の成算、歴々として既に存する者あるなり、英氣益々加はり精彩愈々堂々、縦横に驅けり以て蹂躪せずんば、止まず。教場は神聖あり敢て之を以て修羅の巷に比する者にあらずと雖も、亦丈夫兒の意氣斗牛を衝くものある可らず、丈夫兒の本懷唯此の奮闘あるのみ。奮闘、爾に謝す、爾なくんば地上亦生命あり。ブライド爾に贈す、爾希くは六百の青衫に幸なれ、爾が存する所には光榮あり名譽あり、丈夫兒の本領唯是れのみ。

### 禁酒令に寄す、

禁酒令の我校に布かれてより爰に一年有半、滔々たる額波の裡、清流一路の觀、固に快心に値すべきものあり。

禁酒令、我徒まことに爾が殊勝さに喜び、將た又其の猛然前向き勢を愛す。爾が一度颯々の聲をあげしより、幾度の公會、幾回の集合、復た

杯盤狼藉の醜を演出するを許さざりき。生れて未だ久しうとせず、既に幾多の犠牲は爾が祭壇に血祭せられ、一度び呼號して立てば敢然たる爾が威力實に抗す可らざるものありき。爾が光榮又大なる哉。

敢て問ふ、禁酒令爾が斬奸の利劔は抑も鋭を誇る幾何あるか。光鋌よく幾何を照らすの紫電ある。昔は正宗の寶刀ありき、暗中よく缺を出で、彼の賊を追撃せしと。又曰ふ痴漢之を揮て寶刀爲に鳴咽するもと數夜なりと。禁酒令爾が光鋌はよく暗中躍動の魍魎を誅しき。而して紫電一過よく怪醜陰を照らしき。魍魎魍魎跋扈し跳躍する時、如何に爾の職の壯且つ快あるよ、我徒ひとかに爾の英姿颯爽たるを歎す。

重ねて問ふ、禁酒令爾が光鋌爾が銳利果して幾何。顧みて忸怩たゞざるものあくんば幸甚矣、希くは我徒をして舌に衣せざる事を許せ、希く

は筆を曲ぐるは罪を敢てせしめざれ、一片歌々の志、黙して而して止むべきにあらざるを覺ゆればあり。

我徒熟爾が鋭と利とを想ふごとくに、衷心私に解に苦むものあり。爾嘗て鉄を斬りて臺として響きありき、而して爾後珮玉の響をし、頑鉄割き來りて鋒鏃或は鈍りしにあらざるや非の、何んぞ前には莫邪の利ありて後には鈍なるの甚しき、我徒疑なくんばあらざるなり。駿馬痴漢を駄て走り、寶刀空しく匣底に塵に泣く固に是れ千秋の恨事ありと雖も爾已に其れ人を得て明道の君子爾を把るあり。いかも鋭快舊の如くなくざるもの爾を把るの士の罪にあらず、將た其れ術の拙なるにあらず、罪は爾が鋭鈍に歸す。爾克く辨ずるの勇あるか。

狗肉を賣りて羊頭を懸くるものあり、人此を賤む。肉羊ありしも遂に盡きたるに因るう然らず

んば徒に羊頭を懸けて而して狗肉を賣るの騙詐を敢てするの醜漢か。そも何れに因由するも天下之と齒ひするを耻づ。禁酒令爾また此の醜に

ならはんとを誠に耻づべきの至りなざるや。爾の嘗て鋭利鉄を斷つ快ありしは羊肉未だ盡きざりし時と孰れぞ、而して後又嚮の鋭なく徒らに鈍名を江湖に暴すに至りしは羊頭狗肉を賣ると何れぞ。若し夫れ其の質を鉛にして其の光を金鉄にし鬼面人を威すの愚を敢てせしに至りては醜の極、陋の極始めより羊肉なくして而して羊頭を懸くるもの騙詐或は愚人を欺くべし焉んぞ天下の人を瞞するを得ん、其の罪實に避くべからざるなり。然れども知る、爾が羊頭を懸けて狗肉を賣らんとするの愚を學ばざる我徒固に之を諒す、而も爾が鈍今や恰も其の醜且つ陋なるに異なるなきに至りては我徒如何に是を蔽はんとするも得ず、起ちて爾が鼎の輕重を問はざる可

くざるあり。物其の實に添はざる人之を猱猴の冠するに比す、猱猴冠するの滑稽果して爾が忍んでかす所なるか。昔者楚人ありて笑を千歳の後にのこす、寧ろ若かず赤裸々天真さらけ出して人れ一瞥を得んには。

禁酒令爾に寄す、爾我徒の忠言を聴くの雅懷を有するう、我徒の愛せし爾が鋭を復するの勇あるう何んぞ始めは脱兎の如くにして後には處女に類するの甚しき。一道の清流爾に須つ所實に多々、綴練數百槌中原再び廓清の任を盡せ。

### 寧ろ愧死すべし。

今筆をこりて醜漢を屠らんとす。希くは我徒を以て漫に激越の筆を弄ぶものとなす勿れ、事固に忍びざるものあればあり。

今の時、筆を載りて醜を斬らんとぞ、果して血を見るを得べきや否や。風紀頽廢、道義滅裂、の聲は四方に響き、而して學生の墮落てふ語の

如何に激甚なる潮流を以て寄せ來ることよ。吾等思ひらく、學生墮落の叫び四面楚歌のそれの如しと雖も、尙ほ未だ較り來りて清流は近うらんかと不幸にも吾等此の希望遂に把持せんにはあまりに迂なりき。紛々として耳朵を打ち來るもの悉く醜、悉く穢、糞汁鼻を衝き、怪臭沸々として眼爲に眩き五体慄然、小膽吾徒の如き寧ろ驚倒せざるを怪む者なり。今筆をこりて醜漢を屠らんとす、今の時果して血を見るを得べき

う。聞くからく、馬耳は東風に閑如たりと、亦聞く蛙面遂に水撃その驚くを見ずと。果して然らば彼の醜の最も醜なるもの而皮鉄千枚、之に槌し之に針するも、些の功りある、鉄愈々固く頑益々牢く、槌却りて弾け、金針之が爲に碎けん、此の筆千金よりも貴く、醜穢彼の如きを屠り寧ろ其の濁血を濯ぐに忍びんや、され彼等醜輩の爲に或は北辰章校の神聖を穢すべきを得

んやを慮り、踟躕百回、毫に望んで趨起するよし果して幾度、羞極りなると雖も希くば其の一端を擧げなんか。磊塊吐き出さずんば胸裡の鬱塞、腹を裂のんとす。

吾徒頃日、自炊用の爲め米を近隣の米商に得んとし、端りなく愕然たざるを得ざるものありき。嗚呼我徒同人―否同校學生中、米を求めて而して價を拂はざるものあり、醜の甚きものなざるや。我徒通帳を以て月末拂の約を結ばんとするに頑固たる彼は肯ぜず。指を折りて之を説き、學生の信用すべからざるを云ふ、而して其の學生の高等教育を受くるものなりと云ふに至りて實に驚かざるを得ざりき。始め學生は現價からずば賣る能はずと斷ぜしを聞き、覺えず怒氣心頭に燃え、我徒の神聖を輕んずるの甚しきを怒り大に之が爲に辯せんと欲せしも、其は實例を聞き其の不徳漢を耳にするに及んで

は、撫然として長歎息せざるを得ざりき。歸りて之を主婦に談ず、主婦亦眉を蹙し而して笑ひ尙且此の如き輩の多々なるを辨し、再び其の實例を引き來りて破廉耻漢を罵る切あり。嗚呼學徒の無道何ぞ一は斯の如き、往年天下の學生を以て任せし意氣は今の我徒の中遂に求むべからざるか。小賈を欺き、可憐の下宿主婦を泣のしめ、恬として心に關せざるもの、如き、豈眞に惡む可らずや。

事或は小なりと駁するものあらん、然れども考一考せよ、此の裡多大の罪惡を藏するを。商賈、或は主婦に拂ふべきもの果して何處に消費せられし、多少の黃白それ机邊を飾るのブツクとなりしか、將た筆紙の料に變せし、此般の醜漢何んぞ机邊の趣味を解すべき。止むなくんば淫靡醜猥の駄小説か美人傳か、遊仙囁か、嗚呼疑かきを得ざるなり。

昔は馬稷街亭に軍律を錯する、軍陣の事固より知る可らずと雖も、涕淚三揮、遂に陣頭馬稷を斬りし孔明の嚴且つ肅よく三軍を帥ゐて誤らざるものありき。既に然り況んや醜漢彼等の如き斬らずんばある可らず、屠らずんばある可らず。彼等の如き醜且つ穢あるものを屠らずんば、何處にか學生の神聖を維持すべき。理を談し、學を講じ、高等教育を受けんとする我徒は、斷つて斯ある醜を屠りて廓清の劔を揮はざる可らず然らずんば學生のノーブルを如何にせん、我徒のブラウドを如何にせん。哀れ朝に校に登りて書を読み徳を磨くれ徒は、却て市井無賴は俗漢と同視せらるべきか、惜い哉。

我徒は生殺與奪の權を與へ、我徒に斬魔の劔を贈れよ、希くは奸を發き惡を斷し、陣頭怪血漲り穢屍堆く以て妖霧を拂はかん。人世不公平あるもの實に多矣。大醜巨怪跳躍して而も小穢遂

に陣頭の犠牲とあり、大醜却て白日に横行濶歩を、寧ろ小穢犧牲として祭られしもの憐むべきを感ずるあり。

醜漢爾に問ふ。爾等の罪惡は豈營に商賈を踏み倒せしのみあらんや、檀本は二葉より芳ばしとは爾等に充つるの語からずと雖も、事既に之に至る、必らずや嫩葉より醜あるもれあらん。恐らくは醜の連鎖とは爾等の謂あらん、友を賣るものあり、人を欺きて得たりとせる輩あり、不義を行ひて鼻うごめくものあり、父兄を騙して嬉々たる徒あり、擧げて數ふれば僕と替ふるも能はず。

醜漢爾を屠らんとす。爾をよどに男しく首をのべて誅をまつる意氣あるの、爾をよどに醜を悔いなば、奮然として前非を懺ぢ且つ再び爲さざるを誓へよ、乃ち清流に唼喝するに庶幾らん。然らずんば、斬魔斬醜の劔光は爾が頭上に

閃ろん、爾が罪惡、人知らずとあすの、笑殺すべきうな、憐殺せしむるかな。

醜漢我徒將に爾等を屠んとす、劒光遂に辭すべうらず、必ず爾等れ怪血を流さん、よし我徒れ自ら手を下すを敢てせずとも、爾等常に劒光を夢みるあふん。爾等懺悔の徳を知らず、亦誅をまつの良心なく止むなくば一あり。爾醜漢に教ふ曰く寧ろ愧死すべし。

### 乞 丐 兒

我徒を以て漫に罵詈を事とするもれと誤解する勿れ、言或は疎暴に陷るの嫌なきにあふざるも胸裡の鬱結遂に腹ふくるゝわざるを如何にせん。我徒れ筆もと此等の醜穢に汚がすを耻づ、而して敢て之をを寧ろ慨歎の至りからずや。忌憚なく云はしめば我等の神聖ある無聲堂はげにや累々たる乞丐兒を以て満たさるゝあり。希くは我徒の言に聴け。

人あり若し無聲堂を訪はゞ寒氣膚を刺すにも拘らず、健兒垂百柔道に擊劒に龍驤虎闘、劒聲振撼の壯觀を見ん。思へらく凛冽たる寒三十日此般の雄懷を恣にす、剛健真に羨むに堪へたり、此の裡武士道の粹たい見るべし。嗚呼一種の蛆虫は克く鋼鐵を蝕す、若し堅使夫れ鋼鐵を嚙むの頑強賞すべくんば我徒の所謂乞丐兒亦一顧の價を有せん、我徒の乞丐兒とは實にメダル乞丐兒是れなり

寒三十日皆勤の健兒を彰はすにメダルを贈るの制あるより無聲堂裡常に此の蛆虫あり。神聖ある無聲堂を汚す幾何、而して眞個斯道に勵精する健兒に賞與するも幾何。渠等乞丐兒は皆勤せざるあり而して出勤簿は其れ姓名を印す。四五日に一度渠等暫く竹刀を握り稽古若を穿つ、而して渠等の姓名は雲煙の如く帳簿に載せらる。怪む可し指點五十而して七十の姓名は帳にあ

り。若し夫れ遂に道場一度の出勤なきものにし

辭に曰く、

て簿面連日記名あるに至りては何等れ怪事や。我徒は渠等乞丐兒の醜行を惡むと同時に、渠等をして跳梁此に至るゝめ堂の神聖を汚して恬然耻るべき當局者の責を問はずんばあらず。歎すべきかふ神聖ある道場は斯の醜漢の爲めに汚され蹂躪れて腐氣紛々鼻を衝く。我徒の筆此に至りて重き千斤遂に言ふ所を知らず、擲筆三歎、喝。

### 茨木先生送別會、

二月八日午後二時、兼六公園内成巽閣に於て茨木先生の送別の會を張れり、本校職員及び醫學専門校の諸職員諸氏を始め本校生徒の會するもの間に満ち、流石舊藩公の昔ゆかしき大廣間も錐を立つるの餘地なかりき。席定るや當日發起人の一人ある杉森先生の開會の辭あり本間先生次で本校職員總代として送辭を朗讀せらる其の

第四高等學校教授茨木清次郎君、往年大學

ニ於テ英文科ヲ卒業セラル、ヤ登科優等ニシテ御賜ヲ拜受シ籍々世人ニ喧傳セラル、爾後敎鐸ヲ本校ニ執ラレ學生ヲ訓導シ諄々懇々能ク力ヲ職務ニ盡クセリ、今茲二月官命ヲ奉シテ將ニ英國ニ趣キ其學ヲ所ヲ究メントス本校職員學生相會シ祖道ヲ成巽閣ニ設ク嗚呼君ノ此行ヤ榮ト云フベシ、雷ニ君ノ榮ノミナラズ亦本校ノ榮ナリ、余輩豈一言ナカル可ケンヤ、昔人云ハズヤ萬卷ノ書ヲ讀ミ萬里ノ路ヲ行カザレバ通人ト稱セズト、君資性溫厚博ク英文ヲ修メ實アル所名モ亦隨フ而シテ自ラ視ル歌然孜々トシテ電勉ス、今又海外萬里ノ行ヲナス所謂通人其人ナラズヤ、方今政府人材ヲ撰ミ英國ニ獨佛ニ留學セシメ彼ノ文物技藝ヲ取り我ノ開



明ニ資セントス蓋シ國家ノ隆盛ハ唯ニ兵馬ノ強盛ト物産ノ繁茂トニ賴ラズ學藝ノ善良ナルニ賴ラザル可ラズ特ニ英文學ハ學門界ハ勿論實際社會ノ關係ニ於ケルモ太ダ廣ク之ガ發達ヲ要スルハ最モ急務ナリ君ノ此行モ亦重カラズヤ、然レモ天性ノ美ナル君ノ如ク春秋ニ富ム君ノ如ク素養ノ深キ君ノ如ク學ヲ好ムノ篤キ君ノ如クニシテ而シテ人文ノ淵藪ナル英國ニ游ビ碩學ヲ師トシ俊才ヲ友トシ膏腴ヲ咀シ精華ヲ嚼シ歲月ノ久シキヲ經バ其造詣スル所寧ンゾ量ル可ケンヤ、又彼ノ諸學校ニ親、教授ノ良法ヲ取リ歸朝ノ後之ヲ本校ニ施サル、ハ固ヨリ其所ナラン、古人曰ク士別レテ三日當ニ刮目ス可シト、二年ノ別豈長シト謂ハンヤ聊カ茲ニ君ノ萬里ノ行ヲ驢シ今ヨリ亦君ノ萬里ノ歸來ヲ迎ヘ祝センコトヲ俟ツ

明治三十五年二月八日 職員總代本間好茂 本間先生の送辭了るや一部生總代として安達欽靖君一場の送別演説をなせり、其旨意とせる所は先づ先生在校中其訓育の篤ありしを謝し、萬里鵬程に上らるゝ壯舉を祝し併せて希望二則を述べて現代學風の刷新を屬し萬雷聲裡其席につくや次で二部、三部及び時習寮生總代の送序朗讀あり何れも深沈なる感謝と壯快ある征途とを祝するの辭ならざるはなし。佐野先生は茨木先生が本校在學中の舊事を懷記して先生好學厚行の逸話を列舉し以て學徒に箴せられ、最後に八波先生の送歌朗讀ありき。畢りて茨木先生の謙讓ある口調を以て答辭を述べられたり、其の大意に曰く。

不肖嘗て本校に學び而して又教鞭を本校に執るに至り、深縁固に淺のふざるものあり。余本校に來任せしより三星霜を経して雖も

顧みて其諸君の貢獻せし者を思へば直に懺悔の極に堪えず、會ふや柳因、別るゝや絮果、今や北歐英國の地に游ばんとす。鵬程月餘、滯留二年豈に取り出で、云ふに足らんや、然りと雖此の行たゞ漫然たる無意味の者にあらず、豈に多少の自信なかつんや云々、

次に劍舞の餘興ありき。一は白虎隊の壯を舞ひ一は日本刀を詠ぜしもの前者は慷慨淋漓後者は高歌長吟、悉く懦夫をして起たしむるものありき。舞ひれさむるや席を移して能狂言二席を見又劍を舞はして蒙古來を歌ふものあり、棄兒行を演ずるものあり高會の興盡さざるものありしが冬雲黃昏、公園の雪に暮鴉の點ずる時、袂を別ち東西南北に去れりき。

同日正午より靜勝館に開かれたる茨木先生告別式に於ての北條校長の別辭を左に録す。

茨木教授は明治卅二年八月本校に來任し爾來今日に至り常に克く其の職務に盡されたり。而して昨年度文部大臣は教授を拔擢して本年度外國留學生の撰に加へたる是れ獨り本校教育將來の大きな利益たるのみならず教授一身の榮譽又大なりと謂ふべし。

文部省に於て二十九年より外國留學生の定員を増加し、元二三十人なりしもの三十二年以後に至りては百人内外となり越て昨年三月末日に於て百十八人の現員を見るに至れり。而して是等留學生の多數は兩帝國大學及び高等師範學校等より出で從來派遣せられたる留學生の高等學校大學豫科より撰ばれたるものは僅々二三の指を屈するに過ぎず。本校大學豫科より外國留學生を出すは實に教授を以て嚆矢とす亦光榮なりと云ふべし。本校は教授が留學の業終りて歸朝の後、再び本校教育の任に服せらるゝに望みを屬



をること深し、特に此の式を設けて教授を送るの意を述べ。

### 嗚呼堀口眞全君

白露寒蟬、音に泣く昨秋、銷魂何事ぞ君が訃音に接せんとは、前山頭を回らせば楓葉のうらみ未だ深くふぬに、一葉むろしく散る、げに哀の極み、痛の極みなりけり。風雨蕭瑟、長笛落梅、人世の遭逢寧ろ言ふに忍びず。

可憐一點梅心負、 僅見開花忽落花、

廿四春風吹恨長、

げにや、花開うんず見る間に哀れ一山れろしの烈しき、哀怨徒らに恨み限り知れず。我世の紛々さすが横ふ塵骸れ最ども繁に堪にやらぬにはあれど、連城の壁、いまだ疎くに違あうで紛紛として碎け散るさまの如何に惜むべからずや嗚呼堀口君逝く、悲みや實に極まりあし。

懷ふ昨夏我等の悠遊七旬の休暇を得て故園の空

に嘯さし時一葉君我に送て曰く蘇子なぬ我も實に長江の無窮を羨まる、哉、されど團欒和樂父兄の膝下にあれば憾み多からず、又親戚故舊と共にあらば更に快あり、而して大宇宙と合す快更に快、亦何の憾あらんと、書もとより簡にして意盡きずと雖も、江山百里いかで君が不治難患に呻吟すとは知るべき。秋風再び金澤に入れば兄が沈痛なる人生觀を聞くを得んか」など贈りしは夢、果敢あきは運命の流轉なりけり。

爾後秋風と共に我れ再び金澤の遊子となるや、旅裝匆忙、君が寓を泉臺に訪へば君未だあらす。月の末なうではとは寓の主婦より洩れし言ありき、思へらく一旬の後、遅くも二旬を経あば君歸り來んと。鴻尸西に飛んで夜半の夢しば々なるも杳として、君が信なし、玉泉寺畔暮雲のかゝる夕、俄然耳朶をつんざきしは君が危篤の

報ありき。驚うざるを得んや、痛まざるを得べ

き、匆忙書を裁して贈り私に其の快復を祈れりしに、日を經て君が兄上よりの返書を得ぬ、計ふざりき君強烈なる肺結核に罹りしなり。

しのも其の少快を聞くに及びては、さながらに全快の報を聞きたるにも似て愁眉ひそめに聞きしも甲斐なく、斷鴻幾度、遂に君が訃音を得さ、落葉地に聲あり、虫聲をいづる腸をさく、哀むべきうな芳魂遂に歸らず。

悲むべきう痛むべきう、芳蕾未だ開ぬものを、碎き去る漸瀝一夜の酷は果して神れ慈か、血を見て笑ふ我等の神は眞に愛なりと云ふべきう。惜むべし少壯俊才、刻苦倦まず勵精撓まざる君が資性は果敢なき運命の糸を織りけん。人世風樹の歎きここに盡きざるものあり。

一夜月白し、欄によりて清風を袂にしつゝ、君ど語りき。銀波くたげ流る、犀川の清流を下瞰し、

細吟我れ蘇子の前赤壁賦を歌ふ、君山月をのぞみ、逝く水を眺め、沈吟數回驛に襟を正して曰く。逝者如斯、莫消長、眞個蘇子が人世觀、我れ今夕始めて解するを得たり、哀吾生之須臾、羨長江之無窮、蟬蛸のそのの如き吾等の生亦趣あゝらずやは」と限りなき感慨に沈みしが忽ちにして天に向て嘯き皓歌數曲、清興淡として盡さず袂をはたつて君は月に歸りき。今にして懷ふ、言や讖をなしけん、想起るの夜の光景眼中にあり、月や水や玲瓏の光、鞆々の響、舊によりて依然たるも、其の夜襟を收めて肅然沈吟浩歌せし其の人はあし。蛤坂臺上行人絶えず、銀波さふぬだに清瑩あるも、その人のおも影は何の時に觀るべきやらん、將た碎け散るその波にその人の星眸求め得べきやらん、心を痛ましむるゐな蛤坂臺畔の月夜。

乾坤有淚雨洪雨

天地無情捲寒沙

病裡蕭郎喉忽破

敗荷吹徹王姬家。

# 瘦狗長吠録

○近時文壇の問題とあって居るのは所謂ニッチエズムである昨年の夏頃高山文學士が太陽紙上に美的生活論を掲げてから、論難攻撃は聲は文壇の四方に起つた。帝國文學で登張文學士がニッチエ論を草して高山君の應援をしたもんだから、益々其の聲を高めたのである。何某とか云ふ人が當時の讀賣新聞で美的生活論を駁したが、其後無名の人が亦馬骨人言てふ大論文を同紙上に掲げ、嘲弄的は筆で大にニッチエズムの陣頭に叫んだ。是の無名の士とは誰れあらふ早稻田の老雄逍遙博士この事である、が、樗牛先生は之を鼻であしらひ、何れ早稻田あたりの末派が異伐の筆だなどゝすまして居る、而して竹風子は堂々と是に對抗するの陣を立てゝゐるらしい。色別をして見ると早稻田出身の學者は反對の陣を備

へてゐるが、大學出身では樗牛、竹風は二子が専ら飛將軍の風で、桂月子天隨子などは寧ろ道學者先生然として新主義を好まぬ風がある。

○かゝる問題に對して我輩は敢て容喙するの權を有せぬのではない、ニッチエズムの困りて來る哲學々派を知らぬならなと云つてゐる輩は、語るに足らぬが我輩未だ説を吐くに時機早しと思ふから暫く見物の役であるのだ。

○美的生活論はたしうに當時の大論文であつたので、所謂道學先生輩を罵倒してゐる具合は誠に痛快極りなしと云ふべしだ。之に對して「破壊は易くして建設は難し」など云つてゐる學者があるが此等は弱輩共に語るべからずと云つてもよろう。建設は見込が立たぬ以上は破壊せぬと頑張りてゐるのは唯眼前の苟且のみを希ふ輩であるまいか。何程老けて朽ちて危嶮な家でも之を破壊すれば住む家がある、暫時く日を延し

て中に忽然大風が吹て蹴倒したら果してどうであらうか、又一夜け中に音かして積つた雪が俄

然家をひどいたらだんぶと壓へ斃されるなりん。

夢暖かだと思ふて太平樂をしてゐる間に不識く滅亡に赴くのは常に斯の如しである、果敢ないでと云ふ、一錢に賢く一圓に愚かりと云ふ語は此のために造られた語なので、寧ろ憐むべしである、危険で住まれないより速に壊すべし、柱か朽ち棟が腐つて居ても、無神經の人は平然としてゐるのだ、よし平然とはなさぬでも、決斷力お乏いかられぬ、額雪の下に潰されるのである。蓋し、世界も或は是と等しき道理かも知れん、宜しく破壊すべしである。假令建設の見こみが立たぬとも則ち新道德、新宗教の創設は分りぬにしても、因循してゐる間にどんな結果が出来るう測り知る可らずである、思へば慄

然として膚粟を生ずる様氣がする。

○おど、言へば青筋たてゝ怒鳴りつける人があらうが、固に滔々たる現時の社會、少くとも日東君子國と誇りて居る我國をぞ殆んど反駁する權利がないであらう、堅固なる人世觀がないうゝ形骸の宗教や枯骨の教育や青白い道德などは遂に一代の人心を指導する力がないでないか。獸性を包みて表面に薄皮を被ひ、時とすると眞相をさらけ出す窮屈を容すよりか、さっぱりと眞相のまゝ赤裸々であつたより却て天真愛をべしであらふ。此處らを思ふと實に歎息禁せざらんと欲するも得ずである。

○青年が勇敢で要素を欠いたら、青年は意氣は何の處にか求めんで、少くとも青年は破壊的性格を備いてゐると見てよいのだ。然るに現今最も欠乏してゐるのは青年の破壊的元氣である。成程テーブルを破壊しストーブを破壊する様な元

氣はあるが、男らしい破壊的元氣は誠に乏しいのだ。堂々たる破壊的元氣が勃然として起つた、前に敵を打倒してふ勢で破壊的動作をなす

るが、無神經漢と来た、固に縁なき衆生であるのだ。

だろふ、既に破壊せんと思ふからには破壊せよ、其の物に經驗を得るのだ。丁度ピラミッドを破壊したアラビヤ軍の如して、壯大なるカイロ一府は其の破壊物を用いたのである。そこで道徳や、宗教が到底その用をたしなないと見てとつたら、遠慮なく根底より覆へして差支はない、

○アッティクの一哲學者は巴理滿城の人民を大厦高樓に閉ぢられたる囚人と云つたが、中々痛快な句である。青年六百赤煉瓦の大石牢に呻吟すと云は、抑何の言がある、甘んじて囚人となり居る青年てふものは野の獸、空の鳥よりも價値なきにあらずやでないか、

聽て新道徳、新宗教は新に出るのであらふ。

○惡平等を破壊するは萬斤の鐵槌、差別觀の大打撃がほしい、惡差別を粉碎するには萬鎚の金剛杵でなくてはならぬ。

○無信仰、無道徳の青年なら須らくニッチエ流を酌むべしと勸める、何せあらば無道徳、無宗教は終局には必ず新らしい者が出來るうらである。刻下の急務は青年元氣の回復であるが、之が、好手段としては破壊主義である、言少し驕激に失する恐れがあるが知れぬが、實際破壊主義を理想とする青年は當成佛の資格を有して居

○今年の文壇でもニッチエズムが活動する。ふが博士とあられた樗牛先生の進軍が見たい。序でに云ふがニッチエを知るには今、帝國文學の去年の中頃の分に登張竹風子の論文が掲げである。宜しく見る可し、得る所は鮮少でないが、敢て勸めるのである。

# 笛聲絃聲

木犀の花うほる薄月夜、垣根を洩れて咽ぶに似たる月琴れいれ、小雨ふる頃柳をしのびに艶ある笛の音わたる、げに優にやさしき極みなりけり。

出づる所我等青年子裡亦此に魅せらるゝ者ありと云ふに至りては斬魔の劍豈に揮はざるを得んや。

我徒眞に優婉美の價値の少小ならざるを認む。

優美と壯美とは美の兩極を代表し、優美れみを以て美の極致となすの不可なるが如く、壯美のみを以て美の能事了れりとするは笑ふべし、兩

美相待ちて美の調和始めて得る可し。是等は

皆先人の既に業に熟知する所今將た筆を費すの愚を再びすべきにあらず。彼の幽泉渚にひせふ

一夜城南の一街を行く、梅花ほころびたる樓上

哀婉の響は花底宛轉の鶯の韻に伴ひ、漕々村雨

もれ来る笛聲絃聲ありき。笛や浮調、絃や艶響、

の趣致は切々私語の情致と合し、四絃一聲帛を

必すしも其の技拙なるにあらず、寧ろ技の賞す

裂くてふ絃は鐵騎突出刀槍鳴るに應じ、各其の

べきものあるも卑韻遂に聞くに堪へざりき。私

美的調和の生命と有するものあり。然りと雖も

のに思ふ艶絃卑調是は優美より墮落し來りし者

物常に偏し易く事完きを望み難し、各其の好む

にあらずるうと、優美由來艶靡と縁あり壯美時

處に偏して肯綮を逸する多々、憾み實に鮮少か

も艶靡卑調のそれに比して且らく可なるあり、

ふず。音樂の如き亦此れに洩れず。あゝ今の時

果して其の孰れをか取るべき。止むなくんばそれ剛快の音か。

さらぬだに元氣奮はぬ今の時、姫御前の怨聲にも似たらん樂や、將た御曹子の吹き習はせらる、紅梅の曲を切々の響、臙脂の曲、寧ろ繁に堪へざるあり。望まほしきは男兒剛健の調なるかな。

滿城遂に剛調の音をきき、壯絶の絃遂に聴くを得ず。紛々たる艶靡俗調の樂は至る所に奏せられて沈痛骨を刺すの音、壯美雄懷の音は鐵の草鞋もて探すも聴かれざるなり。十二絃可なり、三絃可なり、薩摩琵琶可なり、ヴァイオリンオル、ガン亦可なり、而して横笛、尺八最も可なり、要は男兒の調のみ。故中野逍遙曰く、

夫九州之景不以奇峭勝、而以優雅勝試以信毛之景比之、耶馬之溪第一可爭勝于妙義之峰、耶馬有河沿岸而上、岸樹鬱蒼、水流潺湲、板

橋石門、意遠心杳、不覺身入于畫圖之中也、而無妙義之危石怪巖半落而纔支、白雲縹緲神骨欲仙之奇、山國川之韻致有桃花流水之慨、而無吾妻川之清冽如碎碧琉璃之觀、筑後川之奔瀉淙々有烈士叫義之風、而無利根之浩流蕩々英雄指麾之態。

是れ詩人が山水に對する批判あるも移して我が所謂笛聲絃聲を評すべし。出で男兒れ樂。

幽谷佳人金作衣 孤山仙士冰是骨  
月張夜弦射喬松 霜磨曉劍斷短蓬  
匹馬嚼盡高樓柳 長街無枝繫春風  
布衣生兮拓落士 汗漫幾歲滯城市  
贈我琅玕無以報 空想美人湘江水  
仰天而嘯彈劒歌 春夜茫々感懷多  
聞說漢文近愛才 長沙賈誼今如何。

# 劍舞局外觀

○茨木先生送別會の餘興に四曲の劍舞を觀たに由り爰に聊か局外漢の駄評を試みやう。固より局外漢の事であるから斯道の蘊奥は知覺するに出来ぬが、劍舞などは感情高潮の結果であるから、其の術は習はないとも批評位は出来ない者ではあるまい、其の駄評罪は幾重にも謝するのである。

○最初に白虎隊を舞ふたのは森谷君であつた、成程此の題の如きは劍舞に最好當の者である。少年隊を組み立て君侯の馬前に戦死する、妙齡の花雪は一朝に嵐に散る、絶好の畫題、詩題と云ふべしだ。森谷君の技、眞に近しい者があつた彼の

「西望閣城煙塵起」のあたり、惆悵願望、無限の恨を抱きて相刺すてふ悲痛なる景は恐らく其の華と云つて宜らう。唯詩の末段をも併せ演じたのは蛇足であるまいか、少年相刺して斃ると云

ふ其處で止めたゞば餘韻實に極りなしであるが、詩人咏歎の餘瀝を餘さずと舞つたんだから、折角同情に暖かになつた心的状態は索然として冷却した誠に惜むべしである、詩と畫とは其の對稱が全然同トウらざる如く、詩裡到底舞態に表彰し難きものがある、則ち白虎隊詩の末段の如き其の適例である。是等は太に舞者の考ふべき所なので、千金一擲など云ふ失錯もある。有名な山陽の作ある「本能寺」の如きも最終の一結、之を吟じて舞つたらば舞の餘韻は存す可らずと考へられる。吟者の吟聲は少年の事を吟ずるには少しサビが氣障りであつたけれど、先づ通常と云つてよからう。抑揚は面白かつた。

○第二番目は『日本刀』の歌うしうた、舞題が白虎隊のそれに劣る居るではないが是等日本刀の歌などは舞術に於て難くあるうしう思はれる。詩的趣味、情的趣味に富まざる失は明のに見ら

れた、此の題の如き劍舞は大に研究を要する者である、何せと云ふに突撃猛進餘りに激しくしては美術的價值を損する事鮮らずでないか、題が題であるうら從て劍的動作則ち活動が多いの知れんが、其處々が考究の價があるのだ。昔鴻門の會で項莊が劍を彈いて舞ふあたりを想像すると余程趣味がある、十四五疊の廣間でも狭きを感じずる様では酒宴の席おごに適せない、尤も項莊は亞父の囑を受けて漢高を刺さんとするのだから突撃縱横をもやつたろうが、僕が想像に映ずる項莊は悠揚として長袖を飄しつゝ舞つたらく思はれる。劍舞は既に名が示す如く舞技であるから是を擊劔とを混してはあらぬ、舞とかれば多少美的表彰が必用であるから、劔法のみでは足らぬ必ず雅淳な趣がほしい。固より美の美ではあく壯美であるが強ち縱横奮撃のみが壯美ではないのである。寧ろ劔の冷光が既に冷

凄美を表して居るから舞技は優美を方が甘く調和する様に思ふ。而して此れ演舞の吟者は朗々として碎玉の音であつたが、惜むべし此の「日本刀一の吟には響きが餘りに美である此の詩の如きは寧ろ剛放沈痛の調が望まゝであつた。最初の「白虎隊」の吟者と代つたが適切であつたろう。○第三回は再び森谷君の「蒙古來」であつた。此の舞之前の「白虎隊」の如くには成功しなかつたらしい、是れは題が廣き範圍を含みて居るからであつたろう。詩として吟めては勇快ある音、憂々として金玉の響があるが、舞としては餘り好個の者でない。好箇の者たゞしめるには熟練が必要である。櫓を斬りて敵艦に横ふ爲に槍を持ち出したれば、恰も繪畫に二箇の中心點を置くが如く美學上の大議論も起ろうが兎に角觀た所では嬉しくない仕打であつた。殊に倒したる槍を櫓になぞらいて之を渡り越と云ふは餘りに露骨過

ぎる劍舞も斯の如きに至りては美的趣味を減損する實に大であるので、詩に想像の餘地がないと云ふと興味索然たるに等しく、舞技にも餘韻が必要であつたれば想像の餘地を置てもうひたゝ。餘地を惜みて無暗に演ずるから辨慶の七道具でも不足を感じるだらう。大に注意すべしである。

○最後には小泉君の「棄兒行」であつた是を劔舞と云ふよりも情劇の一節と見るべし。此の「棄兒行」の如きは餘り單調に陥る弊はあるまいか必ずしも情緒綿々の悲劇であるから、心的現象は實に複雑を極むるのだけれど、表彰は何だう單調に失する憂がある。之を單調に陥らしめぬ様は演ずるは研究を要すること、又大に考究の餘地が存するのである、情緒は沸騰する所千態萬狀の姿を横生せしむるは敢て難きことではない併し局外觀の評する如くあらざして或は案

外難いかも知れぬ、眞倒とう云ふ僕に舞ひと云はれたら施すべき術なしだらう。妙絶ならずとも舞技には老功の人と誰が眼にも見えた。此の吟者は石塚君で哀婉の調よく其の情を寫す、此の詩は舞ふよりは吟つた方が面白い。

○斯く劍舞通を氣取ると或は僕が劍舞の客うと思ふ人もあらうが、斯道にかけては劔の持ち様も知らぬ田舎者であるのだ。敢て劍舞の批評をなすと云ふのでなく、只觀た所を感したまふ、披瀝した而已なのであるが、元來此の如き舞を觀るとを好むから遂に贅筆を弄するに至つたのだ。舞客諸兄の寛容を願ひ度い。

昔は書生二人集ると詩を吟つて劔を舞はしたと聞くと、今日此れ頃は何と云ふ事であらう。剛快朗々の吟聲も中々聞かれなくなり、ハイカラ黨許り跋扈して、艶靡なる俗歌を好者振りに呻りつゝあるのは、實に歎はしい次第である矣。



# 明治卅四年第九回秋季

## 陸上運動會

十一月三日天長節の佳辰を下し校庭に於て陸上運動會を行ふ。諸般の準備用意は例によりて例の如く、午前九時に始まり午後五時に終り、清秋麗天健兒の雄懷さふめだに昂る時なれば、音に高かりしオリムピヤのそれならねど、勇壯、健剛よく快晴の一日を過しき。今其の受賞者の名を録して記事に換へんとす。技各々賞差あり。

### 第一回二丁競争

一、中村秀太郎 二、池田泰次郎 三、牛島敬太郎

### 第二回スプリングレース

一、衣斐清香 二、小林清二郎 三、水野 達意

### 第三回四丁競争

一、下野 遠善 二、中大路氏爲 三、高島 喜市

### 第四回武裝競争

一、降幡 積 二、田口 邦重 三、野田勢二郎

### 第五回提灯競争

一、巖 撮 行 二、安藤 淨眼 三、ナシ

### 第六回戴囊競争

一、大藪虎之助 二、菅原 喜市 三、笠原由太夫

### 第七回二人三脚競争

一、大内 秀鷹 二、山崎 直三 三、石塚 正二  
館 正三 逢坂元吉郎 藤内 充

### 第八回竹馬競争

一、盛 賢藏 二、安藤 一二 三、白井 邦吉

### 第九回提灯競争

一、富山 智海 二、大澤次三郎 三、渡部 轍

### 第十回二丁競争

一、稻垣 米門 二、南 達 吉 三、川越 篤

### 第十一回武裝競争

一、角尾猛二郎 二、陰 山 齊 三、島津 眞

### 第十二回戴囊競争

一、橘 稱男 二、桐山 誠一 三、淺井 博

### 第十三回障礙物競争

一、中大路氏爲 二、正木信次郎 三、森谷 精一 一、澤 靜夫 二、山本篤一郎 三、小番 小一

### 第十四回學術

一、稻垣 米門 二、淺野利三郎 三、淺香民之助 一、三浦 尙友 二、秋月 致

### 第十五回一分間

一、南 達吉 二、仲佐貞二郎 三、池田泰次郎 一、福田 門彌 二、近藤 達兒

### 第十六回二人三脚

第廿四回二人三脚撰手競争

一、(安藤 淨眼 二、小野 連三 三、澤 靜夫  
正野 梅吉 白井 邦吉 牛島 敬太 大内 秀鷹 館 正三

### 第十七回片脚

第廿五回四丁競争

一、森谷 精一 二、伊東 三吉 三、京谷 正治 一、西 成伍 二、一又太四郎 三、山添喜代藏

### 第十八回武裝

第廿六回提灯

一、丸山 茂治 二、上野 道故 三、佐久間周吉 一、神保 金衛 二、久德 隆篤 三、關野 謙三

### 第十九回障礙物

第廿七回二丁撰手競争

一、安達 勝雅 二、石塚 正二 三、神保 金衛 稻垣 米門

### 第二十回二丁競争

第廿八回戴囊競争

一、逢坂元吉郎 二、西 成伍 三、久德 隆篤 一、倉賀野 晉二 小番 小一 三、村野 美雄



第廿九回障礙物競争

- 一、伊東 三吉 二、上野 意純 三、神藤純一郎  
第三十回竿飛

- 一、金子庄八郎 二、岡本 泰

(最高八フィート二インチ)

第卅一回四丁撰手競争

中大路氏爲

第卅二回スプリンレース

- 一、逢坂元吉郎 二、丸山 俊二 三、庄田 作輔

番外千鳥競争(自習寮生)赤勝利

第卅三回六丁競争

- 一、衣斐 清香 二、龜川 兼吉 三、川越 篤  
四、小山 永顯

第卅四回學術競争

- 一、上野 道故 二、開發仁十郎 三、ナシ

第卅五回戴囊撰手競争

京谷 正作

第卅六回竹馬競争

- 一、坪田 修吉 二、降幡 積 三、倉賀野 晋  
第卅七回障礙物撰手競争

安達 勝雅

番外小使障害物競争

- 一、岡本 某 二、野村 某 三、坂井 某

第卅八回サツク競争

- 一、服田美濃吉 二、増山 宗誠 三、中田 久

第卅九回來賓競争

- 一、絹谷 某 二、北村 某 三、押野 某

第四十回武裝撰手競争

角尾猛二郎

第四十一回職員競争

- 一、吉崎佐次郎 二、竹田留次郎 三、茨木清次郎

第四十二回公立學校撰手競争

- 一、龜田 最澄(石川) 二、野村 徳次(富山一中)

三、多賀菊二郎(石川中)

第四十三回金澤醫學專門學校撰手競争

- 一、川原 信次 二、彦坂 正一 三、柳 榮太郎

第四十四回各部撰手競争

- 一、河原 繁(二ノ) 二、衣斐 清香(三ノ)

三、堀 將之(二ノ)

第四十五回一哩競争

- 一、高井竹次郎 二、仲佐貞次郎 三、龜川 兼吉  
四、長谷川俊二 五、大橋 貞勝

以上

陸上運動會雜俎、

○當日の音楽隊につき委員諸子が苦心一方あら  
ず、已むなくんば或は二部有志の設けし樂隊を  
以て之に代へんとまでも思ひが、苦心遂お其  
の功を奏してや首尾よく樂隊を聘するを得たり

しは大に喜ぶ可かりき。二部生れ設にうゝりし  
二部館は同部有志の盡力にて高壯なる營を張  
り、折かゝ洩るゝ樂聲景氣を添へし者鮮少を  
ざりき

○而して一部生に大鵬軒あり三部生に景物餘興  
あり、靜勝館は公認亭とかりて公認下宿生の陣  
營となり各茶菓を饗せりき。

○競技に勇壯なるものあり、滑稽なるものあり、  
汗を握りし、唾を飲ましむ。スプリン、サツク、  
竹馬、提灯、戴囊、是れ多く噴飯に値すべき者。  
而して武裝、障礙物、二人三脚の如きは其の佳  
なるもの。二丁競争は奔馬の飛ぶに似、四丁競  
争は猛虎の威あるが如し、一周亦一周長蛇の趨  
くが如きは是れ一哩競争が。喊聲とゞろき拍手  
雷の鳴るに似、一瞬亦一瞬満場の健兒を以て覺  
えず手汗を握りしむるものは責任山の如く千鈞  
の重さ其の双肩に落つる各部撰手競争なりき。

○マルス神の寵厚は二部に篤りけん、名譽ある各部撰手競争の月桂冠は二部陣營の頂頭に輝りかゝやきぬ。一部にアポロ神の保護なきか將た三部に勝戦の命運なかりしか、先着の河原君、次の衣斐君、第三着の堀君悉く是れ二部の撰なりき。沙を蹴てラインに突入する武者振何んぞそれ勇ましく、揚々たる其の風姿、颯爽たる雄丰、徒らに豎子をして名をなさしむ、一部三部の戦將この時の感果して如奈。

○當日二部の軍氣旺盛を極め、金牌銀牌しきりに其の胸を飾りて得意の雲氣其の旌旗に宿りしか、最後の一哩競争に於て勝星遂に一部の勇士に歸しぬ。最後の鐵冠を戴きしもの實に一部法科三年の瘦仙大居士高井君其の人ありしあり。所謂之を西楡に失つて東隅に贏ち得しもの一部の旌旗此の時色あり。

○僥倖の勝と云ひ得べくんば、提灯レース學術

レース乃ち是れあり。先着の者悉く敗れて最尾の者終に其の榮に預る如き何等の滑稽や。決勝點に於て忽ち灯の消えしものあり、數歩にして敗る者、一ゼロをドロップしたるもの、コンマ一點を誤りしもの、恰も凱歌揚々本營に歸さんとして流丸其の胸を碎られし勇將の如く、馳突驀然敵將を斬らんとして長蛇逸去りし底の憾み。而して彼の僥倖兒は抑も何を以て之を較せん、東照翁の誠を味ふの徒か我れ知らず。○我徒は議あり感を同うするもの幾何、我徒ひそくに想ふ、斯くの如き運動會は則ち快なりと雖も、毎年同一演技を繰返す寧ろ其のモノトナスに堪えんや。堂々百金と費して一日の技に捧ぐる以上は今少し價值を付するに躊躇とべからず。一家言敢て今の運動會を非ととるにあらざる。唯蜀望の歎之れを記するのみ。

### 嘲罵篇

○自ら題して嘲罵篇と云ふ、しるも痛嘲熱罵世の噂を啓き人の愚を訓ふる底の大文字あるに非らず、蠢耳たる游子、徒らに其感を行るに過ぎざるのみ。讀者先づ其胸を撫して可也。

○飄逸豪快一世を驚倒し天下の英雄(?)を侮弄し去りたる明治の一奇傑中江兆民遂に逝きぬ。

予輩兆民其人の爲に哀哭すと俱に、轉た國家の爲に痛嘆長息せずんばあらざる也。

○今の世に最も欠けたるは夫れ革命的精神にあふざるなきの、意氣は銷沈し世は眠りぬ、而して覆氣横生革命的精神に富めりし中江兆民の如きは今や容易に看るべからざる也。吁。

○言ふ勿れ、吾言虚譚なり、危險なりと、讀者若し予輩を詰るに斯言を以てせんか。予輩更に請ひ問ふを得む、意氣銷沈せる國民は賀すべき國民なりや、眠れる國家は危險なざる國家なりや。予輩は確信す、今の世は大に革命的精神

を鼓吹して社會のあらゆる方面を矯正すべき時なりと、起てよ天下の青年北辰校下の健兒。

○外尊内卑今日の如く甚しきはなかるべし。人はいふ、吾れの文明未だ英獨に如かず大に進んで彼の文藝、學術、制度、教育等萬般の事物を輸入をせしと。斯くて西洋人とし云へば腰を卑くし辭を恭々しくして一に其歡心を納れむことを求む、世を擧げて碧眼奴の婢僕たらずんば止まざらんとす。而して滔々たる世潮は多望なる健兒の心胸を浸し、果然眇たる宣教師輩の頤使に甘んずる無腸漢を分泌せり。予輩今更に喋々

彼等が劣等ある品性を云爲せんや。

○予輩の言或は奇矯に失し、或は過激に趨るとせむ。唯期せよ、鷄林の文物熾に注入せられて後に蘇我氏の反逆あり、壬申の非難あり、勢の窮極する所神護景雲の危機を見るに至りしを。夫の常陸帶に書く情人の名さわるるを誇り朱雀

大路の上に、蚊、蝶、蜂、々の壞風を現出したる平安朝の淫佚墮落も、亦如何ぞ唐風模倣の盛なりし弊實に基くべきを知らんや。此を思ひ彼を想へば、歐化主義、洋行主義に沈酔したる世の果や如何に。

○予輩の言眞に杞憂あらん、眞に杞憂の言をして遂に豫言と化せしむる勿れ、予輩の願は決して豫言者たるにあらず。誰か汝の祖國を愛せざるものぞ。

○予輩往々にして先後轉倒の無常識漢を見る、未だ自國文學の梗概だに知らずして、漫りに西歐のクラシックを歐々するの輩是也。言ふを己めよ、我邦未だ偉大の文學ありと。蛆輩の文學史上に於て、讀破し得たる書卷果して幾冊をの指點し得べき。與り聞くを得ば幸あり。

○自己の價值如何を自覺し得ざる輩こそ世も最も憐むべきもの、一なれ。徒らに席順、成績表

上の甲乙を以て自家の價值を認識し得たりとするの狂癡は、予輩數々學ばんと欲して遂に學び能はざる也。

○人を教育せむとする者、寧ろ苛酷を失せんよりは須らく寛宏の大度あるべし。而も一旦主義を以て起つ、徒らに朝改暮變するを許さず、蓋し主義の豹變は、其本領を失へばなり。予輩此點に於て、吾校が終始嚴峻なる主義を執りて毫も假借する所あらざりしを喜ぶ也。必ずや、賢明なる校長閣下及び學生課の當局者は、依然として這般れ主義を遂行せらるべし。予輩全校七百の健兒のため、猥瑣なるパチルス退治の壯舉に至囑して已まざる也。

○何等の怪事ぞ、予輩頃日這般パチルスの校内に蠢動するを耳にす。予輩徒らに巷路の妄説をして默するに忍びず。區々パチルスの蠢動と雖も、北辰校名を損ふを如何せむ。予輩彼等の悔

悟を待ちや決して一日にあらず、而も二三れ腐敗分子は日を累ね月を重ねて其行動を改めず。予輩尙之を忍ばんか、終に神聖なる校名を如何にせむ。予輩今に於て彼等が自決潔く校名の汚損を償ふべきを諫言せざるを得ず。

○さるにても奇怪なるは、吾校學生間に制裁力なり。往者約に背きて運動場裡に競走を試みし一小癡漢をだに懲治したる制裁力は、借つて以て今の腐敗分子に適用せらるべきにあらずや。昨の偉大なる制裁力今既に業に消散滅却したりといふ予輩決して信ずる能はず。來れ制裁力、予輩は切に汝の襲來を待つ、彼等を救ひ、校名を全くする、汝を外にして其人なきなり。嗚呼、汝遂に來ざるか。

○予輩一たび斬魔の筆を握つて壇上に起つ、吾が筆勁さか、彼の魔力強さの。疾く自決せよ、早く悔悟せよ、惡事既に千里に奔れり、苟息は

汝が爲にあらず。若し夫れ予輩が血と涙とを以てする此忠言に猶も悖らん、予輩汝と奮闘せむ、汝予輩の筆を枉げんと欲するあざば、先づ來つて予輩が首を刎ねよ、然らずんば汝は凱歌を奏するを得ず。再思三考能く去就を決せよ腐敗漢。

○群草空しく刈去られて汚水永く其臭を放つ、予輩實に魔王の跳梁跋扈を惡む。希くは至公至平、快刀一閃以て罪惡の巨魁を斃とを得む乎。

○世は春となりて花咲ひ禽鳴く。吾人獨り嘲罵の筆を執りて士君子の行に背く。自ら省みて大に慚愧せざるを得ず。予れ豈嘲罵を好まむや。しうも默して而して己むべきにあらずるを如何にせむ。(吹風子)

# 各部報告一束

英語學會報告

The English speaking society of 1st term was held

at the Shisei Hall on 16<sup>th</sup> of November, and professors and students, about hundred in all, were present. Mr Mackenzie, a missionary in Kanazawa, was to present to make an address on that day, but to our great disappointment we could not have the pleasure of hearing him owing to his sickness. In the spelling contest which was held for the first time it proved a strange fact that the students of the third year failed and the palm was carried away by Mr Furumichi, a first year student. The prize, Shimada's Anglo-Japanese Dictionary, was contributed by professor Snodgrass.

The speakers were as follows:—

Mr Yamasaki.

" Sonoda.

" Sawa.

" Okada.

" Koyama.

" Ōta.

" Ōsaka.

" Takagi.

Professor Ibaraki.

" Snodgrass.

The English speaking society of 2<sup>nd</sup> term was held at the Lecture hall of physics on 10<sup>th</sup> of February and the speakers were as follows:—

Mr Namai.

" Kawai.

" Sekuma.

" Asai.

" Ito.

" Matsuyama.

" Takemura.

" Ito.

professor Sugimori.

" De Havilland.

A beautiful poem was recited by Professor Sugimori with singings along with it at intervals. The poem was as follows.

My Vesper Hymn.

Day has barred her golden gates

Evening at the portal waits,

While the solemn shadows roll,

"Jesus lover of my soul

Let me to thy bosom fly."

How the words my thought repeat

To thy bosom Lord I come

Though unfit to kiss thy feet.

Royally far down the west

Sinks the flaming sun to rest

when lifes fleeting day is past

"Oh receive my soul at last"

I am weary and would rest

Like a child when day is done,

In the shadows, Lord I say

"Leave, ah leave me not alone."

When life's bitter cup I drink,

When some sorrow comes to me,

Though I falter while I say,

Still support and comfort me,

All my trust on thee is stayed

All my heart on thee I bring."

Let me rest in thee for aye

Neath the shadow of thy wing.

Nothing here my thirst can quench

Still my spirit longs for thee  
Living fountain in my heart  
Rise to all eternity.

All is silent all is calm

On the earth and in the sky

"Jesus lover of my soul

Let me to my my bosom fly."

We were very much pleased to hear from professor De Haviland about his long trip. It was very interesting to hear about the falls of Niagara, the Rocky mountains and the grand hotel where he payed a big bill for staying only six hours having no meal. We can well imagine in how great a triumph he was when he spoke with so called Philippians in the Japanese language in America. This day he took us as far as England and promised us to speak of his return trip the next time.

Thousand thanks to all the speakers for their beautiful performances in spite of a short notice. The committee will be more careful to give them more time for preparation hereafter. We are at loss what to say for the absentees who were to take parts. It is an humble and earnest request to all the members to have the pleasure of their presence and bearing their beautiful orations and declamations.

獨逸語學會報告

十月十三日本學年第一回の獨逸語學會を醫學專門學校六角教室に開く傍聴者約六十名當日演壇に立ちて快辨を振はれたる諸氏は

(文三)今井正親、(獨法三)武部欽一、(理三)角尾猛次郎、(獨法二)藤田直一、(獨法二)砂野卓、(三三二)齊藤又次郎、(三三二)松澤善一、(三三二)菱川恒夫

右終りて中目教授登壇獨逸語學部に向て三勳議を提出され次に湯目教授は學校制度に付きて最後にユンケル先生は語學に付きて縷々述べられ、終りて散會せり

弓術部報告

○秋季弓術大會

十一月廿三日秋季弓術大會を無聲堂に開く、午前八時開會の筈ありしが當日今井先生開講廿年の祝賀ありしを以て其式の終るを待ち、午後一時漸く開會するを得たり、來會者、本校の教授職員には北條校長を初め中野、長屋、佐野、茂木、宮地、楠の諸氏、來賓には水郡檢事其他醫學專門學校及び第一中學の撰手にいて、時々細雨を交へたるにも係らず、本校生徒尺的五度競射より順次、點取二尺的五度競射、各學校撰手尺的五度競射、四半射割一本競射等を施行し、散會せしは午後六時頃なりき、今左に當日勝者の英名を列記

せむ(姓名上の(カッコ)は校名、姓名下の者は當矢の數を現はす)

一、本校生徒尺的五度競射

一等、衣斐清香(六本) 二等、櫻井小一(六本)

三等、橋本四郎(四本) 四等、生井 洗(三本)

五等、畠山一清(三本)

二、四半射割競射

一等、生井 洗

三、各學校撰手尺的五度競射

一等(一中)楠 正路(七本) 二等(醫專)中野彌吉(六本) 三等(四高)櫻井小一(五本)

四、點取二尺的五度競射

一等(一中)楠 正路(皆中、計九十六點) 二等

(一中)堀 末松(皆中、計八十二點) 三等(一中)

岡部節義(皆中、七十八點) 四等(醫專)笹田唯三

(七本計七十三點) 五等(來賓)水郡長義(九本計

七十點)



○弓術射初式

一月十八日弓術射初式を無聲堂東庭に行ふ來觀者數名、數日前より豫習に勉めたるに出席演技者十に足らず誠に寂寞の觀あり左れども當日來會は諸士は皆眞摯斯術に熱心なるもののみなりしうば卷裏に向ひて輕忽の舉動なく、足踏、弓構、に至る迄射法整然弓聲いと勇ましく靜肅に式を終り得たるは聊り不滿の心地を慰むるに足れり、若し夫れ同窓諸士にして、弓術の優雅に富み且つ体育上最も適當の運動あるを悟らば次回の射初式には一層の熱誠を以て奮て出席あらん事を希望するものなり

劍道部報告

○寒稽古 名にし負ふ北溟の寒嵐怒吼して尾山城趾お猛嘯し、冬海の狂瀾澎湃として千尺の巖崖を碎く、是れ實に吾人が地に誇り得る所以の心神鍛練期に非ずや。殊に昨臘以來の寒雲飛雪

は、また例年に比あき酷烈おして、街頭全く往行れ入絶へ、店肆悉く戸を鎖して徒らに蟄居の陋を演ず。斯の寒雲、斯の飛雪を冒して輕装疾馳、無聲堂にと駈け來る健兒將さに垂白、玻窓全く凍結して濛又暗、しるも健兒の豪氣斗牛を衝く、何條風雪を厭ふべき、何條冥闇を厭ふべき、一領の薄衫に弊袴を穿ち、劍を執つて相向へば弦月冴えて殺氣漠々、劍戟相摩して忽ち窓外傲嘯の響を壓し、刃端火焰を揚げて意氣天地と高し、嗚呼、又何れの處にこの這般男子の活劇を見るべき。奮へ我黨の士、起てよ神州の男兒。されど三句の白乾坤、名成り功遂げし者僅々三十三、豈不振の極なふずや。徒らに豪氣ありて堅忍の操あくんば、是れ功を一簣に欠くものに非らずや。猛省!!!

齋藤 拔 久保 豐四郎 後藤 幸太郎  
山崎 嘉夫 山本 篤一郎 小原 外幹

の二氏、共に三句の寒稽古に、腕を磨きし若殿原太刀風雄々しく鐙を削りぬ、次に現はれしは、孰れ劣らぬ一騎當千の士、

○第二回

面、面 水野 達意  
菱川 恒夫

○第三回

引分 突 永宮 二男造  
胸 小原 外幹

○第四回

引分 小手 外垣 秀重  
面 星 政一

茲に悠々戰場に現れしは、本校運動場裡のチャン米門氏稻垣君、緋威しの鎧に傳家名刀兼光を提げての若武者振り、已れ劣らト、豈功名を孺子の手に委せんやと叫ぶ中村博君、

○第五回

面、面 中村 博  
胸、胸 稻垣 米門

の來觀せるは北條校長を始め三竹、永井、佐野、明石、石川等の諸先生にして本校生徒の來會する者、尠なりしは、大に遺憾とすべき所なりき、やがて當日先登第一の榮を荷ひしは

○第一回

胸 吉本 豐二  
突 小手 齋藤 拔

○第六回

面、突 塚野 豐四郎  
野口 政一



○第七回

面、面、寺島良太郎  
松橋好二郎

○第八回

引分 小手、今池田泰次郎  
小手、今池喜代志

○第九回

小手、山田博愛  
山田邦吉

○第十回

面、面、富岡教雲  
金子庄八郎

○第十一回

面、突、見間芳郎  
森祐吉

○第十二回

面、突、三上房吉  
前田幹雄

○第十三回

面、山、本第一郎  
山崎垣次

○第十四回

面、突、今井熊次郎  
原田芳實

○第十五回

面、面、高木章  
森岡京次郎

○第十六回

面、面、渡邊  
佐倉

○第十七回

引分 金子庄八郎  
野口耕一

○第十八回

面、面、松村魁  
大久保直信

時己に亭午、爆然たる砲聲耳朶をかすめて、觀兒去るもの頻々、乃ち休戦の令は下れり、堂に残るもの僅に委員數名のみ、

× × × × × × × ×

既にして午下三十分、一人來り二人來り、やがて堂内復た立錫の餘地を残さず、來賓席亦大に狹隘を感ずるに至れり、時鈴二時を報するや憂々の聲は堂内の寂寞を破りぬ、

○第十九回 面、面、土屋米三  
神保金衛

○第二十回 面、面、井上慶治  
村野美雄

太刀風烈しく薙ぎにくて、忽ち敵の脾腹を兩斷し、ひるむところを再び烈しく斬つて捨てたる村野氏は、悠々劍を拭ひて本陣へと還りぬ。今や腥風場に満ちて、戰雲冥濛、殺氣あたりを拂つて硝煙漠々、

○第二十一回

面、面、松根爲次郎  
福岡喜洋

○第二十二回

小手、小手、三好敏久  
千秋寛

長脛三好氏、一中校先鋒の重任を負ひて、赤胴將軍千秋氏と角逐を、勝敗豫め期すべからず、三好氏纔かに罅を獲て電光一閃我れの右腕を落せり、千秋氏何ぞ躊躇せむ、縋略既に熟して、敵れ胴を撃ちしも、時利あく復び小手と制せられて、三好氏歡呼の裡は彌次連の満足を買ひぬ、

○第二十三回

引分 面、面、建銀次郎  
鈴木幸熙

技に於て鈴木氏敢て建氏に下らず、しるも勇士戰場に起つ、須らく風霜烈日の慨と凜とを要す、徒らに衣袂春風に飄るの狂態を演ト、「危いぞ」、「疲れたぞ」の如き嬌語を發するに至つては吾人之を取らざる也、若し夫れ乃折れ氣疲れて施すに術ありらん、潔く腹搔き切つて死すべきのみ、徒ら未練がること、夫の蘇小歌妓の徒の如

くなるは、獨り鈴木氏のため、大に惜むべきのみならず、また劍道のため大に惜むべしとす、三省、

○第二十四回

小手、小手、北川龍雄  
金子庄八郎

○第二十五回

引分 面、面、横山文英  
増田貞吉

○第二十六回

小手、小手、北川九十郎  
藤原敏夫

北川氏多年わが無聲堂に起ちて、我校幾多の健兒と惱まし、夙に同人間に重ぜらる、今また醫專好個の勇士と對峙して、青眼に構へ一刀、忽ち敵の小手を扼し、更に敵の鋭鋒を物の數ともせで、見事敵をば倒しは老練

○第二十七回

面、面、藤井辰之助  
山崎駿二

飛入りの老將山崎駿二氏、肉迫し來る藤井氏を避けて先づ胴を打ち、色めく敵を牽制して更に面を打ちたる電光石火は妙技、滿堂は喝采もて之を迎へたり、

○第二十八回

小手、(師)松本 次三郎  
小手、(上野)意純

戰友藤井氏の敗に怒りし松本氏、扮装勇ましく自若として動さず、上野氏亦決して輕進せず、神出鬼沒一進一退、互に謀略を盡して奮闘多時、隙やありけん、松本氏二回小手を打たれて、敗を招けり、

○第二十九回

小手、(一中)森下 政男  
面、(師)飯森 梅男

○第三十回

面、(師)池前 岩松  
面、(高木)靖彦

○第三十一回

面、(衛監)松井 初三郎  
面、(醫)石川 壽人

輕舉妄動は最も慎むべし、霸氣一聲疾風れ秋葉を掃ふが如く、喝采場裡に石川氏は引揚げたり、

○第三十二回

小手、(外)瀬尾 悦藏  
面、(醫)小原 徳太郎

○第三十三回

面、(警)村木 兼春  
面、(洞)石橋 一正

○第三十四回

小手、(衛監)大町 綱太郎  
小手、(宮)所 富太郎

○第三十五回

小手、(師)新宅 清八  
小手、(國本)順作

好個の愛嬌兒國本氏、時運の非あるを知りて、遂に功名を孺子に譲りしは命か、

○第三十六回

面、(衛監)松本 温故  
面、(洞)多田 平五郎

大聲疾呼、慷慨悲歌の士平五郎君多田氏は起てり、殺沈にして將略に富める松本氏も、彼が殊死奮闘の鋭鋒に辟易して、息をつがんとする所を洞と叫びしは多田氏あり、喝采の聲は急霰の如し、多田氏更に鋭氣を養うて敵を一刀に撃たんとせしが、敵もさる者、血戰縦横、容易に斃れず、既にして多田氏亦一傷を受けて流血淋漓大に疲勞の色あり、場内「多田君しつくり」と呼ぶものありしも、多田氏の氣息は奄々たり、之れに勢を得し松本氏は渾身の勇を劍端に籠めて、面とばかり、多田氏は倒れたり、されば、勝敗は戦場の常、されば多田氏が虎嘯奮闘の勇

は、吾れ人共に感じ合へりき、

○第三十七回

面、(一中)石橋 三也  
面、(木村)敬義

斯道の老將木村氏、一刀を渠に加へずして乳臭黄吻兒の手に斃る、人衆ければ天に勝つものか、否か、

○第三十八回

面、(警)吉田 元太郎  
面、(洞)桐山 誠一

豪氣堂々場を壓して殺氣人に逼る、劍端互に結んで解けず、敵も味方も稍々疲色あり、忽ち見る桐山氏太刀を捨て、角闘敵首を獲せんとするを、されど時や遅のりき、敵は既に面を制して勝利を謳ひしを、

○第三十九回

小手、(突)二(中)南 長藏  
面、(三橋)篤敬

南氏、彌次連の應援に勢を得て霸氣正さに旺なり、三橋氏已に長く劔を執らずと雖も、また往年に寧馨兒、空しく首を渡すは志士の本懐にあらず、見事敵の胴を打ち棄て、其の勢を挫きし

も、渠れ愈々氣を養うて我が首を攫し、又小手を得て彌次馬連の満足を買ひぬ、遺憾。

此時、寒稽古皆勤者(姓名別項參看)及び進級者の證書授與式あり、北條會長親しく證書を附與す、進級者の姓名左記の如し、

林 慶太郎 大橋 貞勝

右二級

桐山 誠一 逢坂 元吉郎 宮所 富太郎

右三級

千秋 寛 石橋 一正 上野 意純

高木 靖彦 飯森 梅男

右四級

森 祐吉 原田 芳實 飯沼 九十郎

今井 熊次郎 星 政一 寺島 良太郎

吉本 豊二 野口 耕一 富岡 教雲

神保 金衛 五十嵐 博厚

右五級

右證書の授與了るや、續て勝負は始めり、

○第四十回 面、(一中)村井長八郎 逢坂元吉郎

村井男爵、夙に平民的教育を受けて文武兩道に志し、學日に進み武技愈精し、今又斯道に精通せる逢坂氏を倒して、餘裕綽々たり、好個皇室の藩屏、勉めよや長八郎君、

○第四十一回 引分 (一中)太田貞勝 宇一

三年以前の乳臭兒、白面郎、今は斯道の達者として一中校にチャンと呼ばるゝ太田氏、わが校の老將大橋氏と對峙して敢て損色なく、遂に雌雄を決するに至らずして止みしは、共に遺憾とする所なるべし、

○第四十二回 面、(二中)南長藏 林慶太郎

多年斯道の奥義を究盡したる林氏に對し南長藏君の取組は戦はずして既に滑稽の感あり、されどこれも山本氏の臨時代理とあれば致方あり、

當日最も望を囑されたる此好番組をして、空しく滑稽に終らしめたるは残念、

○第四十三回 面、(二中)松村政馬 面、(醫)永江直之

政馬、彌次馬の聲援を得て噓々場に止り、暴嘶一番、永江氏を破りしはお手柄、

○第四十四回 面、(外)大鋸助三郎 小手、面、(警)升崎茂次

兩虎風に嘯きて相拍つの狀あり、升崎氏が沈着にして容易に發せず、發すれば必ず敵を惱すの妙は、吾れ人共に嘆稱する所、老ひて益々斯道に熱心なる氏の如きは寡し、

○第四十五回 突、面、(警)松尾金吾 面、(警)千秋 寬

○第四十六回 面、(警)廣松甚太郎 小手、小手、面、(警)宮所富太郎

○第四十七回 面、面、(二中)矢原準一郎 面、面、(二)桐山誠一

○第四十八回 面、面、(監)乾芳久 面、面、逢坂元吉郎

○第四十九回 小手、面、(警)升崎茂次 三橋篤敬

老將軍升崎氏、獨特の横面を打ちて、觀る者を啞然たらしめ、尋て小手を落して再び凱歌を揚ぐ、後刻三橋氏に遇うて一揖して曰く、「年甲斐もないこと、しみしてね」と、蓋しその横面打を謝するあり、彼も亦無邪氣の老翁あるかあ。

○第五十回 面、面、(警)小方寬三 大橋貞勝

警察の撰手數人、而して勝利を得たるは、前に吉田升崎の二氏あるのみ、一重私語して曰く、「一將功成つて萬骨枯ると、言ふ勿れ勝敗天に在りとは、

○第五十一回 面、面、(監)乾芳久 林慶太郎

勇士各々三句銀ひに鍛へし手腕を振つて、短兵接戦、既に豫定の勝負を終へぬ、乃ち市内各師範家諸氏の勝負に移る、

○第五十二回 面、小手、柿田信行 小島鬼男

○第五十三回 面、面、廣瀬頼一 面、面、石川龍三

○第五十四回 面、面、都賀田茂穂 面、面、吉見彌五郎

師範家諸氏の勝負終るや、時正さに五時、日は權現堂の杜よりたそがれ初めて電燈の光輝々たり、是に於て閉會を告ぐ、

柔道部報告

○寒稽古 西比利亞氷原を涉りくる寒颯、白岳頂頭に結んで雪を降らすこと頻りに、加賀灣頭波は荒れて怒濤鯨波天地を呑む。斯時、一枚の稽古衣に甲斐々々しく扮裝ち、氷を嚙んで喉を濕し、一握嘔起互に格闘すれば、忽ちにして虜熱し汗湧き、霏々たる凍雲わが關する所にあらず、轟々なる朔風われ之を知らず、唯重衾綿を挾え暖閣紅爐に偃臥せる柔弱漢を憫笑するれみ、嗚呼、我々校半千の健兒、何ぞ英氣を此處に養はざる何ぞ心膽を此處に鍊らざる。

三句の寒稽古を皆勤したる者、僅のに七十名、不振寥々、左の皆勤者の交名を列記す、

|        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 伊佐 壽   | 仲佐貞次郎  | 石塚 正二  |
| 河原 繁   | 芝沼 榮作  | 中大路氏爲  |
| 庄田 作輔  | 山岸 哲夫  | 秋父 順次  |
| 白石 喜之  | 金尾 惟敏  | 及能 謙一  |
| 加藤鉄之助  | 野田 勢次郎 | 磯部喜右衛門 |
| 萩原 桑一  | 河合 定二  | 山崎 嘉夫  |
| 加畑 一吉  | 横山 春平  | 増山 宗誠  |
| 池田 泰次郎 | 今井 喜代志 | 淺見 與四藏 |
| 大澤 次三郎 | 西野 勇喜智 | 角田 榮三  |
| 服田 美濃吉 | 竹内 六藏  | 藤澤 廉二郎 |
| 安東 徳男  | 草間 智淨  | 齋藤 拔   |
| 森川 十喜治 | 菊地 正三  | 原 辰司   |
| 松浦 紋助  | 有馬 英二  | 清水 徳太郎 |
| 加藤英一郎  | 中村 廉次  | 橘 稱男   |
| 下村 茂   | 丸山 俊二  | 高木 章   |
| 村野 美雄  | 伊井谷 春平 | 川越 篤   |
| 渡邊 清   | 南 達吉   | 高田 澤智  |

藤田孝四郎 神藤純一郎 西 成伍  
福田 門彌 高村正太郎 加藤虎之助  
小川 恂藏 白井 清 板垣 賛造  
森田 秀次郎 増田 俊一 菅原 喜市  
小林 精實 森田 桂三 松橋 好二郎  
根津 政吉 宮所 富太郎 (計六十八名)

○柔道部大會 二月十一日紀元の佳辰とトして柔道大會を無聲堂に開く、此日數日來の風雪益々烈しく、白晝猶ほ咫尺を辨せざるの寒天地、來會者も如何あらんと委員れ心痛一方ならざりしも、幸にして熱誠なる斯道の健兒は、参々伍々集り來り、午下一點鐘豫定の番組により勝負を始めたり、此日來賓極めて少く久田一中校長及び軍人、紳商等十名を出でず、本校教官の出席も亦極めて少く、北條校長を始め中俣、田部、佐野、明石の諸先生其他二三名に過ぎざりしは大お遺憾、

○第一回

○第二回

○第三回

○第四回

○第五回

○第六回

○第七回

○第八回

○第九回

○第十回

○第十一回

○第十二回

雜報

|         |          |
|---------|----------|
| 小外刈、同   | 小藤 林修藏   |
| 抱分      | 淺山 永顯    |
| 抱分、体落   | 笠井 仁八    |
| 釣込腰、膝車  | 伊東 直吉    |
| 小外刈、巴投  | 高木 道章    |
| 大外刈、縱四方 | 西野 勇喜智   |
| 引分      | 小外刈、原 辰一 |
| 脊負落、同   | 今井 喜代志   |
| 小外刈、膝車  | 堀山 俊二    |
| 大外刈     | 西村 成伍    |
| 体落、同    | 大澤 次三郎   |
| 引分      | 菅原 喜市    |

○第十三回

大内刈、横捨身(龜川 兼吉)  
次で中大路氏爲、白石喜之二氏の講道館投形あり、又勝負を續けたり、

○第十四回

○第十五回

○第十六回

○第十七回

○第十八回

○第十九回

○第二十回

○第二十一回

○第二十二回

○第二十三回

百三十三

|            |                 |
|------------|-----------------|
| 釣込足、釣込足(醫) | 加藤 虎之助          |
| 大外刈、抑込(醫)  | 秩父 順二           |
| 大外落(二中)    | 本橋 虎雄           |
| 引分         | 大外落、矢口 清        |
| 引分         | 大外落、(醫) 中村 泰二郎  |
| 引分         | 大外落、(醫) 池田 辰八   |
| 引分         | 大外落、(一) 仲吉 宗一   |
| 引分         | 大外落、(二) 山田 伊之助  |
| 引分         | 大外落、(三) 杉岡 友三郎  |
| 引分         | 大外落、(四) 森田 仁三郎  |
| 引分         | 大外落、(五) 久永 與吉   |
| 引分         | 大外落、(六) 久上 隼雄   |
| 引分         | 大外落、(七) 久上 隼雄   |
| 引分         | 大外落、(八) 久上 隼雄   |
| 引分         | 大外落、(九) 久上 隼雄   |
| 引分         | 大外落、(十) 久上 隼雄   |
| 引分         | 大外落、(十一) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十二) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十三) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十四) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十五) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十六) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十七) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十八) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(十九) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(二十) 久上 隼雄  |
| 引分         | 大外落、(二十一) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十二) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十三) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十四) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十五) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十六) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十七) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十八) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(二十九) 久上 隼雄 |
| 引分         | 大外落、(三十) 久上 隼雄  |

○第二十四回

引分 足拂(石塚 正二 中大路 氏爲)

此時河原繁、芝沼榮作二氏が初段立合形を演ぜらる、次て他流の士有澤喜太郎(外來)氏は飛入として野村伸一氏と立合ひしが、脆くも野村氏が腰車に破られて茫然自失たる痴態は、可笑しくも亦氣の毒ありし

○第二十五回

(他流)有澤喜太郎 腰車、同(野村 伸一)

次て寒稽古皆勤證書及進級證書授與式あり此日進級の諸氏が姓名を列記すれば、

石塚 正二 河原 繁 芝沼 榮作

中大路 氏爲

の四氏は第三級へ、

山岸 哲夫 秩父 順次 白石 喜之

金尾 惟敏

の四氏は第四級へ夫々昇進せり、

其他

及能 謙一 今井 喜代志 野田 勢次郎

淺見 與四藏 角田 榮三 増山 宗誠

山崎 嘉夫 池田 泰次郎 磯部 喜右衛門

横山 春平 西野 勇喜智

河合 定二 萩原 桑一 大澤 次三郎

加藤 欽之輔 加畑 一吉

の諸氏は甲組へ

安東 徳男 草間 智淨 齋 藤 拔

藤澤 廉二郎 服田 美濃吉 森川 十喜治

竹内 六藏 有馬 英二 菊池 正三

松浦 紋助 原 辰司 清水 徳太郎

加藤 榮一郎 中村 廉次 橘 稱男

下村 茂 丸山 俊二 高木 章

村野 美雄 伊井谷 春平 川 越 篤

渡邊 清南 達吉 高 澤 智

藤田 孝四郎 神藤 純一郎 西 戊 伍

福田 門彌 高村 正太郎 加藤 虎之助

小川 恂藏 臼井 清 増田 俊一  
小林 精實 森田 秀次郎 森田 桂三  
板垣 賛造 菅原 喜市 松橋 好二郎  
根津 政吉  
の諸氏は乙組へ編入せられたり、  
うくて本日の大會を終りしは、午後五時を過ぐる  
こと半時ばかり寒鴉枯林に聳を索ひる頃あり  
き、當日來會者は少數ありしと、親玉連の仕合  
あかり一は吾れ人共に遺憾とせし所ありし。

寮報

時習寮々生宣誓式並に

第一回茶話會記事

白岳山頭白雲起ち河北湖岸秋風戰く當に是れ天  
高く馬肥ゆるは時時習寮内活氣炎として鬱勃天  
を衝んとすあゝこれ何のためや多年中學に學  
識を研ぎ心膽を練りし新入學生五十又五健兒

が入寮の當初とは知られぬ今よりは運動場裡更  
に幾多の花を添へ吾四高校風の美また揚る可  
きや必せりいてや筆をあらためて此等健兒が入  
寮宣誓式の模様を記さん

点鐘午後の四時を報るや寮生は先例により本  
校至誠堂に集り次て校長舎監及ひ寮務課員着席  
せらる座定るや校長は徐ろに演壇に登り謹嚴あ  
る口調もて自習寮設立趣旨より説き起し學業  
の奨励体育の鍛練固より重んずしと雖も特に  
主とする所は品性の陶冶にありと喝破し諄々訓  
示ありて降壇次に西田舎監が懇篤なる諭示佐野  
主任が入寮生に關する報告終るや寮生總代西成  
伍氏進んで左の宣誓文を朗讀す

生等自今首として本寮の箴規に則り夙夜匪  
勉共に導き俱に礪き以て生徒心得の趣旨に  
副はんことを期す爰に入寮の初に方り誠惶  
以て誓ふ



一同亦た立て心に深く校則寮規を遵守すべきを誓ふ丈夫一度言をなす九鼎大呂よりも重し祝して畏くも至尊の勅語の御前に立ち至誠て雄勳ある扁額の下に列して此宣誓をす言責何んぞ輕うらんや一同容を改め堂内森として聲なく落葉窓外に翻りていとし蕭烈の念を増さしむ式終るや順次退場す後校長始め十數名の來賓職員と共に食堂に於て會餐す腹を撫して餘豪を示す勇將あれば飯櫃を擁して賄の小僧を苦しむる猛卒あり甲談して乙笑ひ悠々時の進むを忘れ和氣霽然たり既にして暮色蒼然夕陽傾くや我等が待ちにまちし大茶話會の時刻となりぬまたも點鐘は鳴りぬ無量の満足と無限の快樂を共にせし會食者漸く無聲堂に赴き舊寮生醫學專門校學生及び各級の總代者陸續として來り集る者殆ど八十名顧れば電燈皎として堂内晝れ如く紅緑を挿みし花瓶は之れと相映して美益々加はるやがて曉

曉たる君が代は寮生の樂隊によりて三奏せられ開會の辭は寮委員山岸君乃壯快なる辨によりて告げられきその後杉森舍監は諭示し佐野主任は希望を陳へる續きて上野土田笠井松繩の諸君此他寮生數名あるは所感にあるは希望にいつれも肺肝を吐露せられたり既にて演説も終りたれば法戰問答ある題の下に滑稽ある喜戲は演せられ次て專門校某生の講談あり風容眞に迫り談妙所に至るや喝采四方に湧く斯くて餘興はいよいよ進みて福引とはありぬ餘興掛の籤を持し來るやあるは三分間演説の福引を取りて困却しあるは異様の品を手にして苦笑しあるは劍舞あるは吟詩の籤に當り千態萬狀、愈々出て愈々奇喝采四方に起り笑聲堂は滿つ次て寮生園田君の薩摩琵琶あり吐音朗々其調悲壯眞に壯絶の極みなりき時に天地寂漠として夜は沈々無聲堂内獨り和氣滿々たりされと來賓者に迷惑のあらんを

憚り隨意散會を告げて君が代を三唱し樂隊之に和せり今や歸りを急ぐものは去りぬ残るは徹霄猶ほいこはさるの健兒鶴首待つまもあらせずえりににりたる健兒の大相撲はあらはれぬ東より出て西より出て龍鬬虎格火花を散らす様勇ましあんごいはんもれるかあり里見山は横綱頗るの大出來軀幹亦之にうあひぬ夜は深更となりて四面に人聲あし此に忽ち四高萬歳の聲沸きまたも時習寮萬々歳は響きぬ

起て寮に歸れば梧桐秋風に聲あり獨り辰星の北斗に間にきふめくを望みぬ (眠鳳)

## 寮歌の撰定

北辰星下六百の健兒が中堅となり、主動者となるべきは、是れ即ち吾が時習寮生が職責にあらずや賢明ある校長閣下を始め諸教官が多年本寮の擴張と完美とに苦慮せられ、先進諸兄が熱烈なる真情と暗澹たる經營とを以てして努力盡瘁

到るざるなりーもの、亦以て吾人の言の證跡となすに足らん、吾人は此大任を完成し、一は以て本校の旨趣に副ひ、一は以て先輩諸兄の遺言に悖らざらんことを務む、而も非才不佞、左視右顧すれば、尙日暮途遠きの感を免れず、徒らに汗顔愧死せしむるの嘆あり、遮莫、男兒一片の志氣あるところ、金鐵何の累するものぞ、われに稜々の意氣有り、われに三尺は双腕あり、希くは聊か以て恃むに足らん、寮歌なるものは即ち此意氣の發露あり、表現なり、吾人の志す所此處にありて、本校の主旨先輩の所期、亦それに外なふざん、巧を求め妙を飾るが如きは他に其人あるべし、吾人の吐露するところは唯至誠是れのみ、敢て虛豪を衒ひ、纖巧を備はざる也、其歌に曰く、

翅を張れる大鵬の 行くへを雲に慕へつゝ  
尊き勅語仰ぐなる 其名のうしき時習寮。



はるかに見ゆる希望をば　　こゝろやきわたる

北辰れ

學びの庭に屬しつゝ

いそしみつこむる學び男よ。

白峯嵐の寒き日も　　北海波のあるる夜も

一つの窓に影なぐべ　　千巻の書を學ぶあり。

月の影ちる草の露　　虫の音しげき宵々も

故郷遠き父母の　　深き恵みを身にみて。

花さく夕窓れ邊を　　照す燈火いこあかく

同じ心の學び男が　　望の光うるとしや。

雪に明けもくあさぼけ　　井の水たゞへ薪

ひろひ　　交り清き學び男が

つとめみがくは唯至誠。

其赤心の筆の花　　みそくに高く匂ひつゝ、

あつき涙の露の上に　　星の光りも映るあり。

よしや行く手は遠くとも　　運命の征矢はつ

れあくも　　圖南の翼成らむとき　　萬里の波

を凌ぎてむ。

時習寮第二回茶話會記事

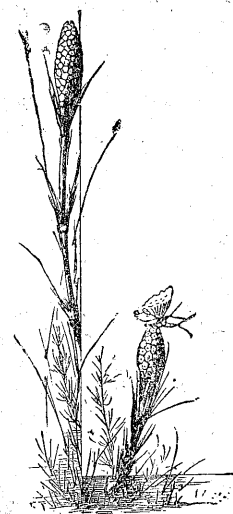
明治三十四年十一月三日天長の佳節を卜して吾校は第九回陸上大運動會を開きぬ、北斗星下知行を研ぐ健兒の豪壯の氣場に満ちて快又盛、わが時習寮生亦金風爽りある秋れ一日に躍動して運動場裡の桂花を謳はれぬ、此の日運動會了へて後、吾が時習寮は本學年第二回の茶話會を開けり、時方に夕陽、荒波高き北海の沖に消えて暮風蕭々金城趾畔に起る、一打れ鳴鐘開會を報じて滿寮の好丈夫堂に満てり、西田佐野吉村石川の諸先生亦雜て此中に在り、談笑四方に湧き喜戯百出す、師弟膝を交へて慈父愛子の相會するが如き和樂、將た何れの處にか求むべき、八拾有餘のメンバーを有する一大ホームは是れ吾時習寮の生活に非らずや、げに樂しきは師弟の團樂和樂にぞありける、暫くにして校長の臨席あり、依つて一同に茶菓を

頒ち、次て佐野先生の演説あり、其要旨は含秀楊秀（寄附花瓶の銘、村上教授撰）に基きて、寮生一同が斯く相會して洋々たる睦親狀を見るは極めて悦ばしき事なりと雖も、吾人は尙益々奮勵振起すべき向上的覺悟を有するもの、希くば切瑳琢磨校風を發揮し、知徳を修養し、以て吾校學生否寧ろ學生社會全般の模範たるを期せよといふにありき、やがて餘興は來りぬ、其劈頭第一に現われしは神保君、福田君、齋藤君等の曲技なり、各獨特の妙技を演じて滿場喝采の聲高く逆立、猫返、釣舟の如きは既に其技堂奥に入りたるものか、次に現はれしは君及び君の狂言にして、二氏に斯道に於けるや、夙に達人の目あり、其筋書は恐らくはロマン君の手にありしもの乎、頑強嚴峻の勇士と雖も、破顔一笑する底の妙諦ありき、次は所謂寮内拾傑の投票あり、拾傑とは抑も何ぞ、大食家、曰

く朝寢坊、曰く放屁家、曰く吞氣家、曰く滑稽家、曰く屁理窟屋、曰く氣取屋、曰く彌次馬、曰く沈黙家、曰く勉強家はれあり投票の結果、日頃斯道のおほん大將達目出たく當撰せられて迷惑がるもあれば、笑倒するもあり、乃ち當撰者は夫々格恰の賞品を與へられ、大に會衆の喝采を博す、拾傑投票終るや、月世界に旅行てふ餘興あらはれぬ、是れ當日餘興係の最も智慧袋を絞りしものにして、撃拆一聲電燈忽ち滅して只見る一片の白布朦朧として際涯なき空間に懸れるをやがて貴紳令嬢の道行きぶりあり、護送巡査の犯人諸共深谷に陷落するあり、雲つくばかりのチャイアントは數名の人を掌上に弄するあり侏儒の長脚山人の股下に這ふあり、忽ちにして百花爛熳の春郊とあり忽ちにして百鬼夜行の狂態と現出す、奇態百出妙趣盡さず、其趣向眞に愛すべし、されど時は移りて夜既に更けぬ、由

て委員は一場の挨拶を述べて君が代の三唱に會  
を閉づ。

弦月高く中天に懸りて高潔なる健兒のまどゐを  
嘉するに似たり。



## 投書心得

一 投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一 長文と雖も全文を寄贈せざれば掲載せざ

一 雑誌上には雅號のみを記載することを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道  
あるべし

一 學理上の論說諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を  
論じ或は徳義に背くものは一切掲載致さざるべし

明治三十五年四月十二日印刷  
明治三十五年四月十五日發行

編輯兼發行者

吉 村 政 行

印 刷 者

生 沼 倍 男

印 刷 所

商法施行  
前設立 活版合資會社  
同縣同市大町二番丁二十九番地  
同縣同市高岡町三十四番地

發 行 所

第四高等學校校友會

